

ヲ得ル時モ亦更ニ其旨ヲ届出ヘシ

第四條 凡遺失ノ物ヲ得レハ之ヲ其主ニ還スト雖モ其費用ヲ償ハシムルヲ得且得者ニ報勞ノタメ其物價百分ノ五ヨリ少カラズ貳拾ヨリ多カラサル金圓ヲ給スヘシ若シ物主得者ト其價格ヲ爭フ時ハ官之ヲ評價人ニ托シテ其價ヲ定ム

第五條 凡遺失物ヲ得ルニ物品盜賊ニ係ルモノハ直ニ官ニ送ルヘシ官之ヲ其主ニ還シ止タ其費用ノミヲ償ハシム

第六條 官私ノ地内ニ於テ埋藏ノ物品ヲ掘得ルモノハ之ヲ官ニ送ルヘシ其主分明ナラサルモノハ地主ノ所有ニ歸スヘシ若シ借地人其借地ヨリ掘得タルトキハ之ヲ地主ト中分セシム(十四年第二號布告ヲ以テ但書共改正)但盜賊ニ係ルモノハ此限ニアラス

第七條 凡遺失ノ物ヲ得ルニ若シ其物耐久シ難クシテ其主分明ナラサル時ハ迅速ニ之ヲ官ニ送ルヘシ官之ヲ公賣シ其代價ヲ領置シ榜示シテ處分スルコト第二條ノ如シ

十四年第七十二號布告例處斷方參看以下條之第十三類ニ載ス

第八條 凡家畜ノ類他所ニ逸走スルモノハ之ヲ遺失物ト稱スルヲ得スト雖モ其主ヨリ之ヲ官ニ報シ及ヒ得者ニ其費用ト報勞金ヲ給與スルヲ第三條第四條ニ同シ若シ他人ノ財産ヲ毀損スル時ハ律ニ照シテ處分ス

第九條 凡逸走スル畜類ヲ得タル者其主分明ナラサレハ之ヲ官ニ送ルヘシ若シ八日內其主ナケレハ官之ヲ公賣シテ得者ニ其費用ヲ償ヒ仍ホ代金ノ剩餘アルモノハ之ヲ官ニ領置シ榜示シテ處分スルヲ第二條ノ如シ

第十條 凡遺失物及ヒ逸走畜類ノ官ニ係ルモノハ官ヨリ得者ニ其費用ト報勞金ヲ給スルヲ私物ニ異ナルヲナシ

第十一條 凡警察官吏タル者ハ所部ノ内外ヲ問ハス遺失物ヲ得レハ速ニ之ヲ官ニ送リ全ク其主ニ還付シ其主ナケレハ之ヲ官ニ没ス

第十二條 凡一切應禁ノ物ヲ得レハ遺失及ヒ埋藏ヲ論セス並ニ官ニ没ス

第十三條 凡公私債證書地券諸鑑札等ノ類ハ遺失物ヲ以テ論スル
ヲ得スト雖モ物主ハ得者ニ其費用ヲ償フヘシ

第十四條 凡遺失物及ヒ逸走畜類ヲ得若クハ埋藏物ヲ掘得テ官私ニ
全ク送還セス或ハ物主ノ其主タルコトヲ證明スルニ冒認シテ返還
セサル者ハ並ニ律ニ照シテ處分ス

十九年宮内省第十三號達
十號達ノ件ハ宮内省甲第二
出ルコトハナス

○埋藏物中古代ノ品物處分^{十年九月}內務省甲第二十號布達
明治九年^{四月}太政官第五十六號ヲ以テ遺失物取扱規則中第六條埋
藏物掘得ル者處分ノ儀公布相成候處右物品ノ中古代ノ沿革ヲ徵
スルモノモ有之候ニ付處分前一應當省へ届出檢査ヲ可受其品ニ
ヨリ相當代價ヲ以テ購求シ官私中分ニ係ルモノハ其價格ノ半高
ヲ發掘人へ下附シ該物品ハ永ク博物館へ陳列可致候條此旨布達
候事

但物品ハ先ツ掘出地名及形狀等ヲ詳記シ及模寫スルモノヲ郵
送シ其見込アルモノニテ遞送方相達候後本文ノ通り可取計候
事

○墓地及埋葬取締規則^{明治十七年十月}第貳拾五號布達
墓地及埋葬取締規則左ノ通相定ム

墓地及埋葬取締規則

第一條 墓地及火葬場ハ管轄廳ヨリ許可シタル區域ニ限ルモノトス

第二條 墓地及火葬場ハ總テ所轄警察署ノ取締ヲ受クヘキモノトス

第三條 死體ハ死後二十四時間ヲ經過スルニ非サレハ埋葬又ハ火葬

ヲ爲スコトヲ得ス

但別段ノ規則アルモノハ此限ニアラス

第四條 區長若クハ戸長ノ認許證ヲ得ルニ非サレハ埋葬又ハ火葬ヲ

ナスコトヲ得ス

但改葬ヲナサントスル者ハ所轄警察署ノ許可ヲ受クヘシ

第五條 墓地及火葬場ノ管理者ハ區長若クハ戸長ノ認許證ヲ得タル
者ニ非サレハ埋葬又ハ火葬ヲナサシムヘカラス又警察署ノ許可證

ヲ得タル者ニ非サレハ改葬ナサシムヘカラス

第六條 葬儀ハ寺堂若クハ家屋構内又ハ墓地若クハ火葬場ニ於テ行フヘシ

第七條 凡ソ碑表ヲ建設セント欲スル者ハ所轄警察署ノ許可ヲ受クヘシ其許可ヲ得スシテ建設シタルモノハ之ヲ取除ケシムヘシ但墓地外ニ建設スルモノ亦之ニ準ス

第八條 此規則ヲ施行スル方法細則ハ警視總監府知事「縣令」ニ於テ便宜取設ケ「内務卿」ニ届出ヘシ

○墓地及埋葬取締規則違背者處分^{第十七年十月}第八十二號達
今般第二十五號ヲ以テ墓地及埋葬取締規則布達候ニ付此規則ニ違背スルモノハ違警罪ノ刑ヲ以テ處分スヘシ此旨相達候事

○行旅死亡人取扱規則^{明治十五年九月}第四十九號布告

沿革略記

明治四年四月脱籍無産ノ輩復籍遞送規則ヲ定ム○同年六月行旅病人ノ取扱規則ヲ定ム○同年十二月脱籍無産ノ輩郷里ニ復歸シ生計立チ難キ者ノ處置方ヲ示ス○十年十二月第九十五號達ヲ以テ犯罪決放ノ者并ニ脱籍無産ノ輩其本籍マテノ遞送ヲ廢シ寄留入籍等本人ノ望ニ任ス○十一年十一月第四十七號達ヲ以テ逃亡失踪者ノ永尋ヲ止ム○十五年九月第四十五號布告ヲ以テ行旅死亡人取扱規則ヲ制定ス是レ現行法ナリ○同年九月第五十號布告ヲ以テ脱籍無産ノ輩復籍遞送規則行旅病人取扱規則等四年以來ノ布告達等ハ都テ之ヲ廢止ス

行旅死亡人取扱規則左ノ通制定ス

行旅死亡人取扱規則

第一條 凡ソ引取人ナキ行旅死亡人アルトキ所在戸長ハ之ヲ最寄墓地ヘ假埋葬スヘシ其倒死變死等ニ係ル者ハ警察官ノ檢視ヲ受クヘシ

第二條 死亡人ノ本籍氏名詳ナルキ戸長ハ死亡ノ狀況並ニ埋葬其他

死亡人ニ屬スル費用ノ計算書ヲ本籍戸長ヘ通報スヘシ本籍戸長ハ之ヲ其家ニ通示シ費用ノ辨償ヲ要スルキハ三十日限差出サシメ埋葬地戸長ニ送付スヘシ若シ其家赤貧ニシテ辨償シ能ハサルキハ其本籍地方税ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ

第三條 死亡人ノ本籍氏名詳ナラサルキ戸長ハ其相貌景狀附屬シタル物品場所年月日等ヲ詳記シ三十日間最寄揭示場ヘ揭示シ且兩度以上新聞紙ヲ以テ公告スヘシ公告ノ日ヨリ九十日ヲ過キ仍ホ本籍詳ナラサルキハ該費用ハ地方税ヲ以テ支辨スヘシ

第四條 死亡人所持ノ金錢ハ埋葬其他死亡人ニ屬スル費用ニ供スヘシ又所持ノ物品ハ前條ノ期限ヲ過キ仍ホ本籍詳ナラサルキハ之ヲ公賣シ同上ノ費用ニ充ツヘシ

但本籍氏名詳ナル者其家赤貧ニシテ費用ヲ辨償スルヲ能ハサルキハ直ニ其物品ヲ公賣スルモ妨ケナシ

第五條 死亡人ノ遺財前條ノ費用ニ充テ餘贏アルキハ之ヲ本籍ヘ送

付スヘシ其本籍氏名詳ナラサルモノハ之ヲ五ケ年間戸長役場ニ保管シ仍ホ本籍氏名詳ナラサルニ於テハ地方税雜收入ニ組入ルヘシ

○第十五類 訴訟、民事

○治安裁判所及始審裁判所ノ權限 明治十四年十二月
第八十三號布告

治安裁判所及ヒ始審裁判所ノ權限左ノ通制定ス

第一條 治安裁判所ハ訴訟事件ヲ勸解ス但諸官廳ニ對スル事件及ヒ

商事ニ係リ急速ヲ要スル事件ハ勸解スルノ限ニ在ラス

第二條 治安裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓未滿ノ訴訟ニ付始審
ノ裁判ヲ爲ス

第三條 治安裁判所ハ人事其他金額ニ見積ル可カラサルモノヲ裁判
スルヲ得ス

第四條 始審裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓以上并ニ第三條ニ掲
ケタル治安裁判所權外ノ訟訴ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

第五條 始審裁判所ハ其管轄地内ノ治安裁判所ノ始審裁判ニ對スル
控訴ニ付終審ノ裁判ヲ爲ス

十四年第五十六號布告ヲ
以テ小笠原島裁判ノ權限
ヲ定メ同年第五十七號布
告ヲ以テ伊豆七島ノ民事
裁判權限ヲ定メ治罪登載
第十三類ニ載ス

但控訴ノ手續ハ明治十年第十九號布告控訴手續ニ照準スヘシ

○西郷外十三ヶ所民事裁判ノ權限明治十五年一月
第五號布告

明治十四年月十二 第八十三號ヲ以テ民事裁判權限ノ儀布告候處當

分ノ内西郷相川豐岡洲本田邊脇町高山平戸福江嚴原天草大曲八
戸大島治安裁判所ニ於テ民事ノ訴訟ハ始審裁判所ノ權限ヲ以テ
裁判スヘシ

但請求ノ金額及ヒ價額百圓未滿ノ件ニ關スル控訴ハ管轄始審
裁判所ニ之ヲ爲スヘシ

○裁判事務心得明治八年六月
第三百三號布告

今般裁判事務心得左ノ通相定候條此旨布告候事

第一條 各裁判所ハ民事刑事共法律ニ從ヒ遲滯ナク裁判スヘシ
疑難アルヲ以テ裁判ヲ中止シテ上等ナル裁判所ニ伺出ルヲ得
得ス但シ刑事死罪終身懲役ハ此例ニアラス

刑法治罪法實施以降刑事
ニ係ルモノハ治罪法ニ據

第二條 凡ソ裁判ニ服セサル旨申立ル者アル時ハ其裁判所ニテ

辨解ヲ爲スヘカラス定規ニ依リ期限内ニ控訴若クハ上告スヘ
キヲ言渡スヘシ

第三條 民事ノ裁判ニ成文ノ法律ナキモノハ習慣ニ依リ習慣ナ
キモノハ條理ヲ推考シテ裁判スヘシ

第四條 裁判官ノ裁判シタル言渡ヲ以テ將來ニ例行スル一般ノ
定規トスルヲ得ス

第五條 頒布セル布告布達ヲ除クノ外諸官省隨時事ニ就テノ指
令ハ將來裁判所ノ準據スヘキ一般ノ定規トスルヲ得ス

○

○裁判所ノ呼出ヲ受ケ遲參又ハ不參スル者處分明治十年一月
第五號布告

凡ソ裁判所ノ呼出ヲ受タル者疾病等ノ事故アリテ遲參又ハ不參スル

裁判所ノ呼出ヲ受ケ遲參又ハ不參スル者處分

十四年第七十二號布告別
例處斷方參看第十三類ニ
載ス

時ハ其事故ヲ詳記シ呼出刻限迄ニ其裁判所ニ届出ヘシ若シ右刻限ヲ
過キテ届出ル歟又ハ無届ニテ遅參不參スル時ハ裁判官ニ於テ直ニ五
錢以上拾圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ
右布告候事

○身代限規則 明治五年六月
第百八十七號布告

今般華士族平民共身代限規則被相定候條左ノ通相達候事

但當壬申八月朔日ヨリ施行可致事

華士族平民身代限規則

平民身代限抵償トシテ差押フ可ラサル品類

一時服着替共男女共各一通宛

一夜具 男女共各一通宛

九年第三十八號布告ヲ以
テ帶刀ヲ禁ス

一本人ノ職業ヲ爲スニ必要ナル諸物品但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商
等職業ニ必要ナル書類器械品物等其金額五十兩ニ至ル迄最モ本人
ノ擇ム所ニ任ス可シ其直段ハ貸主借主ヨリ監定ノ者ノ道具屋一人宛
差出シ外入札人ト共ニ入札致サセ 町役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高
札ヲ以テ其價ヲ定ム可キ事

一食料

家族ノ人口ヲ量リ一ヶ月間用井ル飯米ヲ殘シ置ク可キ事

但男丁ハ一日ニ五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合婦女幼少ハ四合麥

ハ八合雜穀ハ一升二合宛ノ事

一鍋釜及炊具各 一通

華士族身代限抵償トシテ差押フル可カラサル品類

一(五年第三百廿七號布
告ヲ以テ本項取消)

一大小類 男子一人ニ付各一腰宛

一冠服 男子一人ニ付各一通宛

一時服着替共男女共各
一通宛
一夜具 男女共各 一通宛

一本入職業ヲ爲スニ必要ナル諸物品

但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商等ノ職業ニ必要ナル書類及諸器械品物等其金額五十兩ニ至ル迄最モ本人ノ擇ム所ニ任スヘシ其直段ハ貸主借主ヨリ監定ノ者道具屋ノ類 一人宛差出シ外入札人ト共ニ入札致サセ村町役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ム可キ事

一鍋釜及炊具類各 一通

右身代限りノ節ハ六十日間裁判所門前高札場並ニ本人家宅へ揭示ヲ出シ其次第傳承日限中追願ノ者ハ取札ノ上可處置事六年第七十テ揭示日數三十日トアルヲ六十日ト改ム

但新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ

一前條ニ記スル所ノ引殘スヘキ必要物件ノ内未タ代價ヲ拂ハサル分

ハ賣主ヨリ日限内訴出レハ現品ヲ取戻スヲ得ヘシ

但現在着用ノ衣服夜具ハ此限ニアラス

一身代限ノ物件ハ入札拂ニ出ス可シ尤金銀器等ノ定價判然タル物品ハ眞價ヨリ低ク賣拂フヘカラス且ツ賣拂金ノ總額ハ其者ノ負債及ヒ右一件ノ諸費用ヲ償フニ過ク可カラス

但入札拂ノ日ヨリ三日前ニ其品物及ヒ場所時刻ヲ裁判所門前并ニ其者ノ居宅及ヒ各地士民群集ノ所へ揭示シ及ヒ新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ且ツ貸主借主ヨリ差出セシ監定ノ者モ他人ト共ニ入札致サセ村町役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以其價ヲ定メ之ヲ現金ニテ取立裁判所へ差出スヘシ

○身代限ノ者ニ對シ貸金等約定期限内處分明治六年七月第二百五十二號布告 負債者身代限ニ遇フ節其者へ對シ貸金穀其他義務ヲ得可キ者定約期限未滿内ノ分處置振左ノ通被定候條此旨相達候事

第一條 貸金穀又ハ義務ヲ得可キ者定約期限未滿内ニハ訴出ル
トナ許サ、ル規則ナレモ其負債者又ハ義務ヲ行フヘキ者右期
限未滿内ニ身代限ニ遇フ時ハ訴出ルコトヲ得ヘシ

第二條 定約期限未滿内ニ訴出ル者ハ滿期後訴出ル者ト同一ノ
權利ヲ有シ身代限財産糶賣金ノ分配ヲ受ルコトヲ得ヘシ

第三條 請人證人等連印ニテ本人返濟相滯ルニ於テハ引受返濟
可致ノ明文之レアル證書ヲ取置タル者ハ本人身代限財産糶賣
金ノ分配ヲ受ケ尙ホ不足アラハ滿期ノ時ニ至請人證人ニ掛リ
之ヲ訴ルコトヲ得ヘシ

第四條 身代限ニ遇フ者期限未滿内ノ者ニハ滿期ノ時ニ至リ返
濟セント欲スル時ハ別段請人ヲ立請人ヨリ動不動産ヲ引當又
ハ質物ト爲シ違變ナキヲ證明シテ原告人ノ承諾ヲ求ルヲ必要トス
第五條 負債者滿期ヲ保スル爲メ改テ請人ヲ立請人ヨリ動不動
産ヲ引當又ハ質物ト爲シ違變ナキヲ證明シ原告人之ヲ承諾ス

ル時ハ其原告人ハ此回ノ身代限財産糶賣金ノ分配ヲ求ムルコ
トヲ得ヘカラス

第六條 定約期限未滿内ノ債主ハ身代限ニ遇フ負債主ニ對シ期
限未滿内ニ訴フルモ滿期後ニ至リ訴フルモ其者ノ情願ニ任ス
ト雖モ身代限ニ遇フ者ノ動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取り置タ
ル債主ハ右動不動産ヲ身代限ノ糶賣ヲ爲スニ付己レノ受取ル
可キ金高ヲ求ムルコトヲ得ヘキ而已ニテ糶賣ヲ爲ス事ヲ拒ムヲ
得可ラス

第七條 動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取置タル者ハ其財産糶賣金
ノ内ニテ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ其定約ノ證書ニ據
リ處分ノ時迄ノ金高ヲ算計シ受取ル可キノ求ヲ爲シ裁判所ニ
於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ引當又ハ質物ヲ取置タル者ニ
分配ス可キ金高ヲ引渡ス可シ

第八條 引當又ハ質物ヲ取置カサル金穀ノ債主定約期限未滿内

ニ訴出ル時ハ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ定約ノ證書ニ據リ處分ノ時迄ノ金高ヲ算計シ受取ヘキノ求ヲ爲シ裁判所ニ於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ處分ヲ爲スヘシ

○身代限財産中質入書入ノ地所處分明治八年四月 第五十三號布告

地所ノ質入書入ハ尋常ノ私約ト違ヒ戸長役場ノ帳簿ニ記載シテ奥書割印モ之レアル公正ノ證書ニ付若シ身代限り財産中質入又ハ書入ノ地所アリテ其債主揭示中ニ訴出サル節ハ其地所糶賣代價ノ中ニテ債主受取ルヘキ元金高ニ糶賣金配當ノ日マテノ利息ヲ加ヘ第一番ニ引キ去リ裁判所ニ於テ之ヲ糊封シ掛リ官員兩名調印ノ上戸長役場ニ預ケ置キ後日債主願出次第相渡スヘク候條此旨布告候事

但質入書入ノ金高及ヒ利息等不分明ノ節ハ本人呼出シ取調可申事

○異産ノ子弟及隱居身代限處分明治五年九月 第二百七十五號布告

父兄ト同居ノ子弟或ハ別居シテ財産ヲ異ニスルモノ又ハ父既ニ家督ヲ其子ニ讓リ隱居別宅シテ財産ヲ異ニスル者自今一己ニ金銀借受候分其證券中本家ノ戸主保證ノ調印無之上ハ貸主ニ於テ本家ノ財産ヲ目的トシ貸シ與フル筋無之候ニ付若シ右等ノ者共返金相滞訴訟ニ及ヒ候節同居ノ者ハ其身所持ノ品物ノミ分産異居ノ者ハ其財産ノミヲ以テ之ニ當テ身代限りニ裁判申渡候條爲心得此段相達候事

○僧侶身代限規則明治六年三月 第八十八號布告

僧侶借財滯出入ニ付身代限規則左之通被相定候條此段相達候事

僧侶身代限規則

抵償トシテ差押フ可ラサル品類

一食料

寺内ノ人口ヲ量リ僧侶ハ一日ニ五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合尼及婦女幼少ハ四合麥ハ八合雜穀ハ一升二合宛一ケ月間

用フル飯米ヲ殘シ置クヘキ事
一建物

法用ニ必要ナル箇處

但本堂等へ建添候トモ榮耀ニ屬スル箇所ハ此限ニアラス
一寄附帳ニ記載スル部分

一什物帳ニ區別シテ記載スル古來傳承ノ寶物並法用ニ必要ナル部分

一法衣寺主並所化及尼共各一通宛

一時服着替共寺主並所化及婦女共各二通宛

一夜具寺主並所化及婦女共各一通宛

一鍋釜及炊具類各一通

一本人職業ヲ爲スニ必要ナル金額五十兩ニ至ル迄ノ物品ヲ差除ク等其他ノ方法ハ華士族平民身代限ニ同シ

○僧侶身代限ニ付寺院所有物處分明治六年三月
第八十九號布告

今般僧侶身代限規則被相定候ニ付テハ寺院所有ノ田園建造物諸器什檀家ヨリ寄附ノ分又ハ法用ニ必要ナル分並ニ古來傳承ノ寺寶等ノ部分判然相立不申候テハ差支候條左ノ規則ニ從ヒ寄附帳什物帳相綴リ置可申候
一寄附帳ニハ何年何月何誰寄附ノ田園反別建造物坪數諸器物ノ質分ニ至ルマテ詳細ニ記載スヘシ
一什物帳ニハ法用ニ必要ノ分並ニ寺寶ヲ區別シ記載スヘシ
一右二帳ニ部ツ、相綴リ檀家法類共兩人以上並ニ其地ノ戸長檢査ノ上各姓名ヲ署シ之レニ調印シ一部ハ戸長役所ニ藏シ一部ハ其寺院ニ藏シ置ク可シ
右之通相達候事

○身代限ノ者他ニ貸附ノ金穀證文アルハ處分七年九月
司法省第廿三號達金穀ヲ借り返濟ヲ爲シ能ハサル者裁判所ノ處分ニ因リ身代限ニ遭ヒ候トキ所有物ノ内他人へ貸附置キタル金穀ノ證文之レアル

節ノ取扱振明治五年壬申第四十號ヲ以テ相違置候處詮議ノ次第有之左之通改正候條此旨相達候事

第一條 各裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ爲スニ當リ身代限ニ遭フ者ノ物件ノ内ニ身代限ニ遭フ者ヨリ他人ヘ貸附置キタル金穀ノ證文有之時ハ其證文ノ定期期限ノ滿未滿ヲ論セス證文ニ記名シタル債主ヘ眞偽ヲ尋テ無相違時ハ其負債主ヨリ證文ニ面ノ通り可受取旨身代限ニ遭フ者ノ債主ヘ申渡シ別紙離形ニ倣ヒ證文ニ裏書ヲ爲シ其債主ニ可相渡事

第二條 前條ノ場合ニ於テ債主其證文ヲ受取ルヲ好マサル時ハ其證文ハ身代限ニ遭タル者ニ所持致サセ置クヘキ事

但シ定期滿期ノ證文ニテ負債主ノ家産些少ナルモ身代限ニ遭フ者ノ債主ニ於テソノ負債主ノ身代限ヲ以テ現金ノ割賦ヲ受度旨申立ルニ於テハ望ノ通處分スヘキ事

第三條 債主數名ニシテ身代限ニ遭フ者ヨリ他人ヘ貸附置キタル金穀ノ證文一通又ハ數通ナル時ハ數名ノ債主ニ入札致タサセ落札ノ金員ヲ以テ其落札シタル債主ト其他ノ債主トヘ金高ニ應シ配當ソノ落札ノ證文ニハ一通毎ニ第一條ノ方法ニ據リ處分スヘキ事

但シ數名ノ債主盡ク入札ヲ好マサル時ハ第二條ノ處分ニ及フヘキ事

第四條 證文ヲ落札シタル債主證文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取リタル時ハ其金員中ヨリ己レノ受取ルヘキ金高ト之レ

ヲ受取ルニ付テノ諸入費ノ金高トヲ引去リ其餘金ハ證文ニ記載ナル債主ニ返シ而シテ右ノ計算ヲ爲シタル明細勘定書ト餘金ヲ返シタル請取書トヲ以テ裁判所ニ届出ツヘキ事

第五條 若シ證文ヲ落札シタル債主證文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ントスルニ證文ニ記名シタル負債主モ亦ク身代限ニ遭ヒテ證文ニ記名シタル金員ノ全部又ハ幾部ヲ返シ能ハサルトキハ證文ニ記名シタル負債主ヨリ證文ヲ落札シタル債主ニ對シ右ノ部分ノ金員ヲ身代持直次第返濟スヘキ旨ノ證文ノ裏書ヲ裁判所ヨリ受取ルヲ得ヘキ事

但此時曩ニ身代限ニ遭ヒタル者ノ裏書證文ヲ持出ヘシ裁判所ニ於テハ之ニ金員ノ差引ヲ記載シ二通ノ證書ヲ一綴ニシテ下附スヘシ

第六條 證文ヲ落札シタル債主證文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ルヘキ期限ニ至ラサル時證文ニ記載シタル債主即チ曩ニ身代限ニ遭ヒシ人已ニ身代ヲ持直シタルトキハ直ニ其人ニ對シ再ヒ穀金ノ返濟ヲ請求スルヲ得ヘキ事
(證文裏書離形略ス)

○利息制限法 明治十年九月 第六十六號布告

利息制限法左ノ通相定候條此旨布告候事

第一條 凡ソ金銀貸借上ノ利息ヲ分テ契約上ノ利息ト法律上ノ利息トス

第二條 契約上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ定メ得ヘキ所ノ利息ニシテ元金百圓以下ハ一ケ年ニ付百分ノ二十二割 百圓以上千圓以下百分ノ十五^{一分}割 千圓以上百分ノ十二^{一分}割 以下トス若シ此限ヲ超過スル分ハ裁判上無効ノモノトシ各其制限ニマテ引直サシムヘシ

第三條 法律上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ利息ノ高ヲ定メサルキ裁判所ヨリ言渡ス所ノ者ニシテ元金ノ多少ニ不拘百分ノ六分トス

第四條 第二條ニ依リ定限利息ノ外總テ人民相互ノ契約ヲ以テ禮金 棒利等ノ名目ヲ用ル者アルモ總テ裁判上無効ノ者トス

第五條 返還期限ヲ違フルキハ負債主ヨリ債主ニ對シ若干ノ償金罰

金違約金料料等ヲ差出スヘキヲ約定スルコトアルモ概シテ損害ノ補償ト看做シ裁判官ニ於テ該債主ノ事實受ケタル損害ノ補償ニ不當ナリト思量スルキハ之レニ相當ノ減少ヲ爲スコトヲ得

○無利息貸金預ケ金地代手附金等利息請求方 六年三月 司法省 第四十三號 布告

- 預ケ金穀
 - 諸職人手間代
 - 店賃
 - 敷金
 - 受負金
 - 小作金穀
 - 雇人給金
 - 諸品ノ損料
 - 無利息貸金穀
 - 賣掛代金
 - 地代
 - 立替金穀
 - 證據金
 - 手附金
 - 村入用ノ割合金穀
 - 飯料
- 右ノ類ニテ金穀等可相渡期限ニ臨ミ渡方延滞致候節ハ其期限ノ日且期限ナクシテ金穀入用次第可相渡旨ノ約定ヲ爲シタル分ハ渡方ノ掛合ヲ受ケ候日ヨリ何レモ利足ヲ生シ可申筋ニ付其節ハ雙方示談ヲ以テ利足ノ歩合ヲ定メ證書受取渡シ致スヘシ若シ其儀ナクシテ追テ訴訟ニ及フ時ハ明治六年第九十二號布告ニヨリ

處分致シ候條此旨可相心得候事
但債主利息ヲ請求シテ負債者承諾セサル時ニ限り本文ノ處分
ニ及フ可シ若シ雙方示談整フカ又ハ債主ニ於テ請求ヲ爲サ
ル分ハ此例ニアラス(七年司法省第二十二號
布達ヲ以テ但書追加)

○ 訴答文例 明治六年七月
第二百四十七號布告

今般訴答文例并附錄別冊ノ通被相定候ニ付來ル九月一日ヨリ原被告
人共訴答文式都テ此例ニ照準可致此旨相達候事

(別冊)

訴答文例

第一卷 原告人ノ訴狀

第一章 原告人ヨリ被告人住所身分ノ書付ヲ取ル事

第一條 訴訟ヲ爲サントスル原告人ハ其管轄ノ村役場ノ添翰ヲ以テ

六年第三百三十九號布告
ナリテ訴答文例ハ當分御
國人ノ遵守セシム

被告人ノ現住管轄ノ村役場ニ至リ被告人ノ身分ノ書付ヲ取タル後
訴狀ヲ作ル可シ若シ住所氏名身分明瞭ナラハ其書付ヲ取ルニ及ハ
ス

住所トハ某府縣管下某國某郡某村住居又ハ寄留ト記スノ類身分トハ
官名役名華族士族神職僧尼百姓何職何商賣何渡世ト記スノ類
若シ一戸ノ本主ニ非スシテ子弟又ハ厄介ノ類ハ某ノ子弟又ハ某厄
介ト記ス可シ

第二條 原告人被告人ト管轄ヲ異ニシ道路隔絶ナラハ原告人我管轄
ノ村役場ニ願ヒ役場ノ文通ヲ以テ被告人ノ氏名住所身分ノ書付ヲ
取ルモ亦妨ケ無シトス但シ役場文通ノ入費ハ原告人ヨリ償フ可シ
但此章原告外國人ナル時ハ本人名前本國職分及寄留ノ處ヲ訴狀
中ニ記載シ次ニ被告ノ名前職分住所等委細記載ス可シ

第三條

第二章 (七年第七十五號布告ヲ
以テ代書人用ヒ方改定)

第四條

第五條

第三章 訴狀ノ定則ノ事

第六條 訴狀ヲ作ルニハ左ノ定則ニ循フ可シ

第一 訴狀ハ簡明確實ニシテ憑據ト爲ス可キ事件ヲ掲ケ文飾冗長ナラサルコトニ注意シ自己ノ想像ヲ以テ踪跡ナキ事件ヲ述ルコトヲ得ス

第二 一切ノ訴狀ハ首ニ原被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書ニシ其末ニ年月日ヲ記シ原告人ト代書人トノ氏名連印スヘシ附錄一 號ヲ見合 ス可シ

但外國人ノ爲ニハ第一章但シ書ヲ見ル可シ

第三 訴狀ノ末ニ署スル氏名ハ其本人自署ス可シ若シ自署スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記スヘシ

第四 訴狀ハ十六行ニシテ一行十五字詰ニ認メ正副二通ヲ具ス可

十七年三月司法省甲第一號告示ヲ以テ訴訟用紙ハ一

英渡又ハ同尺ノ紙ヲ用ヒ
定枚貳拾四行貳拾字詰ト

シ

但外國人ノ訴狀ハ銘々英佛語ヲ以テ認ルコトヲ得ヘシ其日本翻譯ハ裁判所ニ於テ正副二通ヲ認メ其手数料ヲ取立ツヘシ

第五 被告人ノ住所呼出ヲ受ク可キ裁判所ノ八里ノ距離外ニ在ル時ハ其里數ヲ被告人ノ氏名ノ左測ニ記載ス可シ若シ八里以内ナル時ハ其里數ヲ記載スルニ及ハス

第四章 訴狀ノ書式ノ事

第七條 貸附米金等淹滞ノ訴狀

貸附米金等淹滞ノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ米金元利ノ計算ト貸渡シタル年月日トヲ標記シ次ニ證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ期ヲ過キテ返済セサル事情ヲ書ス可シ附錄第二號ヲ見合ス可シ

田畠ヲ貸渡シタル小作米金又ハ物品ノ損料金又ハ諸種ノ立替金又ハ召抱人等ノ引負金又ハ職人等ノ前貸米金又ハ貸地貸家等ヲ受取ラントスルノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

但以下十九條迄原告外國人ナル時ハ其訴訟ノ趣意并願意ヲ簡明ニ記載ス可シ

但附錄第十八號ヲ見合ス可シ

第八條 預ケ米金淹滞ノ訴狀

預ケ米金淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ米金ノ員數ト預ケタル年月日トヲ標記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約シテ返濟セサル事情ヲ書ス可シ

借地等ノ敷金又ハ妻及ヒ養子女等ノ持參金又ハ實家若クハ親族等ノ仕送り金ヲ受取ントスルノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

第九條 賣掛代金淹滞ノ訴狀

賣掛代金淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ金高ヲ標記シ次ニ其帳面總計ノ高ヲ出シ之ニ被告人ノ證印アルコトヲ記入シ次ニ違約淹滞シタル事情ヲ書ス可シ附錄第三號ヲ見合ス可シ

賣掛代金又ハ旅籠代金賄代金等通帳附込帳等ニ被告人ノ證印ナキ

時ハ原告人ノ證據ト爲スコトヲ得ス

第十條 手附金買違約ノ訴狀

諸物品ヲ買ヒ手附金ヲ渡シ約定期限内ニ殘金ヲ渡サントスル時ニ至リ被告人違約シテ諸物品ヲ渡サ、ルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ買付タル物品ノ總高次ニ手附金ヲ渡シタル年月日及ヒ殘金ヲ渡シ物品ヲ受取可キ約定期限ノ年月日ヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ附錄第四號ヲ見合ス可シ

諸物品ヲ賣リ手附金ヲ受取り約定期限ニ至リ殘金ヲ受取ル可キ時ニ被告人違約シテ殘金ヲ渡サ、ルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ手附金ヲ受取りタル年月日及ヒ殘金ヲ受取り物品ヲ渡ス可キ約定期限ノ年月日ヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ附錄第五號ヲ見合ス可シ

第十一條 受賃料淹滞ノ訴狀

諸職業受賃淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ受賃ヒタル年月日ト受賃

ノ金高ト既ニ受取リタル金數ト未タ受取ラサル金數トヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ

第十二條 奉公人違約ノ訴狀

奉公人ニ年期ヲ約シ前金ヲ渡シ其年期未滿内ニ其家ヲ出テ還ラサル者ヲ取返サントスルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ抱入レタル年月日ト約定ノ年期ト前渡シノ金數トヲ標記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ

職業傳習ノ弟子職業練熟ノ後ハ禮奉公ノ年期ヲ約シ年期未滿内ニ其家ヲ出テ還ラサル者ヲ取戻サントスルノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

奉公人又ハ弟子奉公ノ者等其主人師匠ヨリ受取ル可キ給米金淹滞ノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

第十三條 專賣免許ヲ犯シタルノ訴狀

專賣ノ免許ヲ得タル者ヨリ他ノ摸倣密賣スル者ヲ差留メントスル

ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ專賣免許ヲ得タル年月日ト免許ヲ受タル役所ノ名ト專賣免許ノ年限トヲ標記シ次ニ免許ノ證印又ハ證書ヲ寫載シ次ニ其密賣ノ事情ヲ書ス可シ

諸商工專賣ノ免許ナクシテ株式ト稱スル者ハ自己ニ妨アルヲ以テ他人ノ商業ヲ差留ル事ヲ訴ルヲ得ス

第十四條 商社中取引ノ訴狀

商社中甲ノ商人ヨリ乙ノ商人ニ對シ各種ノ取引ノ米金又ハ物品ノ類ニテ乗合商賣ト稱スル者モ證書確實ナル者ハ之ヲ訴ルコトヲ得可シ其訴狀ハ取引ノ模様ニ付キ各種ノ本條ニ照ス可シ

先ニ開キシ商社ニ後ニ開カントスル商社ノ妨クルヲアルヲ以テ之ヲ訴ルヲ得ス但シ專賣免許ヲ犯スヲ得サルノ法ト相牴觸スルヲナカル可シ 第十三條ヲ見合ス可シ

第十五條 夫妻離別ノ訴狀

夫妻離別ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ夫妻ノ氏名生年及ヒ婚姻ノ年月

日ヲ標記シ次ニ其戸長役場へ届置キタル戸籍人別ヲ寫載シ次ニ離婚ヲ爲ス可キ原由ヲ書ス可シ

原告人夫ナレハ其父母若シ父母在ラサレハ祖父母祖父母在ラサレハ尊族ノ親尊族ノ親在ラサレハ同等ノ親同等ノ親在ラサレハ卑族ノ親卑族ノ親在ラサレハ近隣又ハ朋友ノ内二人以上ノ奥書連印ヲ爲ス可シ附録第六號ヲ見合ス可シ

原告人妻ナルモ前條ニ照シテ其父母親族等ヨリ訴フ可シ若シ事危急ニ出テ親族等ニ告ルニ暇ナキ時ハ自ら訴フ事ヲ得可シ

第十六條 養子女ヲ離別スル訴狀

養子女ヲ離別スルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ養父母及ヒ養子女ノ生年ト其養子女トナシタル年月日ヲ標記シ次ニ原被雙方ノ戸籍人別ヲ寫載シ次ニ離別ス可キ原由ヲ書シ原告人親族在ラサレハ近隣又ハ朋友ノ内二人以上ノ奥書連印ヲ爲ス可シ

本生父母ヨリ養子女ヲ取戻サントスルノ訴狀モ本條ニ照ス可シ若

シ本生父母在ラサレハ其親族ヨリ訴ルヲ得ヘシ

養子女ヨリ養父母ヲ相手取りテ自ら離別ヲ請ノ訴ヲ爲スヲ得ス

第十七條 家督相續ノ訴狀

家督相續ヲ争フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ亡父母ハ死亡ノ年月日生父母ハ其生年ト原被告人生年トヲ標記シ次ニ其原被雙方ノ戸籍人別ト讓狀遺狀等ノ證書アレハ其全文ヲ寫載シ次ニ自己相續ス可キ條理ト被告人相續ス可キ條理ヲキトヲ書ス可シ附録第六號ヲ見合ス可シ

第十八條 田島山林等賣買違約ノ訴狀

田島山林屋敷建家等ヲ買ヒ之ヲ受取ラントスルノ訴狀及ヒ貸地貸家ヲ取戻サントスルノ訴狀モ第十條ノ第一項ニ照ス可シ

田畑山林屋敷建家等ヲ賣リ之ヲ引渡シテ其代價受取ラントスルノ訴狀モ第十條ノ第二項ニ照ス可シ

第十九條 經界ヲ争フノ訴狀

國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ争フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ其舊記繪

圖ノ枚數ヲ標記シ次ニ被告人ノ非理ヲ書ス可シ
舊記繪圖ノ寫ハ別冊ト爲シ目錄ヲ附シ各番號ヲ朱記ス可シ
繪圖ハ色ヲ以テ區別シ原告ノ區域ハ淺紅色ヲ用ヒ被告ノ區域ハ黃色ヲ用ヒ争フ所ノ區域ハ着色ヲ用ヒス其他ノ經界ハ別色ヲ用ユ可シ
附錄第七號ヲ
見合ヌ可シ

但第七條但シ書ヲ見ル可シ

第二十條 控告ノ訴狀

原告人預審又ハ終審ノ裁判言渡ヲ受ケ其裁決ニ服セスシテ之ヲ上等ノ裁判所ニ控告セントスルノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ訴訟ノ題目ト其年月日ト裁判所ニ呼出サレタル度數其年月日ト訟庭ニ臨ミタル裁判役ノ氏名ヲ知ルヲ得可キニ於テハ之ヲ記載シ次ニ其裁判言渡書ノ寫ト裁決ニ服セサルノ旨趣トヲ書シ且ツ前訴狀ノ寫ヲ別冊ト爲シ訴出可シ但シ控告人ノ住所ト控告ヲ爲ス裁判所トノ距離八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ得ルノ外裁決ノ言渡ヲ受タル日ヨリ三ヶ月

十年第十九號布告實際
告手續第五條第十五條參
看本類ニ載ス

ノ期限ヲ過ル時ハ控告ヲ爲スヲ得ス

預審又ハ終審ノ裁判以前ノ場合ニ於テ其裁判役ノ曲庇壓制等アルヲ以テ原告人ノ之ヲ上等ノ裁判所ニ申告スル者モ亦本條ニ照ス可シ

第五章 一冊ノ訴狀ハ一事件ニ止ル可キ事

第二十一條 原告人共人員多少ニ拘ラス訴狀ハ一事ヲ一冊ニ書スルニ限ル可シ又原告人一名ニシテ同時ニ數件ヲ訴フルモ訴狀ヲ各冊ニ作ル可シ

第六章 一冊ノ訴狀ニシテ二件以上ヲ合スルヲ得ル事

第二十二條 貸借ニ事以上ニシテ原告人共別人ニ非レハ一冊ノ訴狀ニシテ二件以上ヲ合スヲ得可シ

第七章 原告人連名ノ訴狀ノ事

第二十三條 債主連名ノ證文ヲ以テ米金等ヲ貸附タル訴狀ハ連名ヲ以テ訴フ可シ若シ債主連名三人ナルヲ一人ニシテ訴フル時ハ他ノ

一人ヨリ依頼ノ證書ヲ以テ訴フ可シ録附第八號ヲ
見合ヌ可シ

第二十四條 債主二人以上ニシテ管轄ヲ異ニスル者アラハ甲ノ管轄ニ訴ルモ乙ノ管轄ニ訴ルモ其便宜ニ從フ可シ

第八章 連名ノ被告人ヲ訴フル事

第二十五條 負債主連名ノ借用證文ヲ以テ貸渡シタル米金等ノ訴狀ハ連名ノ人數ヲ盡ク相手取ル可シ

第二十六條 負債主連名中若シ失踪死亡等ニテ相續人ナキ者アラハ連名ノ末ニ其人名ヲ記シ年月日失踪死亡等ノ事ヲ其者ノ管轄戸長某ヨリ承ルト附載スヘシ附錄第九號ヲ
見合ヌ可シ

第二十七條 負債主ノ連名中管轄ヲ異ニスル者アラハ甲ノ管轄ニ於テ審判スルヲ願フモ乙ノ管轄ニ於テスルヲ願フモ原告人ノ情願ニ任ス可シ

第九章 讓證文ヲ以テ訴フル事

第二十八條 甲ヨリ乙ニ貸シ又ハ預ケタル米金ヲ甲ヨリ丙ニ讓リタ

九年第九十九號布告金數
借用證書他人へ讓渡手續
空若本類ニ載ス

ルニ乙ヨリ丙ニ返濟セスシテ丙ヨリ乙ヲ相手取り其米金ヲ受取ントスル訴狀モ住所氏名ノ次ニ甲ヨリ丙ニ讓リタル證文ヲ寫載シ若シ甲ヨリ丙ニ讓リタル證文無レハ甲ト乙ノ關係ニシテ乙ト丙トノ關係ナシトス故ニ丙ヨリ乙ヲ相手取ルヲ得ス附錄第十號ヲ
見合ヌ可シ

第二十九條 父母祖父母等ノ貸附タル米金等ハ其家ノ相續ヲ爲シタル者ニ非レハ其子孫ニシテ貸附證文ヲ所持スト雖モ父母祖父母等ノ讓渡シタル證書ナキ時ハ之ヲ訴ルヲ得ス

但外國人ハ其本人ノ國法ニ隨ヒ正シキ權ヲ得可シ

第十章 (九年第十八號布告ヲ以テ
代理人ノ條ヲ廢止ス)

第三十條

第三十一條

第三十二條

第二卷 被告人ノ答書

第一章 答書ノ定則ノ事

第三十三條 答書ヲ作ルニハ左ノ定則ニ循フ可シ

第一 被告人裁判所ノ呼出狀ト共ニ原告人ノ訴狀ヲ受取ル時原告人ノ陳述スル所條理アラハ速ニ熟議シ原告人之ヲ許諾セハ解訟ヲ請フ事ヲ得ヘシ其場合ニ於テハ代書人ヲシテ熟議解訟ノ答書ヲ作ラシメ之ヲ裁判所ニ呈ス可シ第四十七條及四十八條ヲ見合ス可シ

第二 原告人ノ述ル所非理不實ニシテ辨解ス可キ確證アラハ其書類ノ全文ヲ寫載シ次ニ非理不實ノ事ヲ書ス可シ

第三 答書ノ首ニ被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書ニシ答書ノ末ニ年月日ヲ記シ被告人ト代書人トノ氏名連印アル可シ附錄第三ヲ見合ス可シ

第四 答書ノ末ニ署スル氏名ハ其本人ノ自筆ヲ用フ可シ若シ本人自署スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記ス可シ

第五 答書ハ十六行ニシテ一行十五字詰ニ認メ正副二通ヲ具ス可シ

十七年三月司法省甲第一號告示ヲ以テ訴訟用紙ハ美濃又ハ同尺ノ紙ヲ用ヒ定式拾四行貳拾字詰ト

第二章 (七年第七十五號布告ヲ以テ代書人用ヒ方改定)

第三十四條

第三章 (九年第十八號布告ヲ以テ代書人ノ條ヲ廢止ス)

第三十五條

第三十六條

第三十七條

第四章 原告人ノ返リ證文ヲ所有シタル答書ノ事

第三十八條 負債主米金等ヲ返濟スルニ債主原ノ證書ヲ還付セサルヲ以テ二重ノ催促ヲナス訴訟ハ被告人其答書ニ返リ證文返證文ハ原ノ證書ヲ還付セスシテ其米金受取ノ證書ヲ交付スルヲ云フヲ寫載シ次ニ原告人二重ノ催促ヲ爲シタル旨ヲ書ス可シ

第三十九條 原告人米金等ヲ受取リタルノミノ證書ニシテ貸付ノ米金ヲ受取リタル確證ノ文字ナク又ハ他ノ憑據トス可キ證跡ナキ時ハ其米金ヲ受取タルノミノ證書ヲ以テ返リ證文ト看做スコトヲ得ス

第五章 原告人ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル答書ノ事

第四十條 借用ノ米金等ヲ返濟スヘキ期限ニ至リ負債主ヨリ債主ニ熟議シテ返濟延期ノ約ヲ結ヒ其證書ニ押印ヲ爲シタル債主ヨリ其約ヲ破リ本證文ニ據リ訴ヘタル答書ハ對談一札對談一札トハ返濟延期ノ證書ヲ云フアルヲ記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ原告人ノ約ヲ破リタルヲ書ス可シ

第四十一條 負債主ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル事件ヨリ起リ債主本證文ニ據リ訴出タル原由アル時ハ負債主ナル者已レヨリ約ヲ破リタル返濟延期ノ證書ヲ以テ原告人破約ノ證トナスコトヲ得ス

第六章 原告人證書ヲ偽造シタル答書ノ事

第四十二條 被告人ノ證書ヲ原告人偽造シタル答書ハ其偽造ヲ證スル爲ニ管轄町ノ役場ニ届ケ置タル年月日ノ人別帳ノ寫ヲ記載シ次ニ此人別帳ノ印ト證書ノ印ト相違シタル旨ヲ書ス可シ

第七章 經界ヲ爭フ答書ノ事

第四十三條 國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ爭フ答書ノ方法ハ第十九條ヲ照ス可シ

第八章 既ニ訴ヘラレタル事件ニ未タ訴ヘサル事件ヲ接續スル事

第四十四條 負債主米金ヲ返濟ス可キ期限ヲ過キテ返濟セサルヲ訴ヘラレタルニ別ニ其債主ヨリ受取ル可キ米金アリテ其受取可キ期限モ亦タ過キ未タ訴ヘスト雖モ雙方均シク返濟ノ約期ヲ破リタルヲ以テ兩件ヲ接續シ差引ノ計算ヲ爲サントスル答書ハ負債主ヨリ其別ニ受取ル可キ米金ノ證書ヲ寫載シ次ニ差引計算ヲ爲フノ旨ヲ書ス可シ

第四十五條 負債主甲某債主乙某ヨリ借用シタル米金ヲ返濟スヘキ期限ヲ過キテ訴ヘラレタルニ答ルニ當リ甲某其借用シタル米金ハ更ニ丙某ニ貸附ケ其期限ヲ過キ返濟セサルヲ以テ既ニ訴ヘラレタル乙某ノ事件ト未タ訴ヘサル丙某ノ事件トヲ接續シテ丙某ノ返濟

ヲ爲ス可キ米金ヲ以テ乙某ニ返濟センコトヲ答ルヲ許サス何トナレ
ハ乙ノ貸ス所ノ者甲ニシテ丙ニ非ス丙ノ借ル所ノ者ハ甲ニシテ乙
ニ非ラサルヲ以テナリ

第九章 對決前熟議解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四十六條 被告人訴狀ニ對シ辨解スルコト能ハサル者ハ速ニ原告人
ト熟議シ對決前ニ解訟ヲ爲シタル答書ハ原告人承諾ノ與書連印ヲ
爲サシム可シ附錄第十四號

第四十七條 前條ノ場合ニテ貸借淹滞ノ訴ニ起ル解訟ノ答書ハ償ノ
既濟又ハ未濟ト雖モ更ニ延期ノ約ヲ結ヒタル等ハ前條ニ照ス可シ
各種違約ノ訴訟ハ原被雙方ノ熟和ニ至リ又ハ更ニ改定ノ條約ヲ立
テタル等モ亦前條ニ照ス可シ

第十章 對決前返濟延期ノ約定ヲ爲シタル答書ノ事

第四十八條 原被告人對決審判前ニ被告人ヨリ負債ヲ返濟スルノ延
期ヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ完ク返

濟スルノ後解訟ノ證書ヲ呈セントスル者ハ其答書ニ延期ノ旨趣ヲ
書シテ原告人承諾ノ與書連印ヲ爲サシム可シ附錄第十五號

第十一章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償ノ延期ヲ約シテ
解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四十九條 原被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告
人ノ負債ヲ延期代償センコトヲ請ヒ原告人之ヲ承諾セハ熟議解訟ノ
答書ニ其延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及ヒ原告人ノ與書連印ヲ爲
サシム可シ附錄第十六號

第十二章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償延期ノ約定ヲ爲
シタル答書ノ事

第五十條 原被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告人
ノ負債ヲ延期代償センコトヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シテ其審判ヲ仰カ
ス延期ノ日ニ至リ完ク返濟スルノ後解訟ノ證書ヲ呈セントスル者
ハ其答書ニ延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及ヒ原告人ノ與書連印ヲ

爲サシム可シ附錄第十七號
ヲ見合可スシ

(訴答文例附錄雜形
略ス)

○訴答文例ハ御國人ノミ遵守明治六年十月
第三百三十九號布告

本年七月第貳百四十七號布告訴答文例ハ詮議ノ次第モ有之當分御國人ノミ遵守候儀ト可相心得此旨布告候事

○訴答文例中代書人用ヒ方明治七年七月
第七十五號布告

明治六年七月第貳百四十七號布告訴答文例中原告人被告人訴狀答書ヲ作ルニ必ス代書人ヲ用フヘキ旨記載候處自今左ノ通改定候條此旨布告候事

一原告人被告人訴狀答書及ヒ雙方往復文書ヲ作ルニ代書人ヲ撰

ミ代書セシムル共又ハ代書人ヲ用ヒスシテ自書スル共總テ本人ノ情願ニ任スヘキ事

一原告人被告人ニテ代書人ヲ用ヒサル時ハ親戚又ハ朋友ノ者ヲ

以テ差添人トナシ訴狀答書等へ連印セシムヘキ事

但訴答文例中本文ト相抵觸スル廉々ハ總テ廢止ノ儀ト可相心得事

○訴訟手續ニ差支サル者ハ差添人ニ及ハス明治八年二月
第十三號布告

明治七年七月第七十五號布告訴答文例中改定原告人被告人ニテ代書人ヲ用ヒサル時ハ親戚又ハ朋友ノ者ヲ以テ差添人トナシ訴狀答書等へ連印セシムヘキ旨記載候處自今原告人被告人訴訟手續ニ差支サル者ハ差添人ニ不及候條此旨布告候事

○詞訟勸解ニ付代人受任明治十七年一月
第一號布達

明治十三年五月司法省甲第貳號布達左ノ通改正ス
詞訟又ハ勸解ニ付已ムヲ得ス代人ヲ出サントスル者ハ親屬又ハ相當ノ者ヲ撰ミ管轄裁判所ノ許可ヲ受ク可シ但代人タル者同時ニ二人以上ヨリ二件以上ヲ受任シ其他不適當ノ所爲アリト認ムル時ハ裁判所ニ於テ之ヲ差止ムルコトアル可シ

○出訴期限規則 明治六年十一月
第三百六十二號布告

金穀貸借ヲ始メトシ物品賣買ヨリ其外種々ノ取引等ニ至ルマテ雙方ノ者互ニ受取渡ノ期限ヲ定メ條約ヲ結ヒ置キタルニ一方ノ者其條約ヲ破リタル時ハ早速裁判所へ出訴イダシ不苦候處延期ノ勘辨ヲ加ヘ出訴ヲ見合候者モ有之是亦慈愛ノ人情ニテ尤ノ事ニ付早速出訴イダシ候トモ又ハ勘辨ヲ加ヘ候トモ人民ノ自由ニ任セ出訴期限ノ法則不相定候處右延期勘辨中數多ノ歲月ヲ過去リ出訴致シ候時ハ貸方借方請人證人ノ内死亡又ハ轉住又ハ失踪等ノ者モ有之事理曖昧ニ立至リ裁判上不都合不少候ニ付訴訟ノ事柄ニ因リ夫々出訴ノ期限ヲ定候條來明治七年一月一日ヨリ後ニ結ヒタル條約期限ニテ右出訴期限ヲ過去リ出訴セサル者ハ自分條約ヲ取消シタル者ト看做シ受取ルヘキ者

ハ受取ヘキ權利ヲ失ヒ引渡スヘキ者ハ引渡スヘキ義務ヲ免レ候事ト相定メ候ニ付若シ出訴致シ候トモ取上不致候此旨布告候事
出訴期限規則

第一條

- 一 學藝ノ授業料
- 一 旅籠料
- 一 運送賃
- 一 飲食料
- 一 手附金
- 一 商人互ノ賣掛金
- 一 職人ノ手間代金
- 一 日雇人ノ給料
- 一 請負金
- 一 芝居等ノ木戸錢又ハ棧敷錢等

一 男女藝者ノ揚代金

右ハ六箇月限

第二條

一 醫師ノ診診及ヒ藥料

一 授業師ヨリ門弟ニ給與シタル飲食料

一 商人ヨリ商人ニ非サル者ヘノ賣掛代金

一 一箇年期マテノ奉公人給料

右ハ一箇年限

第三條

一 期限ヲ定メタル貸附米金及ヒ利息アレハ其利息

一 期限ヲ定メタル預米金及ヒ利息アレハ其利息

一 家屋及ヒ土地ノ借賃

一 小作米金

一 證據金

一 敷金

一 物品ノ借賃又ハ損料

一 養育料

一 七ヶ年期マテノ奉公人給料

一 期限ナキ年金及ヒ一生涯ノ年金

右ハ五箇年限

第四條 條約證書中期限ナキ者ハ出訴ノ日ヲ期限ト看做シ候故何時

出訴致シ候テモ苦シカラサル事

第五條 従前取結ヒタル條約ニテ明治六年十二月三十一日以前ニ條

約期限ノ切レタル事件ハ右明治六年十二月三十一日ヲ條約ノ期限

ト看做スヘシ又従前取結ヒタル條約ニテ其期限ノ明治七年一月一

日後ニ及フ事件ハ條約期限ノ切レタル翌日ヨリ第一條第二條第三

條ノ種類ニ從ヒ出訴ノ期限ヲ起算致スヘキ事

但明治五年壬申第三百號布告第三條ニ定メタル規則ハ格別ナリ

トス

十四年第二號布達ニ依リ
府縣裁判所トアルヲ始テ
裁判所ト改稱ス

○勸解中出訴期限満期者ノ處置九年四月
司法省第四十四號達
治安裁判所或ハ裁判所支廳ニ勸解願出候者勸解中出訴期限満期
ノ者處置方左ノ通可相心得此旨相達候事(十四年第二號布達
治安裁判所ヲ以テ區
裁判所ト改稱ス)

第一條 勸解出願ノ者勸解中ニ出訴期限ノ満期ニ至ル者ハ其勸
解不調ノ翌日ヨリ滿三十日迄ハ出訴期限ノ猶豫ヲ與フ可シ

第二條 勸解調ハサル時右滿三十日迄ニ始審裁判所ニ出訴ヲ爲
サ、ルニ於テハ其事件ニ付訴スルノ權利ヲ拋棄シタルト看
做ス可シ

○地所質入書入建物船舶書入質ノ公證ヲ受ケタルモノハ出訴期
限十八年六月
内務省甲第二十號達

地所質入書入建物船舶書入質ノ公證ヲ受ケタルモノハ出訴期限
無之旨今般太政官ノ裁令ヲ經候條爲心得此旨相達候事

○負債者失踪後ノ訴訟成例明治八年一月
第六號布告

民法裁判上負債者失踪後ノ訴訟ハ失踪後三十六ヶ月ノ時間ハ採上ケ
サル成例ニ有之候處本年三月一日ヨリ以後ハ左ノ通相改メ候條此旨
布告候事

第一條 債主定約期限未滿内ニ負債者ノ失踪ヲ知ル時ハ定約満期ニ
至リ直ニ裁判所へ訴出ツヘキ事

第二條 債主未タ負債者ノ失踪ヲ知ラス定約満期又ハ出訴期限將ニ
盡ントスルヲ以テ裁判所へ出訴シ裁判所ノ奥書ヲ以テ負債者ニ掛
合始テ其失踪ノ事ヲ知ル時ハ右奥書訴狀ヲ再呈シ其旨届出ツ可キ
事

第三條 前條々ノ場合裁判所ニ於テハ一應訴狀採上ケ直ニ失踪者所
管ノ戸長へ申付失踪ノ年月日ヲ訊明シタル上債主差出シタル證書
ニ負債者何年何月何日家出ノ未行衛相分ラサルニ付追テ本人見當
ルカ又ハ三十六ヶ月ノ満月後跡相續ヲ爲ス可キ者ニ掛リ此裏書證

六年第三百六十二號布告
出訴期限ハ本類ニ載ス

書ヲ以テ再訴致ス可キ旨ヲ記載シ訴狀下戻ス可キ事
第四條 債主於テ前條ノ裏書證書ヲ受取置キタル上ハ本人見當リ又
ハ搜索三十六ヶ月ノ時限ハ明治六年十一月 第三百六十二號布告出訴
期限ノ限内ニハ加算致サ、ル事

○控訴上告手續 明治十年二月
第十九號布告

沿革略記 明治五年十一月司法省第四十六號達ヲ以テ地方裁判
所及ヒ地方官ノ裁判ニ服セサル時ハ司法省裁判所へ
訴ルヲ許ス○七年五月第五十四號布告ヲ以テ民事控訴略則
ヲ定ム○八年五月司法省甲第六號布達ヲ以テ五年同省第四
十六號達ヲ廢ス○同年同月第九十三號布告ヲ以テ控訴上告
手續ヲ定ム○同年同月第九十四號布告ヲ以テ前ノ民事控訴
略則ヲ廢ス○十年二月第十九號布告ヲ以テ前令ヲ改正ス是
レ現行法ナリ

明治八年五月第九十一號布告大審院諸裁判所職制章程同年同月第九十二

大審院諸裁判所職制章程
ハ官制改革ニヨリ消滅

號布告控訴上告手續別冊ノ通改正候條此旨布告候事

但巡回裁判規則判事職制通則ハ删除候事

(別冊)

控訴上告手續

第一章

控訴ノ事

第一條 凡ソ始審裁判所ノ初審ニ服セスシテ再ヒ控訴裁判所ニ訴ヘ
覆審ヲ求ムル者之ヲ控訴ト云(十四年第二號布達ヲ以テ地方裁判所
ルヲ控訴裁判所ト
改稱ス以下倣之)

第二條 控訴ハ民事ニ止マリ刑事ニ及ハス

第三條 控訴ハ一タヒスルヲ得再ヒスルヲ得ス

第四條 始審裁判所ニ於テ裁判ノ言渡ヲ爲シタル時原告被告ノ雙方
又ハ一方ノ者其裁判ニ不服ナル時ハ裁判言渡ヨリ第七日マテニ
言渡ノ翌日 裁判言渡ノ事理ヲ熟考シ其翌日ニ至リ控訴スルヲ得

控訴上告手續

ヘシ但シ訴訟ノ案件商事ニ係リ急速ニ控訴スルヲ要スルノ場合ニ於テハ七日内ト雖モ控訴スルヲ得

第五條 始審裁判所ノ裁判言渡ヨリ二箇月三十日ヲ以テ過ルキハ控訴スルヲ許サス但シ始審裁判所ヨリ控訴裁判所ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キハ期限二箇月ノ外八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ増スヘシ
(十五年第二十一號布告ヲ以テ三ヶ月ヲ二ヶ月ト改ム)

第六條 控訴ヲ爲ス者ハ其初審ヲ受ケタル始審裁判所ニ届ケ出ツヘシ但シ添翰ヲ乞フニ及ハス

第七條 前條ノ届ヲ受ケ取リタル始審裁判所ハ裁判言渡ノ執行ヲ停止スヘシ若シ控訴裁判所ノ請求アル時ハ始審裁判所ニ於テノ訴狀答書口書裁判見込等ヲ差出スヘシ

第八條 控訴裁判所ニ捧クルノ訴狀ハ訴答文例ニ照準スヘシ

第二章

上告總則ノ事

六年第二百四十七號法律
答文例本類ニ載ス

刑事ノ上告ハ治罪法頒布ニ付消滅

第九條 各裁判所ノ終審ヲ不法ナリトシ大審院ニ向テ取消ヲ求ムル者之ヲ上告ト云

第十條 上告スルヲ得ルノ事件ハ

第一 裁判所管理ノ權限ヲ越ユ

第二 聽斷ノ定規ニ乖ク

第三 裁判法律ニ違フ

第十一條 大審院ハ上告ヲ受クルノ所ニシテ控訴ヲ受クルノ所ニアラス故ニ控訴スヘキノ事ヲ以テ誤テ上告スル者アルモ之ヲ斥ケテ理セス

第十二條 陸海軍ノ裁判權限ヲ越ル者ハ之ヲ大審院ニ上告スルヲ得

第十三條 凡ソ上告シタル者已ニ大審院ノ判決ヲ經レハ更ニ訴フルヲ得ス

第三章

陸海軍ノ上告ハ陸軍治罪法海軍治罪法頒布ニ付消滅

民事上告ノ事

第十四條 民事ノ上告スルコトヲ得ル者ハ已ニ控訴裁判所ニ控訴シ其審判ヲ經タル者ニ限ル

第十五條 上告ヲ爲ント欲スル者ハ裁判言渡ヨリ二月内ニ上告狀ヲ大審院ニ捧クヘシ而ノ同時被告人ニ通知スルヲ要ス若シ原裁判所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キ時ハ二月ノ外八里毎ニ一日ヲ増ス此定期ヲ過レハ上告スルコトヲ許サス
上告狀中ニハ必ス左ノ事實ヲ記載スヘシ

第一 原告人ノ住所身分氏名

第二 被告人アレハ其住所身分氏名

第三 被告人ノ住所身分氏名

第四 證人又ハ引合人アレハ其住所身分氏名

第五 始審裁判所ニ出訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及

ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日

第六 控訴裁判所ニ控訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及
ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日

上告狀ハ正本一冊及ヒ副本五冊ヲ差出スヘシ

上告狀ニハ必ス左ノ書類ヲ添ヘ差出スヘシ

第一 始審裁判所ニ於テノ訴狀并ニ答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫

第二 控訴裁判所ニ於テノ訴狀并答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫

第三 上告狀中ニ憑據トナス書類ノ寫ノ各書類ニ番號ヲ朱書シ編シテ一冊ト爲シ又ハ葉數多ニ付編シテ幾冊ト爲シタル者

右ノ訴狀又ハ答書及ヒ憑據ノ書類ノ寫ヲ所持セサル者ハ原裁判所ニ出願シ裁判所ノ簿冊ヲ訟庭ニ取下ケ見坐ノ目前ニ於テ之ヲ寫シ取ルコトヲ得ヘシ

若シ原裁判所ニ於テ書類寫取ノ出願ヲ許サ、ルニ因リ上告人其寫ヲ出シ能ハサル時ハ其旨ヲ上告狀中ニ記載スヘシ

第十六條 上告者ハ其上告者ニ添テ金拾圓ヲ大審院ニ預クヘシ若シ其金高キ預ケサルキハ上告ヲナスコトヲ得ス

第一 若シ上告ヲ取上ケサルキハ其預リ金ヲ没入ス

第二 若シ上告ヲ取上ケ原裁判ヲ破毀シタル時ハ預リ金ヲ還付ス

第三 若シ上告ヲ取上ケ被告人ト對審シタルノ後之ヲ斥ケテ原裁判ヲ破毀セサル時ハ預リ金ヲ没入シ又訴訟入費規則ニ照シ

テ被告人ノ費用ヲ償ハシム 被告人トハ上告者ノ相手方ヲ云

第十七條 上告ヲ爲ス者ハ先ツ原裁判所ニ届出ツヘシ原裁判所ニ於テハ書類ヲ三日内ニ大審院ニ遞送スヘシ

第十八條 上告ニ付テハ裁判ノ執行ヲ停メス大審院已ニ原裁判ヲ破毀スルニ至レハ即日原裁判所ニ通報シテ 大審院ヨリ郵便ヲ發ス 執行ヲ止メ更ニ審判落着ノ日ニ至テ前ノ執行ヲ取消シテ後ノ裁判ヲ執行セシムヘシ

九年前法省甲第五號布達
訴訟入費規則參看本
類ニ載ス

但内國人ヨリ裁判外ノ人民ニ對シ又ハ裁判外ノ人民ヨリ内國人ニ對スル上告ハ原裁判ノ執行ヲ停ムヘシ

第十九條 上告狀ハ原告人自ラ之ヲ捧クルモ又ハ代理人ヲシテ之ヲ捧ケシムルモ本人ノ意ニ任ス

第二十條 大審院ニ於テ判事審聽シ不當ナル上告ナリト決スル時ハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ受理セサルノ旨ヲ言渡スヘシ

第二十一條 判事審聽シテ當然ノ上告ナリトシ之ヲ判決スヘキ旨ヲ言渡シタル時ハ其後二日内ニ被告人呼出狀ヲ仕出ス可シ此ノ呼出狀ニハ上告狀ノ副本ヲ添フヘシ

第二十二條 被告人ハ呼出狀ヲ受取リタルヨリ三十日内ニ答辨書ヲ作り自身又ハ代理人ヨリ之ヲ大審院ニ捧クヘシ但被告人ノ住所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キキハ八里毎二一日ヲ増スヘシ
第二十三條 大審院ニ於テ被告人ノ答辨書ヲ受取リシキハ院長ヨリ判事ノ中ニ於テ一人ノ主任ヲ命シ一件書類ヲ取纏メ遲緩ナク一件

始末書ヲ作ラシメ然ル後ニ原被對審ノ日ヲ豫定シ三日以前ニ原被對審ノ呼出狀ヲ原被雙方ニ送達スヘシ

第二十四條 原被對審ノ節ハ判事席ニ臨ミ最初ニ主任判事一件始末ヲ宣讀シ次ニ原告ノ陳述次ニ被告ノ陳述次ニ原被交互ノ論辯ヲ審聽シ而シテ後ニ原告人上告理アリト決スルキハ何々ノ理由ヲ以テ原裁判所ノ裁判ヲ破毀スルニ付更ニ其裁判所ニ於テ裁判ヲ受クヘキ旨又ハ大審院ニ於テ裁判スヘキ旨ヲ言渡スヘシ

第二十五條 若シ原告人ノ上告理ナシト決スルキハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ斥クル旨ヲ言渡スヘシ

第四章

刑事上告ノ事(刑事上告ハ治罪法ニ依リ消滅ス)

○外國人ニ係ル民事訴訟手續八年五月甲第三號布達
內國人ヨリ外國人ニ係ル民事訴訟手續九年三月布達
告候事(九年司法省甲第十號布達)
以下刑事ノ手續九年三月布達

內國人原告ニテ外國人ニ係ル民事ノ訴訟ハ原告人其事由ヲ各開港開市場ノ府縣廳ニ申出其廳ノ添狀ヲ得テ被告人管轄ノ各國領事ニ申訴スヘシ

○外國人ニ係ル刑事及民刑附帶ノ訴訟九年九月甲第十二號布達
明治八年當省甲第三號ヲ以テ布達候內國人ヨリ外國人ニ係ル民事刑事ノ訴訟手續中今般左ノ通相定候條此旨布達候事
第一條 內國人原告ニテ外國人ニ係ル刑事并ニ民刑附帶ノ訴訟ハ檢察其他ノ警察官東京ニテハ府縣ハ地方官其ニ於テ之ヲ承ケ直ニ被告人管轄ノ外國領事ニ照會シ裁判ヲ求ムヘシ
第二條 前條ノ場合ニ於テ犯罪ノ爲メ損害ヲ受ケタル者其償ヲ求ル民事ノ訴ハ總テ本人ノ望ニ任スヘシ

○民事訴訟用印紙規則明治十七年二月第五號布告

沿革略記 明治八年十二月第九十六號布告ヲ以テ訴訟用印紙規則ヲ制定ス○十七年二月第五號布告ヲ以テ前令ヲ廢シ民事訴訟用印紙規則ヲ制定ス是レ現行法ナリ

民事訴訟用印紙規則別紙ノ通制定シ明治十七年四月一日ヨリ施行ス

但明治八年^{十二月}第百九十六號布告訴訟用罫紙規則ハ右施行ノ日ヨリ廢止ス

(別紙)

民事訴訟用印紙規則

第一條 凡ソ民事訴訟ノ書類ニハ此規則ニ從ヒ印紙ヲ貼用スルモノトス

第二條 訴訟ニハ正本一通ニ付請求ノ金額若クハ價額ニ應シ左ノ區別ニ隨ヒ其受付ノ時ニ於テ印紙ヲ貼用ス可シ

金額	價額	同	同	同	同	同	同	同
五圓マテ	五圓マテ	拾圓マテ	貳拾圓マテ	五拾圓マテ	七拾五圓マテ	百圓マテ	貳拾錢	三拾錢
							六拾錢	壹圓五拾錢
							貳拾錢	貳圓貳拾錢
							三圓	三圓

同	同	同	同	同	同	同	同	同
貳百五拾圓マテ	五百圓マテ	七百五拾圓マテ	千圓マテ	貳千五百圓マテ	五千圓マテ	五千圓以上ハ千圓マテ毎ニ貳圓ヲ加フ	六圓五拾錢	拾圓
							拾三圓	拾五圓
							貳拾圓	貳拾五圓

控訴ニ於テハ右半額上告ニ於テハ全額ノ印紙ヲ加貼ス可シ

第三條 人事其他金額ニ見積ル可ヲサルモノハ三圓ノ印紙ヲ貼用ス可シ其控訴上告ニ於テ加除スルハ前條ニ同シ

但人事ニ於テハ極貧ノ者ニシテ戸長ノ證書ヲ所持スル者ハ裁判官ニ於テ印紙ノ貼用ヲ免スルコトアル可シ

第四條 左ノ書類ニハ正本壹通ニ付貳拾錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ
答辯書證據物寫辯駁書辯論書上申書陳述書等

證人鑑定人評價人引合人等ノ呼出ヲ請求スル願書

審判ノ延期ヲ請求スル請書

第五條 左ノ書類ニハ正本壹通ニ付五拾錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ

官吏ノ臨檢ヲ請求スル願書

財産差押又物品公賣ヲ請求スル願書

執行命令書ヲ請求スル願書

身代限ノ處分ヲ請求スル願書

第六條 裁判言渡書ノ謄本ヲ下付スル時差出ス受取書ニハ其謄本壹枚五錢其他ノ謄本ヲ下付スル時差出ス受取書ニハ其謄本壹枚三錢ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用ス可シ

但裁判言渡書ノ謄本ハ壹枚十二行一行十二字詰其他ノ謄本ハ一枚二十行一行十八字詰トス

第七條 勸解ニ於テハ一件毎ニ勸解表ニ署名ノ時貳拾錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第八條 此規則ニ依リ貼用シタル印紙ノ代價ハ曲者ヨリ直者ニ辨償ス可キモノトス

第九條 印紙ノ種類定價及ヒ貼用方ハ布達ヲ以テ之ヲ定ム

第十條 印紙ハ管轄廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム其他ニ於テ賣買スルコトヲ得ス

第十一條 官許賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス其情ヲ知テ之ヲ買取シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス

第十二條 前條ノ規則ヲ犯シタル者ニハ又ハ刑法ノ不論罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

○印紙ノ種類定價及貼用方十七年二月
第四號布達
今般第五號布告ヲ以テ訴訟用印紙規則制定候ニ付印紙ノ種類定價及ヒ貼用方左ノ通之ヲ定ム

淡黑色印紙	一枚	三錢
黑色印紙	同	五錢
赭色印紙	同	拾錢
茶褐色印紙	同	五拾錢
黃色印紙	同	壹圓
青色印紙	同	五圓
橙黃色印紙	同	拾圓
綠色印紙	同	拾五圓
嬌栗色印紙	同	貳拾圓
印紙へ訴狀其他書類ノ正本ニ貼用シ貼用者ノ印章ヲ以テ消印ス可シ		

○訴訟入費償却規則 明治九年四月 司法省甲第五號布達

沿革略記 明治五年九月司法省第十四號布達ヲ以テ訴訟入費償却假規則ヲ定メ從來ノ訴訟入費原被共自費或ハ町村費ヲ以テ充用シ來ルヲ向後一切曲者ノ負擔ニ歸セシム○同年同月同省無號達ヲ以テ右施行日限ヲ定ム○同年同月同省第十七號布達ヲ以テ訴訟入費償却假規則定限ヲ定ム○同年

十一月一月司法省丁第一號達ヲ以テ本規則ハ當分外國人民ヘハ施行セズ但各國ノ内ニ該規則進行ノ分ハ此限ニアラス

十七年司法省甲第五號告示ヲ以テ一枚貳拾四行一示ヲ拾字詰一枚金貳拾錢ト爲ス

十一月同省第三十一號布達ヲ以テ右定限ヲ改正ス○同年十一月同省第三十八號達ヲ以テ右定限施行日限ヲ改ム○九年四月同省甲第五號布達ヲ以テ訴訟入費償却規則ヲ改正ス是レ現行法ナリ

訴訟入費償却規則左ノ通改正候條此旨布達候事

第一條 訴狀其外書類認料一枚十六行十五字詰ニ付拾錢但一枚以下モ同價

右定限

- 第一 原告人ノ訴狀ノ正本副本
 - 第二 被告人ノ答書ノ正本副本
 - 第三 訴狀亦ハ答書中ニ記載シ難キ證據ノ書類ノ寫
 - 第四 審判中ニ原告又ハ被告ヨリ差出シタル證據ノ書類ノ寫
 - 第五 訴訟中訴狀ニ關係スルノ事件ニ付原被雙方往復ノ文書
 - 第二條 證人并ニ引合人手當 一日ニ付五拾錢(十二年司法省甲テ引合人ノ下差添人ノ三字ヲ刪ル)
- 但シ八里以外ヨリ罷出止宿ノ者ハ貳拾五錢ヲ増ス
- 右定限

九年四月司法省甲第六號
布達ヲ以テ第三條ハ追テ
相達スルマテ執行ニ及ハ
ス

裁判所ニ出席ヲ爲シタル日

第三條 證人并引合人滿八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手當

一日ニ付五拾錢(十二年司法省甲
第二號布達ヲ以

テ引合人ノ下差添
人ノ三字ヲ刪ル)

第四條 證人并引合人旅費

滿八里ニ付拾錢歸路モ同斷(十二
年司

法省甲第二號布達ヲ以テ引合
人ノ下差添人ノ三字ヲ刪ル)

但シ八里ヲ越レハ每滿一里ニ付拾錢

右定限

第一 兩線ノ官道甲路ハ遠ク乙路ハ近キ時ハ現ニ甲路ヲ經ルト雖

モ乙路ヲ以テ計算ス可シ

第二 本條ハ日本國管内ヲ通行スル者ノ爲メ設ク

第五條 原告人又ハ被告人直ナル者ノ手當

一日ニ付五拾錢

但シ八里外ヨリ罷出止宿スル者ハ貳拾五錢ヲ増ス

九年四月司法省甲第六號
布達ヲ以テ第六條ハ追テ
相達スルマテ執行ニ及ハ
ス

右定限

第二條ニ同シ

第六條 原告人又ハ被告人直ナル者八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ
手當
一日ニ付五拾錢

第七條 原告人又ハ被告人直者旅費

滿八里ニ付拾錢歸路モ同斷

但シ八里ヲ越レハ每滿一里ニ付拾錢

右定限

第四條ニ同シ

第八條 通辨雇料

一日ニ付三圓

右定限

第二條ニ同シ往返旅費ヲモ定額ノ通計算スヘシ

第九條 翻譯料

「一枚ニ付十六行十五字詰二圓
但シ一枚以下モ同價」

右定限

十七年司法省甲第一號告
示ヲ以テ一枚廿四行一行
貳拾字詰一枚金四圓ト爲
ス

第一條ニ同シ

第十條 測量繪圖認料

右定限

- 第一 長三百間ニテ盡ル時ハ
百間ニ付一尺ノ割 西ノ内一枚ニ付拾錢
- 第二 長六百間迄
百間ニ付五寸ノ割 同 拾貳錢
- 第三 長千貳百間迄
百間ニ付三寸ノ割 同 拾四錢
- 第四 長六千間迄
百間ニ付二寸ノ割 同 拾七錢
- 第五 長壹萬二千間迄
百間ニ付一寸ノ割 同 貳拾錢
- 第六 長一萬二千間以上

百間ニ付五分ノ割 同

廿四錢

一測量ニ及ハサル見取繪圖ハ間數ノ長短ヲ論セス大凡見積ヲ以テ簡便ニ圖引致ス可シ

但西ノ内一枚ニ付拾錢

第十一條 使賃

滿一里毎ニ拾錢一里未滿ハ五錢

但歸路モ同斷

右定限

第一 裁判所ニテ示談中雙方承諾ノ上原告被告雙方又ハ一方ノ者ヨリ遣シタル使賃

第二 裁判所ニテ示談中原告又ハ被告一方ノ者掛裁判役ノ檢印ヲ經タル使賃

第三 原告又ハ被告一方ノ者出訴中違約シテ出席セサル時掛裁判役ノ檢印ヲ經テ違約ヲ責ムル使賃

第四 原告被告雙方ノ爲メ又ハ一方ノ爲メニ雙方又ハ一方ノ者ノ

申立ニ因リ裁判所ヨリ臨時ニ遺シタル使賃

第十二條 郵便并ニ電信料 定價

右定限

第十一條ニ同シ

第十三條 身代限ヲ爲スニ付裁判所又ハ縣廳又ハ村役場ニ納ム可キ評價人監定人等ノ日雇賃金ノ諸入費及ヒ身代限諸雜費 臨時計算ヲ以テ定ム

右ハ前數條ノ入費ニ先ツテ取立ツ可シ

○民事訴訟書類認メ方明治十七年三月一號告示 今般第五號布告ヲ以テ訴訟用郵紙規則廢セラレ候ニ付テハ本年四月一日以後民事訴訟ニ關シ大審院又ハ裁判所へ差出ス書類ハ都テ美濃紙又ハ之レト同尺度ノ紙ヲ用ヒ一枚貳拾四行一行貳拾字詰ニ書スヘキモノトス
但訴訟入費ハ明治九年當省甲第五號布達第一條第九條ニ定ムタル割合ニ依リ書類認料ハ一枚金貳拾錢翻譯料ハ一枚金四圓ト相成ル義ト心得ヘシ

○代言人規則明治十三年五月 司法省甲第一號布達

沿革略記 明治九年二月司法省甲第一號布達ヲ以テ代言人規則ヲ設ケ免許ヲ經サル者へ代言依頼スヘカラサルモノトス ○十三年五月同省甲第一號布達ヲ以テ改正ス是レ現行法ナリ

明治九年當省甲第一號代言人規則左ノ通改正候條此旨布達候事

但該規則ニ抵觸スル從前ノ布達ハ總テ廢止タル可シ

代言人規則

第一款 總則

第一條 代言人ハ法令ニ於テ代言ヲ許サレタル詞訟ニ付テ原告又ハ被告ノ委任ヲ受ケ其代言ヲ爲ス者トス

第二條 代言ノ業ヲ爲サント欲スル者ハ第四款ニ掲クル所ノ手續ニ

依り定式ノ試験ヲ經テ「司法卿」ノ免許ヲ受ク可シ

第三條 免許ヲ受ケン代理人ハ大審院及ヒ諸裁判所ニ於テ代言ヲ爲スヲ得

第四條 代言人ノ免許ヲ得ル能ハサル者左ノ如シ

- 一 未丁年者
 - 二 身代限りノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者
 - 三 盜罪詐僞罪ニ付刑ヲ受ケタル者
 - 四 懲役禁獄一年以上ノ刑ニ處セラレタル者(十四年司法省甲第二號布達ヲ以テ改正)
 - 五 官吏准官吏及ヒ公私ノ雇人
- 第五條 免許ヲ受ケン者ハ必ス第二款ニ掲クル所ノ代言人ノ組合ニ入りテ其規則ヲ守ル可シ若シ一時他管ニ出テ代言ヲ爲スモ其地組合ノ規則ヲ遵守ス可シ
- 第六條 代言人新ニ免許ヲ受ケン時及ヒ他ノ地ニ轉住セント欲スル時ハ其業ヲ爲ス所ノ裁判所及ヒ檢察檢察ナキ地ハ檢察ノ職務ヲ履行スル者以下之ニ倣フ并

ニ議會長ニ其旨ヲ届ケ廢業ノ時ハ免許狀ヲ檢事ニ返納ス可シ

第七條 代言免許ハ滿一年ヲ算フヲ以テ限トシ免許料ハ金拾圓トス其業ヲ繼續セント欲スル者ハ毎年免許料ヲ納ムヘシ既ニ納メタル免許料ハ廢業停業除名ノ時ト雖モ之ヲ還付セス

第八條 新規出願ノ者ハ免許狀ヲ受ル時免許料ヲ直チニ檢事ニ納ム可シ

引續出願ノ者ハ必ス免許期限ノ盡ル前願書ニ免許料ヲ添ヘ檢事ニ差出ス可シ但右手續ヲ爲シタルモハ期限後ニ係リ未タ免狀ノ下付有ラサルモ其儘代言ヲ爲スヲ得可シ

第九條 免許料ヲ納メサルヲ以テ免許ヲ得ス又ハ期限前ニ於テ引續願ヲ爲サスシテ免許ノ効ヲ失ヒシ者再ヒ代言ヲ爲サント欲スル時ハ新規出願ノ手續ニ循フ可シ

第十條 免許狀ヲ紛失シ又ハ氏名ヲ改メシ者ハ更ニ免許狀下付ノ願ヲ檢事ニ出ス可シ但願書ノ副本ニ檢事ノ檢印ヲ受ケ置キ引替免許

狀下付迄ハ之ヲ以テ免許代理人タルノ證ト爲ス可シ

第十一條 代言ヲ爲スニハ必ス詞訟本人ノ委任狀ヲ受ク可シ

第十二條 代言人ノ懲罰ハ第三款ニ依テ處分ス可シ

第十三條 代言人ノ所業ニ因リ生シタル詞訟本人並ニ相手方關係人ノ損害ハ其代言人ニ於テ之ヲ償フ可シ

第二款 議會

第十四條 代言人ハ各地方裁判所本支廳所轄毎ニ一ノ組合ヲ立テ議會ヲ設ケ左ノ目的ヲ以テ規則ヲ定メ契約ヲ固クス可シ但組合ハ各裁判區ノ廣狹遠近ニ依リ檢事ノ見計ヲ以テ之ヲ分合スルコト可シ

一 五ニ風儀ヲ矯正スル事

二 名譽ヲ保存スル事

三 法律ヲ研究スル事

四 誠實ヲ以テ本人ノ依頼ニ應スル事

十四年第二號布達ヲ以テ
地方裁判所ヲ始審裁判所
ト改ム

五 強テ本人ノ權利ヲ捏造セサル事

六 妄ニ言詞ヲ變改セサル事

七 故ナク時日ヲ遷延セサル事

八 相當謝金ノ額ヲ定ムル事

但該規則ハ必ス檢事ノ照閲ヲ經可シ其改正増補モ亦之ニ同シ

第十五條 組合毎ニ會長一名副會長一名又ハ二名ヲ毎年第一次會ニ於テ投票ノ多數ヲ以テ定ム可シ若シ投票ノ數相均シキ時ハ先キニ免許ヲ得タル者ヲ以テシ其時日相同シキ時ハ年長ノ者ヲ以テ之ニ充ツ可シ

第十六條 會長ハ議會ノ管理ヲ爲シ副會長ハ會長ヲ補助シ會長差支アル時ハ之カ代理ヲ爲ス可シ其任期ハ各滿一年トス但每期投票多數ヲ得ル者ト雖モ其職務ヲ繼續スルハ三期ヲ以テ限リトス

第十七條 第二十二條ニ記載シタル條件ヲ犯ス者アル時ハ各代言人ハ之ヲ會長ニ報告シ會長ハ之ヲ檢事ニ告發ス可シ

若シ會長告發ヲ遷延シ又ハ其所犯會長ニ係ル時ハ各代言人ヨリ直チニ檢事ニ告發ス可シ

第十八條 議會ヲ開クハ毎年二次ヲ以テ定例ト爲シ其日數一次十五日ヲ過クルヲ得ス若シ已ムヲ得サル場合ニ於テ期日ヲ延サントスルカ又ハ臨時會ヲ開カントスル時ハ必ス檢事ノ認可ヲ受ク可シ但其會費ハ各代言人ニ於テ之ヲ擔當スル者ト爲ス

第十九條 會長ハ組合總員ノ名簿ヲ作り其本貫族籍住所年齢及ヒ代言免許ノ年月日ヲ記シ轉住廢業懲罰ノ事アル毎ニ其旨ヲ記ス可シ
第二十條 議會中詞訟事件ニ付參會スルヲ得サル場合ニ於テハ其旨ヲ會長ニ届出ツ可シ

第二十一條 會長及ヒ副會長ト雖モ代言ノ職業ニ付テハ一般ノ代言人ト異ナルナシ

第三款 懲罰

第二十二條 代言人左ノ條件ヲ犯ス時ハ輕重ヲ量リ第二十三條及ヒ

第二十四條ニ依テ懲罰ス可シ

- 一 訟廷ニ於テ現行ノ法律ヲ誹議スル者
 - 二 訟廷ニ於テ官吏ニ對シ不敬ノ所業ヲ爲ス者
 - 三 訟廷ニ於テ相手方ヲ凌辱罵詈シタル者
 - 四 詞訟ヲ教唆シタル者
 - 五 證據ト爲ル可キ者ヲ捏造シタル者
 - 六 他人ノ詞訟ヲ買取り自己ノ利ヲ圖ル者
 - 七 強テ謝金ヲ前收シ又ハ過當ノ謝金ヲ貪リタル者
 - 八 故ラニ時日ヲ遷延シ詞訟本人并ニ相手方關係人ノ妨害ヲ爲シタル者
 - 九 議會組合ノ外私ニ社ヲ結ヒ號ヲ設ケ營業ヲ爲シタル者
 - 十 議會ニ於テ定メタル取締規則ヲ犯シタル者
- 第二十三條 懲戒ノ目次左ノ如シ
- 一 譴責

二 停業
三 除名

第二十四條 所犯法律ニ該ル者ハ法律ニ依テ處斷シ仍ホ第二十三條ノ罰目ヲ併科スルコアル可シ

第二十五條 譴責ハ止タ呵責シテ業ヲ停メス停業ハ一月以上一年以下其業ヲ停メ除名ハ代言人名簿ノ名ヲ除キ三年ヲ經ルノ後ニ非サレハ復タ代言人タルヲ得ス若シ其所犯ノ情狀重キ者ハ終身之ヲ許サス

第二十二條ノ懲罰ヲ受ケタル者アルキハ其旨ヲ裁判所ノ扣所ニ掲示ス可シ

第四款 出願

第二十六條 代言免許ヲ願フ者ハ第二十九條ノ書式ニ倣ヒ願書ヲ作リ現住戸長又ハ區長ノ奥印ヲ受ケ履歷書ヲ添へ其所轄ノ檢事ニ差出シ定式ノ試験ヲ受ク可シ

第二十七條 出願定月

二月 八月 各上半ケ月ヲ以テ限リト爲ス

第二十八條 試験ノ課目左ノ如シ

- 一 民事ニ關スル法律
- 二 刑事ニ關スル法律
- 三 訴訟ノ手續
- 四 裁判ニ關スル諸規則

第二十九條 願書及ヒ履歷書書式

(書式略之)

○法學博士代言營業出願書進達方十二年三月五號
 明治二十年勅令第十三號學位令ニ依リ法學博士ノ學位ヲ得タル者代言營業ヲ出願セシトキハ代言人規則第二十七條第二十八條ニ關セス免許狀ヲ授與スヘキニ付出願ニ際シ學位記ヲ檢査シ其寫ヲ願書ニ添テ進達スヘシ

○司法省變則法學生徒卒業者代言營業出願書進達方二十年十二月二十六號
司法省訓令第二十六號

司法省變則法學生徒卒業者代官營業ヲ出願セシトキハ代官人規則第二十七條第二十八條ニ關セシ免許狀ヲ授與スヘキニ付出願ニ際シ卒業證書ヲ檢査シ其寫ヲ願書ニ添ヘテ進達スヘシ

○

○代人規則 明治六年六月 第二百十五號布告

人民一般商業及ヒ其他ノ事ニ因リ代人ヲ以テ契約取引等致シ候規則別紙ノ通被定候條此旨相達候事

(別紙)

代人規則

第一條 凡ソ何人ニ限ラス已レノ名義ヲ以テ他人ヲシテ其事ヲ代理セシムルノ權アルヘシ

但シ本人幼年等ニテ其事理ヲ辨シ難キ時ハ其後見人及ヒ親族ノ者協議ノ上代人ヲ任スルヲ得ヘシ

第二條 凡ソ他人ノ委任ヲ受ケ其事件ヲ取扱フ者ハ代人ニシテ其事件ヲ委任スル者ハ本人ナリ故ニ代人委任上ノ所行ハ本人ノ關係タルヘシ

第三條 凡ソ代人ハ心術正實ニシテ滿貳拾歲以上ノ者ヲ撰ムヘシ(九 第四十四號布告ヲ以テ改正)

第四條 代人ハ總理代人部理代人ノ別アリ總理代人ハ其本人身上諸般ノ事務ヲ代理スル者ニシテ部理代人ハ特ニ其委任スル部内ノ事務ヲ代理スルヲ得ル者トス

第五條 凡ソ本人ヨリ代人ヲ任シ他人ト契約取引等ヲ爲サント欲スル時ハ必ス實印ヲ押シタル委任狀ヲ與フ可シ

但シ其家業取扱フ場所ニ於テ通常ノ事務ヲ取扱ハシムルノ類ハ別段委任狀ヲ與フルニ及ハス

第六條 委任狀ハ總理代人又ハ部理代人タル事及ヒ其委任シタル權限ヲ明白ニ記載スヘシ

第七條 委任狀書式左ノ通

拙者共 儀某ノ事件ニ付何誰ヲ以テ總理代人ト定メ拙者ノ名義ニテ
左ノ權限ノ事ヲ代理爲致候事

一何々ノ事但權限ノ次第ヲ
分條記載ス可シ

右代理ノ委任狀仍如件

年號何年何月何日

住所身分姓名印

後見人等ハ住所身分何誰
ノ後見人何誰ト記ス可シ

第八條

代人ヲ任スルノ期限ハ豫メ規定シ難キモノト雖モ其本人幼
弱疾病事故等ニテ長ク委任セントスル時ハ其地方ニ新聞紙アラハ
之ニ記入セシメ世上ニ公布スヘシ

○登記法明治十九年八月
法律第一號

沿革略記

明治五年正月大藏省ヨリ東京府ニ地券發行地租收入
規則ヲ達シ新規並書換地券印稅ヲ定ム○同年二月大
藏省第二十五號ヲ以テ地所賣買讓渡ニ付地券渡方規則ヲ達
シ新規並書換ノ證印稅ヲ定ム○同年五月第五十號ヲ以テ地
所永代賣買ヲ許シ人民ニ其所有權ヲ附ス○六年一月第十八
號布告ヲ以テ地所賣買入書規則ヲ定メ戸長ヲシテ證文ヲ與
書證印セシム○同年十二月第三百九十六號布告ヲ以テ代替
授與並水火盜難ニヨリ地券書換證印稅ヲ定ム○七年十月第
百四號布告ヲ以テ地所賣買受ケ代金受取ノ證文アルモ地券中
受ケサレハ買主ニ所有權ナキモノトナシ是レカ罰例ヲ定ム
○八年六月第六百六號布告ヲ以テ七年第四百四號布告ヲ改正ス
○同年九月第四百四十八號布告ヲ以テ建物書入質規則並建物
賣買讓渡規則ヲ定メ書入質並賣讓渡證文ニ戸長ヲシテ與
書割印セシム○同年十月第五百五十三號布告ヲ以テ家督相續
贈遺等ノ地所地券書換手續ヲ定ム○九年五月地租改正事務
局甲第一號布達ヲ以テ六年第三百九十六號布告ノ稅額及荒
地其他無代價券狀授與書換ノ證印稅ヲ改正ス○十年三月第
二十八號布告ヲ以テ船舶賣買書入質手續ヲ定ム○同年九月
地租改正事務局甲第二號布達ヲ以テ荒地起返及開墾鐵下年
季明地其他一筆地ヲ數筆ニ分裂數筆地ヲ一筆ニ合併等ニテ
所有主變換セサル地券書換證印稅ヲ定ム○十三年十一月第
五十二號布告ヲ以テ八年第六百六號及第五百十三號布告ヲ廢

シ更ニ土地賣買讓渡規則ヲ定ム○十四年五月第三十號布告
ヲ以テ從前ノ證印稅則ヲ廢止シ更ニ地券證印稅則ヲ制定ス
○十五年十二月第六十號布告ヲ以テ地所建物船舶賣買讓渡
及賣入書入ノ戶長公證猶豫ノ時機ヲ示ス○十九年八月法律
第一號ヲ以テ十年第二十八號布告船舶賣買書入質手續十三
年第五十二號布告土地賣買讓渡規則十四年第三十號布告地
券證印稅則其他從前ノ法律規則中抵觸スルモノヲ廢シ登記
法ヲ定ム是レ現行法ナリ

朕登記法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セムシ

登記法

第一章 總則

第一條 地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ヲ爲ス者ハ本法ニ從ヒ地
所建物ハ其所在地船舶ハ其定繫場ノ登記所ニ登記ヲ請フ可シ(二十
律第一號ヲ以テ改正)
已ニ登記ヲ受ケタル地所建物船舶ニ變更ヲ生シ又ハ亡失破壊シタ
ルトキハ其物件ノ所有者ヨリ登記ノ變更又ハ取消ヲ請フヘシ(二十
律第一號ヲ以テ本項追加)

二十一年勅令第六十四號
治安裁判所出張所
治安裁判事務ヲ取扱
シテ該勅令ハ第十三類ニ
シテ該勅令ハ第十三類ニ
載ス

二十二年法律第十三號
地所建物船舶賣買讓
渡規則ニ登錄スルモノト
ス以下之

第二條 地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ノ登記ハ始審裁判所長之
ヲ監督ス可シ

第三條 登記事務ハ治安裁判所ニ於テ之ヲ取扱フモノトス治安裁判
所遠隔ノ地方ニ於テハ郡區役所其他司法大臣指定スル所ニ於テ之
ヲ取扱ハシム

第四條 登記所ノ位置及其管轄ノ區域ハ司法大臣之ヲ定ム

第五條 登記官吏ハ登記事務取扱ニ付テハ始審裁判所長ノ監督ヲ受
クルモノトス

第六條 登記簿ニ登記ヲ爲サル地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入
ハ第三者ニ對シ法律上其効ナキモノトス

第七條 地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ニ付キ登記ス可キ概目左
ノ如シ

第一 地所ハ郡區町村名字、番地、地目、反別若クハ坪數、地券面
ノ價格

- 第二 建物ハ郡區町村名字番地地目構造ノ種類建坪造作ノ有無
- 第三 西洋形船舶ハ汽船風帆船ノ區別船名番號登簿噸數公稱馬力汽機及汽罐ノ種類端船其他必要ノ所屬品
- 第四 日本形船舶ハ船名番號積石數間數端船其他必要ノ所屬品
- 第五 登記ノ事由
- 第六 金額
- 第七 質入書入ハ其期限及利息
- 第八 所有者及登記ヲ受クル者ノ氏名住所
- 第九 一筆ノ地所又ハ一棟ノ建物ヲ區別シ賣買讓與質入書入ヲ爲ストキハ其事實
- 第十 二番以後ノ書入ヲ爲シ又ハ書入ニ爲シタルモノヲ質入ト爲シ質入ニ爲シタルモノヲ書入ト爲ストキハ其事實

第十一 登記ノ年月日

第八條 登記ヲ請フ者アルトキハ登記官吏直ニ前條ノ概目ヲ審査シテ登記簿ニ登記シ本人ニ之ヲ示シ又ハ讀聞セタル上本人ヲシテ署名捺印セシメ且之ニ署名捺印スヘシ

第九條 地所建物船舶ニ關スル差押假差押差留假差留假處分及地所建物ノ收益差押ニ付テハ裁判所ノ命令書ニ依リ登記簿ニ其記入ヲ爲スヘシ

前項ノ記入ハ裁判所ノ命令アルトキニ非サレハ之ヲ取消スコトヲ得ス

第十條 登記ハ第一條第二項第十五條第二項第十六條第十七條及第十八條ヲ除クノ外契約者雙方ノ請求若クハ裁判所ノ命令アルトキニ非サレハ之ヲ爲シ又ハ變更シ又ハ取消スコトヲ得ス(二十年法律(テ改)第一號ヲ以テ改)

第十一條 登記ノ謄本又ハ拔書又ハ一覽ヲ要スル者ハ其登記所ニ出頭シテ之ヲ請求スルコトヲ得

第十二條 登記官吏ノ職務執行上ニ關シ不服アル者ハ管轄始審裁判所ニ抗告スルコトヲ得

第十三條 登記ニ關スル取扱ノ手續及登記簿ノ書式ハ司法大臣之ヲ定ム

第二章 賣買讓與

第十四條 地所建物船舶ノ賣買讓與ニ付キ登記ヲ請フトキハ契約者雙方出頭シ其證書ヲ示ス可シ

前項ノ場合ニ於テ其物件質入書入中ニ係ルトキハ買受人讓受人ニ於テ之ヲ了知セル旨ヲ申出其記入ヲ請フ可シ

第十五條 家督相續ニ因リ地所建物船舶ノ登記ヲ請フトキハ雙方出頭シ其證書ヲ示ス可シ

死亡者失踪者若クハ離縁戸主ノ遺留シタル地所建物船舶ヲ相續スル者登記ヲ請フトキハ親屬又親屬ナキトキハ近隣ノ戸主二名以上連署ノ書面ヲ差出シ且證明書類アルモノハ之ヲ示ス可シ

第十六條 行政官廳ノ公賣處分ニ因リ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者登記ヲ請フトキハ落札達書及其代金完納ノ證書ヲ示ス可シ

第十七條 官有ノ地所建物船舶ノ拂下又ハ無代價下渡ヲ受ケ登記ヲ請フトキハ其指令ノ本書若クハ達書ヲ示ス可シ

第十八條 民有ノ地所建物船舶ヲ官有ト爲シタルトキハ其管廳ハ第七條ノ概目ヲ示シテ登記ヲ求ム可シ

第十九條 裁判執行上ノ糶賣若クハ入札ニ因リ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者アルトキハ裁判所ノ命令ニ依リ其登記ヲ爲ス可シ

第二十條 地所船舶ノ賣買讓與ニ因リ地券鑑札ノ下付若クハ書換ヲ請フ者ハ登書所ヨリ登書濟ノ證ヲ受ク可シ(二十年法律第一號ヲ以テ改正)

第三章 質入書入

第二十一條 地所建物船舶ノ質入書入ニ付キ登記ヲ請フトキハ契約者雙方出頭シ其證書ヲ示ス可シ

貸借ノ爲メニ非スシテ義務ヲ果ス可キ保證ノ爲メ地所建物船舶ヲ

以上五千圓マテ毎ニ貳圓ヲ増加ス

第二十六條 地所建物船舶讓與ノ登記ニ付テハ其讓渡人讓受人ニ於テ時價相當ノ價格ヲ定メ前條ニ掲クル金額ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其讓受人ヨリ登記料ヲ納ム可シ

第二十七條 地所建物船舶質入書入ノ登記ニ付テハ其質入人書入人ハ第二十五條ニ掲クル金額ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其登記料ノ半額ヲ納ム可シ但一件ニ付キ金五錢ヨリ下スコトヲ得ス

第二十八條 第二十一條第二項ノ登記ニ付テハ價格ヲ定メ前條ノ例ニ依リ其登記料ヲ納ム可シ

第九條第一項ノ記入ニ付テハ其價格ノ定マリタル物件ハ其價格又其價格ノ定マラサル物件ハ時價相當ノ價格ヲ定メ前條ノ例ニ據リ其登記料ヲ納ム可シ

第二十九條 第十五條ノ登記ニ付テハ時價相當ノ價格ヲ定メ第二十五條ニ掲クル金額ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其登記料ノ五分一ヲ納ム

可シ但一件ニ付キ金五錢ヨリ下スコトヲ得ス

第三十條 左ニ掲クル者ハ手数料トシテ金五錢ヲ納ム可シ

第一 登記事件ノ取消又ハ其變更ノ登記ヲ請フ者ハ每一件

第二 登記ノ謄本若クハ拔書ヲ請フ者ハ每一枚

第三 登記ノ一覽ヲ請フ者

第三十一條 左ニ掲クルモノハ登記料及手数料ヲ要セス

第一 官廳ノ請求ニ係ル登記

第二 公立ノ學校病院公園及養育院ニ係ル登記

第三 社寺堂宇及墳墓地ニ係ル登記

第四 人民共有ノ用悪水路溜池敷、堤敷、井溝敷及公衆ノ用ニ供スル道路ニ係ル登記

第三十二條 登記所ニ於テ第二十五條第二十六條第二十八條第二項及第二十九條ニ從ヒ届出タル價格ヲ不相當ト認ムルトキハ其事件ニ關係ナキ者二名ヲ選ビ之ヲ評價人ト爲シテ其價格ヲ評定セシム

可シ

第三十三條 評價人ノ評定シタル價格届出ノ價格ヨリ増加スルトキハ其評價ニ關スル費用ハ其登記料ヲ納ムル者之ヲ負擔ス可シ若シ其價格届出ノ價格ト同價又ハ低下ナルトキハ該費用ハ其登記所ニ於テ之ヲ支辨ス可シ

第三十四條 評價人ニ選ハレタル者ハ正當ノ事由ナクシテ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第三十五條 評價人ノ日當ハ登記所ノ見込ヲ以テ一日金貳拾錢ヨリ五拾錢マテヲ給ス可シ

第五章 罰則

第三十六條 詐偽ノ所爲ヲ以テ登記料ヲ減脫シ及之ニ通謀シタル者ハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十七條 本法ニ依リ罰金ニ處スル者ハ刑法ノ不論罪及減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

附則

第三十八條 明治十年第二十八號布告船舶賣買書入質手續同十三年第五十二號布告土地賣買讓渡規則同十四年第三十號布告地券證印稅則其他從前ノ法律規則中本法ニ牴觸スルモノハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

第三十九條 「地所賣買讓與荒地起返開墾銀下年期明等總テ地券下付書換ニ係ル手續及其手数料ハ大藏大臣之ヲ定ム」

第四十條 登記所ノ登記簿ニ未タ登記セサル地所建物船舶ニ付キ登記ヲ請フ者ハ地所建物ハ其所在地船舶ハ其定繫場ノ戸長ノ證書ヲ以テ其所有者タルコト及其物件ニ故障ナキコトヲ示ス可シ

第四十一條 本法ハ明治二十年二月一日ヨリ之ヲ施行ス

○登記事務費ハ國庫ノ支出トス
明治二十年六月
勅令第二十四號
朕登記事務費國庫支出ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

登記法第三條ニ依リ郡區役所其他司法大臣ノ指定スル所ニ於テ
取扱フ登記事務ノ費用ハ本年七月一日ヨリ國庫ノ支出トス

○登記印紙規則 明治二十一年十月
勅令第六十六號

朕登記印紙規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

登記印紙規則

第一條 明治十九年八月法律第一號登記法ニ定メタル登記料及手

數料ハ登記印紙ヲ以テ納付スヘシ

第二條 登記印紙ハ登記法ノ定率ニ從ヒ登記ニ關スル請求ノ書

面ニ貼用シ請求人記名ノ下ニ押捺スル印ヲ以テ書面ト印紙ノ

彩紋トニケカテ消印スヘシ

第三條 登記印紙ノ種類定價及其賣下ニ關スル手續ハ大藏大臣

之ヲ定ム

第四條 登記印紙ハ官廳ノ許可シタル賣捌所ノ外ニ於テ之ヲ賣

二十一年大藏省令第十三
號ヲ以テ登記印紙ノ種類
定價ヲ定ム

捌クコトヲ得ス若其實捌所ノ外ニ於テ之ヲ賣捌キタル者ハ二
圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス其情
ヲ知テ登記印紙ヲ買取シタルモノハ二圓以上十圓以下ノ罰金
ニ處ス

第五條 前條ノ規則ヲ犯シタルモノニハ刑法ノ不論罪及減輕再
犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第六條 本規則ハ明治二十一年十二月一日ヨリ施行ス

○登記所位置及管轄區域 十九年十二月
司法省令甲第五號
登記所ノ位置及ヒ管轄區域別表ノ通之ヲ定ム
(別表略之)

○登記請求手續 十九年十二月
司法省令甲第五號

本年八月法律第一號ヲ以テ登記法創定ニ付キ明治二十年二月以
後登記ヲ請フ者ハ左ノ手續ニ依ル可シ

第一條 登記ヲ請フ者ハ第一號書式ニ準シ登記ノ件目等ヲ記載
シ實印ヲ押シタル名刺ヲ登記所ニ差出ス可シ

登記簿ノ謄本若クハ拔書又ハ登記簿ノ閱覽ヲ請フ者亦同シ

第二條 後見人ヨリ登記ヲ請フトキハ後見人タルノ證書ヲ登記

所ニ差出ス可シ
 代人ヲ以テ登記ヲ請フトキハ代理ノ委任狀ヲ付與シ之ヲ登記
 所ニ差出サシム可シ
 第三條 初テ登記ヲ請フ者ハ第二號書式ニ準シ區長ノ證明シ
 タル印鑑ヲ登記所ニ差出ス可シ
 第四條 地所ニ付キ初テ登記ヲ請フ者ハ地券ヲ登記官ニ示ス可
 シ但現ニ質入中ノ地所ニ付テハ此限ニ在ラス
 船舶ニ付テハ鑑札ヲ示ス可シ但船舶ニ釘付シタルモノハ此限
 ニ在ラス
 第五條 建物ニ付キ登記ヲ請フトキハ其圖面ヲ登記所ニ差出ス
 可シ
 建物ノ圖面ハ地ノ形狀、坪數(段別)方位及ヒ建物ノ形狀、間尺、位
 置等ヲ記シ登記ヲ受ク可キ建物ノ圖ハ墨引墨字ト爲シ登記外
 ナル建物アルトキハ其圖ハ朱引朱字ト爲ス可シ
 建物ノ圖面ニハ登記法第九條第十六條第十七條第十八條第十
 九條ノ場合ヲ除ク外、結約者雙方之ニ署名捺印ス可シ但同第
 十五條第二項ノ場合ニ於テハ親屬又ハ近隣戶主之ニ連署ス可
 シ
 地所船舶ニ付キ圖面アルトキモ亦前項ニ定メタル署名捺印若
 クハ連署ヲ要ス
 第六條 地所ヲ分割シテ賣買讓與シ又ハ質入書入ト爲ストキハ
 前條ニ準シ其圖面ヲ差出ス可シ

第七條 裁判執行上ノ羅賣若クハ入札ニ因リ地所建物船舶ノ所
 有權ヲ得タル者其登記ヲ請ヒ又ハ地所建物船舶ニ關スル差押
 假差押差留假差留假處分及地所建物ノ收益差押ニ付キ記入若
 クハ取消ヲ請フニハ裁判所ヨリ其命令書ヲ受ケ之ヲ登記所ニ
 示ス可シ
 裁判言渡ニ依リ登記變更若クハ取消ヲ請フトキ亦前項ニ同シ
 第八條 登記法第三十二條ニ依リ評價ヲ要スルトキハ登記所ノ
 命令ニ從ヒ登記料ヲ納ムル者ヨリ評價費用ノ見積金額ヲ豫納
 スヘシ
 第九條 登記濟ノ證ヲ請フ者ハ第三號書式ニ準シ物件等ヲ記載
 ヒル願書ヲ登記所ニ差出ス可シ
 第十條 登記ヲ受タル物件ノ全部若クハ一部毀壞燒失流亡等ニ
 依リテ消滅シタルトキハ其物件ノ所有者ヨリ登記ヲ爲タル登
 記所ニ書面ヲ以テ其旨ヲ届出ツ可シ但其物件質入書入又ハ差
 押差留等ニ係ルトキハ債主又ハ差押差留等ノ權利者ノ連印ヲ
 要ス
 地目變換ノ場合ニ於テモ亦前項ノ例ニ準シ届出ヲ爲ス可シ
 第十一條 船舶ノ定繫所ヲ更改シタルトキハ原登記所ヨリ登記
 簿ノ謄本ヲ受ケ之ヲ轉入地ノ登記所ニ差出シ其登記ヲ請フ可
 シ
 同一ノ登記所ニ屬スル町村ニ轉入シタル場合ニ於テハ其登記
 所ニ登記ノ變更ヲ請フ可シ

(書式略之)

○登記官吏及公證人ニ關シ抗告手續十九年十一月三日今般法律第一號第二號ヲ以テ登記法及ヒ公證人規則制定相成候ニ付其抗告手續左ノ通之ヲ定ム

抗告手續

- 第一條 登記官吏又ハ公證人ノ職務執行ニ關シ抗告ヲ爲ス者ハ抗告狀ヲ其登記官吏又ハ公證人ニ差出ス可シ
- 第二條 登記官吏又ハ公證人抗告狀ヲ受取リタルトキハ其翌日ヨリ三日以内ニ意見ヲ附シ且ツ關係書類ノ寫ヲ添ヘ抗告狀ヲ管轄始審裁判所ニ送致ス可シ
- 第三條 登記官吏又ハ公證人若シ前條ノ期限内ニ抗告狀ヲ管轄始審裁判所ニ送致セザルトキハハ急速ヲ要スル場合ニ於テハ抗告者ハ直チニ管轄始審裁判所ニ抗告狀ヲ差出スコトヲ得
- 第四條 登記官吏又ハ公證人ハ其職務執行上ニ關シ抗告ヲ受ケタルトキハ其處分ヲ停止ス可シ
- 第五條 抗告狀ヲ受取タル管轄始審裁判所ハ書面ニ依リ判定ヲ爲ス可シ
- 第六條 始審裁判所ハ必要ナリト認ムル場合ニ於テハ抗告者其他關係人ニ書面ヲ以テ答辨セシムルコトヲ得

始審裁判所ハ必要ナリト認ムル場合ニ於テハ抗告者其他關係人ニ書面ヲ以テ答辨セシムルコトヲ得

- 之ヲ登記官吏又ハ公證人及ヒ抗告者ニ送附セシム可シ
- 始審裁判所ニ於テ抗告ヲ正當ナリト判定シタルトキハ登記官吏又ハ公證人ハ其判定ニ依リ處分ヲ更正ス可シ
- 第七條 公證人懲罰處分ニ對シ不服アル者ハ其處分ノ翌日ヨリ起算シ七日内ニ其處分ヲ爲シタル管轄始審裁判所ニ抗告狀ヲ差出ス可シ
- 裁判所ハ其抗告ヲ正當ナリト認ムルトキハ速ニ其不服ノ點ヲ更正ス可シ若シ之ヲ正當ナラスト認ムルトキハ第二條ノ期日内ニ意見ヲ附シ關係書類ヲ添ヘ抗告狀ヲ管轄控訴院ニ送致ス可シ
- 第八條 公證人懲罰處分ニ對スル抗告ニ付テモ亦第三條ノ手續ニ依ルコトヲ得
- 第九條 公證人懲罰處分ニ對スル抗告狀ヲ受取タル控訴院ハ第五條ノ手續ニ從ヒ判定ヲ爲ス可シ
- 第十條 控訴院ハ其判定書ヲ處分ヲ爲シタル始審裁判所ニ送致シ之ヲ言渡サシム可シ
- 控訴院ニ於テ抗告ヲ正當ナリト判定シタルトキハ處分ヲ爲シタル始審裁判所ハ其判定ニ依リ處分ヲ更正ス可シ
- 第十一條 抗告ノ判定ニ對シテハ總テ上訴ヲ爲スヲ得サルモノトス

○地所建物船舶ニ對シ假差押請求方十九年十二月七日本年法律第一號ヲ以テ登記法制定セラレタルコト付テハ明治十五

年第六十號布告公證猶豫願ノ手續ハ明治二十年二月一日以後消滅スベキヲ以テ地所建物船舶ニ對シ假差押ヲ爲サント欲スル者ハ管轄裁判所ニ其請求ヲ爲ス可キモノトス

○公證人規則明治十九年八月法律第二號

朕公證人規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

公證人規則

第一章 總則

第一條 公證人ハ人民ノ囑託ニ應シ民事ニ關スル公正證書ヲ作ルヲ以テ職務ト爲ス

第二條 公證人ハ法律命令ニ背キタル事件ノ公正證書又ハ他ノ官吏ノ作ル可キ公證書類ヲ作ルコトヲ得ス若シ之ヲ作りタルトキハ公正ノ効ヲ有セス

第三條 公證人ノ作りタル公正證書ハ完全ノ證據ニシテ其正本ニ依リ裁判所ノ命令ヲ得テ執行スル力アルモノトス但刑事裁判所ニ偽造ノ訴アルトキハ其證書ノ執行ヲ中止ス可シ又民事裁判所ニ偽造ノ申立アルトキハ其證書ノ執行ヲ中止スルヲ得

第四條 公證人ハ治安裁判所ノ管轄地ヲ以テ受持區トシ其區内ニ於テ司法大臣ノ認可ヲ受ケタル町村内ニ住居シ其住宅ニ役場ヲ設ケ役場ニ於テ職務ヲ行フ可シ但役場外ニ住居セントスルトキハ管轄始審裁判所ノ認可ヲ受ク可シ

已ムヲ得サル事件ニ付テハ受持區内ニ限り役場外ニ於テ其職務ヲ行フ可シ

第五條 各區内公證人ノ員數ハ司法大臣之ヲ定ム

第六條 公證人ハ司法大臣ニ隸屬シ控訴院長始審裁判所長ノ監督ヲ受クルモノトス

第七條 公證人其受持區内ニ於テハ區外人ノ爲メニモ職務ヲ行フ可

シ但受持區外ニ於テハ何人ノ爲メニモ職務ヲ行フコトヲ得ス若シ之ヲ行ヒタルトキハ其書類ハ公正ノ効ヲ有セス

第八條 公證人ハ理由ナクシテ人民ノ囑託ヲ拒ムコトヲ得ス若シ之ヲ拒ミタルトキ囑託人ノ求アレハ其理由ヲ記シテ渡ス可シ

第九條 公證人ノ職務執行上ニ關シ不服アル者ハ管轄始審裁判所ニ抗告スルコトヲ得

第十條 公證人ハ公證人何某ト刻シタル方六分ノ役印ヲ作り其印鑑ニ氏名ヲ手書シ之ヲ管轄始審裁判所及治安裁判所ニ差出ス可シ前項ノ印鑑ヲ差出サ、ル間ハ職務ヲ行フコトヲ許サス若シ之ヲ行ヒタルトキハ其書類ハ公正ノ効ヲ有セス

第十一條 公證人已ムヲ得サル事故アリテ職務ヲ行フコト能ハサルトキハ近隣ノ公證人ニ代理ヲ囑シ管轄始審裁判所ニ其旨ヲ届出可シ

第十二條 公證人ハ筆生ヲ置キ書類ヲ作ル補助ヲ爲サシムルコトヲ

得

第十三條 公證人ノ作ル證書及謄本ノ用紙ハ某始審裁判所管内公證人役場ト刻シタル罫紙ヲ用フ可シ

第十四條 公證人ノ取扱フ可キ書類左ノ如シ

第一 原本 證書ノ本紙ニシテ公證人ノ保存スルモノ

第二 正本 原本ノ全文ヲ記シタルモノニシテ本文義務ノ執行ヲ裁判所ニ願出可キ旨ヲ其末尾ニ記載シタルモノ

第三 抄録正本 原本ノ一部分ヲ記シ其末尾ニ前項ト同一ノ記載アルモノ

第四 正式謄本 原本ノ全文ヲ寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得可キモノ

第五 抄録正式謄本 原本ノ一部分ヲ抄寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得可キモノ

第六 謄本 原本ノ全文ヲ寫シタルモノ

第七 抄録謄本 原本ノ一部分ヲ抄寫シタルモノ

第八 見出帳 日々授受シタル書類ノ番號種類等ヲ順次ニ記入スルモノ

第十五條 原本其他書類ノ本書ハ役場ニ之ヲ保存シ他ノ官吏ノ公證ヲ受クル爲メノ外裁判所ノ命令ニ依ルニ非ザレハ役場外ニ出スコトヲ得ス

第十六條 裁判所ノ命令ニ依ルノ外關係外ノ者ニ書類ノ謄本ヲ渡ス可カラス

第十七條 公證人ハ其取扱ヒタル公證事件ヲ漏洩ス可ラス

第二章 公證人ノ選任及試験

第十八條 公證人タル可キ者ハ左ノ件々ヲ具備スルヲ要ス

第一 滿二十五歳以上ナル事

第二 身元保證金ヲ管轄始審裁判所ニ差入ル、事

第三 定式試験ノ及第證書ヲ有スル事但裁判官檢察官タリシ者及

法學士法科大學卒業生代言人ハ此條件ヲ要セス

第四 丁年者二名以上ニテ其品行ヲ保證スル證書ヲ有スル事

第十九條 保證金ノ額ハ土地ノ狀況ニ從ヒ貳百圓以上五百圓以下ニ於テ豫メ司法大臣之ヲ定ム

第二十條 左ニ掲クル者ハ公證人タルコトヲ得ス

第一 公權剝奪若クハ停止中ノ者

第二 盜罪詐偽罪賄賂收受ノ罪及贓物ニ關スル罪ヲ犯シ刑ヲ受ケタル者

第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

第四 官吏懲戒令ニ依リ免職セラレタル者

第二十一條 公證人ヲ試験スル場所及期日ハ司法大臣之ヲ定メ少クモ二箇月前ニ告示ス可シ

第二十二條 試験委員ハ控訴院若クハ始審裁判所ノ裁判官二名檢察官一名トシ司法大臣臨時之ヲ命ズ

第二十三條 試験ノ科目ハ公證人規則、民法、訴訟法、商法其他公證人ノ職務ニ關スル法律命令トス

第二十四條 公證人タラント欲スル者ハ願書ニ試験及第證書ノ寫ヲ添ヘ管轄始審裁判所若クハ控訴院ヲ經テ司法大臣ニ差出ス可シ但裁判官檢察官タリシ者ハ其官記法學士ハ其學位記法科大學卒業生ハ其卒業證書代言人ハ其免許狀ヲ以テ及第證書ニ代フルコトヲ得

第二十五條 公證人ハ司法大臣之ヲ任ス

第二十六條 試験ノ方法ハ筆記口述ノ二種トス筆記試験ニ合格セザル者ハ口述試験ヲ受クルコトヲ得ス

第二十七條 試験及第者ニハ及第證書ヲ授與ス

第三章 證書

第一節 證書ノ原本

第二十八條 公證人證書ヲ作ルニハ其囑託人ノ氏名ヲ知り面識アルヲ必要トシ且丁年者一名ノ立會人ヲ要ス之ニ違ヒタルトキハ其證

書ハ公正ノ効ヲ有セス

公證人囑託人ノ氏名ヲ知ラス面識ナキトキハ其本籍或ハ寄留地ノ郡區長若クハ戸長ノ證明書又ハ公證人氏名ヲ知り面識アル丁年者二人以上ヲ以テ其人ヲ證セシム可シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第二十九條 左ニ掲クル者ハ立會人タルコトヲ得ス

第一 公證人及囑託人ノ親屬雇人又ハ公證人ノ筆生

第二 第二十條ニ掲ケタル者

第三十條 證書ニハ其本旨ノ外左ノ件々ヲ記載ス可シ

第一 囑託人及立會人ノ族籍住所職業氏名年齢

第二 囑託人代理人ナルトキハ委任狀ヲ所持シタルコト及其本人ノ族籍住所職業氏名年齢

第三 囑託人後見人ナルトキハ後見人タルノ證書ヲ所持シタルコト及其本人ノ族籍住所職業氏名年齢

第四 郡區長戸長ノ證明書ヲ以テ證シタルトキハ其旨又證人ヲ要シタルトキハ其族籍住所職業氏名年齢

第五 證書ヲ作リシ場所及其年月日若シ場所ヲ記セス又ハ年月日ノ記入ヲ遺脱シタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十一條 證書ヲ作ルニハ普通平易ノ語ヲ用ヒ字畫明瞭ナルヲ要ス「接續ス可キ字行ニ空白アルトキハ墨線ヲ以テ之ヲ接續ス可シ」數量並ニ年月日ヲ記スルニハ壹貳參肆伍陸柒捌玖拾陌阡萬ノ字ヲ用フ可シ

第三十二條 度量衡貨幣ノ數量名稱及曆法ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ之ヲ記ス可シ

既ニ廢シタル度量衡貨幣曆法又ハ外國ノ度量衡貨幣曆法ヲ記セサルヲ得サル場合ニ於テハ之ヲ用フルコトヲ得

第三十三條 證書ニ追加改正ヲ爲ストキハ其文字并ニ何行ニ追加改正ヲ爲シタルコトヲ欄外又ハ末尾ノ餘白ニ附記シ公證人並ニ關係

人捺印ス可シ又文中消字ヲ爲ストキハ其原字ノ尙ホ明カニ讀得可キコトヲ要ス且何行ニ若干字ヲ消シタルコトヲ欄外又ハ末尾ノ餘白ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ追加改正消字ノ効ヲ有セス

第三十四條 證書ヲ作リタルトキハ關係人ニ讀聞セ其旨ヲ記入シ然ル後ニ公證人並ニ關係人各自署名捺印シ公證人ハ某治安裁判所管内某地住居ト肩書ス可シ

公證人並ニ關係人ノ署名捺印ナキトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス若シ署名スル能ハサル者アルトキハ明治十年第五十號ノ布告ニ從フ可シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十五條 證書ノ綴目合目ニハ公證人並ニ囑託人之ニ捺印ス可シ
第三十六條 公證人ハ自己及親屬ノ爲メニ證書ヲ作ルコトヲ得ス其親屬他人ノ代理人タルトキモ亦同シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

十年第五十號布告ハ本類ニ載ス參看

第三十七條 公證人若シ囑託人ノ爲メ訴訟代人若クハ代言人ト爲リ又ハ爲リタルコトアルトキハ其訴訟事件ニ付キ證書ヲ作ルコトヲ得ス之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十八條 公證人ハ自己親屬立會人又ハ證人ノ爲メニ利益アル條件ヲ證書中ニ記ス可カラス若シ之ヲ記シタルトキハ其條件ハ無効トス

第三十九條 公證人ハ證書ノ原本ヲ保存ス可シ若シ之ヲ保存セス又ハ亡失シタル場合ニ於テ第四十七條ノ手續ヲ爲サルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第四十條 囑託人若シ代理人又ハ後見人ナルトキハ其委任狀又ハ其證書ノ寫ヲ原本ニ連綴ス可シ其寫ニハ本書ト對照シ相違ナキ旨ヲ附記シ公證人並ニ關係人署名捺印シ其寫ト本書トニ割印ス可シ

第四十一條 證書ニ關係ノ書類ハ之ヲ原本ニ連綴スルコトヲ得之ヲ連綴シタルトキハ其旨ヲ原本ノ欄外又ハ末尾ニ附記シ公證人並ニ

關係人捺印ス可シ

第四十二條 原本ニハ證券印稅規則ニ定メタル印紙ヲ貼用ス可シ

第二節 正本及謄本

第四十三條 正本ハ數量ノ定リタル金錢其他換用物若クハ有價證券ノ支辨ニ限リ權利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡ス可シ之ニ違ヒタルトキハ正本ノ効ヲ有セス

正式謄本及抄錄正式謄本ハ權利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡ス可シ

第四十四條 正本又ハ正式謄本ハ原本ト同時ニ又ハ原本ヲ作りタル後ニ於テ之ヲ作ルヲ得原本ト同時ニ作ルトキハ關係人ノ面前ニ於テシ原本ヲ作りタル後ニ作ルトキハ更ニ義務者ノ立會ヲ以テス可シ義務者出席セサルトキハ正本又ハ正式謄本ヲ求ムル者ヨリ管轄始審裁判所ニ出願シ其命令ニ依テ他ノ公證人一員又ハ裁判所ノ裁判官檢察官又ハ書記一員ノ立會ヲ以テ之ヲ作ル可シ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セス

裁判所ノ命令ニ依テ正本又ハ正式謄本ヲ作リタルトキハ其末尾并ニ原本ノ末尾ニ其旨ヲ附記シ其命令書ハ之ヲ原本ニ連綴ス可シ

第四十五條 正本又ハ正式謄本ヲ作ルトキハ第三十一條第三十三條第三十四條第三項及第三十五條ノ規定ニ依ル可シ

正本又ハ正式謄本ニハ權利者ノ氏名並ニ之ヲ作リタル年月日及場所ヲ記シ公證人並ニ義務者署名捺印ス可シ前條第一項ノ場合ニ於テハ公證人及他ノ公證人又ハ裁判所ノ官吏署名捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セス

第四十六條 正本又ハ正式謄本ヲ渡シタルトキハ原本ノ末尾ニ其旨ト年月日トヲ附記シ權利者ヲシテ署名捺印セシム可シ

第四十七條 正本又ハ正式謄本ハ原本ノ亡失シタルトキ管轄始審裁判所ノ認可ヲ經之ヲ原本トシテ保存ス可シ

第四十八條 數事件ヲ列記シ數人各自ニ關係ヲ異ニスル證書ハ權利者ノ請求ニ依リ其有用ノ部分ヲ抄録シテ正本又ハ正式謄本ヲ作ル

コトヲ得

正本又ハ正式謄本ヲ渡シタル者ニハ更ニ抄録正本又ハ抄録正式謄本ヲ渡ス可カラス又抄録正本又ハ抄録正式謄本ヲ渡シタル者ニハ更ニ正本又ハ正式謄本ヲ渡ス可カラス之ヲ渡スト雖モ其効ヲ有セス

第四十九條 正本又ハ正式謄本ハ管轄始審裁判所ノ命令アルニ非サレハ再度之ヲ渡スコトヲ得ス之ヲ渡スト雖モ其効ヲ有セス

再度以上正本又ハ正式謄本ヲ得ント欲スル者ハ其事由ヲ具シテ管轄始審裁判所ニ願出ツ可シ管轄始審裁判所ハ原本ヲ保存スル公證人ニ其正本又ハ正式謄本ヲ渡スコキコトヲ命スルコトアルヘシ

其正本又ハ正式謄本ニハ幾度ノ正本又ハ正式謄本ナルコトヲ末尾ニ附記シ公證人署名捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セス

第五十條 抄録正本又ハ抄録正式謄本ハ總テ正本又ハ正式謄本ト同一ノ手續ニ依リ之ヲ作ル可シ其効力モ亦同シ

第五十一條 證書ノ謄本及其附屬書類ノ寫ハ關係人ノ求メニ應シ之ヲ渡ス可シ

第五十二條 謄本ニハ原本ノ全文ヲ寫シ其末尾ニ謄本ト記シ公證人署名捺印ス可シ

第五十三條 抄録謄本ニハ原本ノ年月日及囑託人ノ族籍住所職業氏名ヲ記シ末尾ニ抄録謄本ト記シ公證人署名捺印ス可シ

第五十四條 管轄始審裁判所ノ命令ニ依リ關係外ノ者ニ謄本ヲ渡シタルトキハ其命令書ヲ原本ニ連綴シ末尾ニ命令書ヲ受ケタル旨並ニ年月日ヲ附記シ受取人ヲシテ署名捺印セシム可シ

第三節 見出帳

第五十五條 公證人ハ見出帳ヲ作り記入前管轄始審裁判所ニ差出シ綴目合目ニ其所長ノ官印ヲ受ク可シ

第五十六條 見出帳ニハ日々取扱ヒタル書類中ヨリ第三十一條及第三十三條ノ規定ニ從ヒ左ノ件々ヲ記入ス可シ

第一 囑託人ノ住所氏名

第二 書類ノ番號種類

第三 書類ヲ取扱ヒタル年月日

第四節 兼任及書類ノ授受

第五十七條 公證人死去失踪免職辭職轉職又ハ他ノ役場ニ轉シテ直ニ後任者ノ命セラレサル場合又ハ停職ノ場合ニ於テハ管轄始審裁判所ハ近隣ノ公證人ニ命シテ其事務ヲ兼任セシム可シ

役場ヲ廢シタルトキハ書類ノ引繼ヲ近隣ノ公證人ニ命ス可シ

第五十八條 前條ノ場合ニ於テ兼任者ヲキトキ其他必要ト見認ムル場合ニ於テハ管轄始審裁判所ハ直ニ其役場ノ書類ニ封印ヲ爲ス可シ

第五十九條 公證人免職辭職轉職又ハ他ノ役場ニ轉シタル場合ニ於テハ後任者又ハ兼任者ハ前任者ト立會ヒ書類ノ提要目錄ヲ作り共ニ署名捺印シテ授受ス可シ

死去失踪其他ノ事故ニ因リ引渡人ナキ場合ニ於テハ後任者又ハ兼任者ハ管轄始審裁判所ノ官吏ト立會ヒ提要目錄ヲ作り受取ル可シ

書類封印後ニ命セラレタル後任者又ハ兼任者ハ管轄始審裁判所ノ官吏ト立會ヒ封印ヲ解キ提要目錄ヲ作り受取ル可シ

後任者又ハ兼任者ハ提要目錄ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其目錄ノ寫一通ヲ管轄始審裁判所ニ差出ス可シ

第六十條 公證人停職ノ場合ニ於テハ兼任者ハ第五十九條ノ手續ヲ爲スニ及ハス書類ノ保存ハ停職者之ヲ擔當ス可シ

兼任者ハ停職者ノ役場ニ於テ其職務ヲ行フ可シ

第六十一條 兼任者引繼ノ書類ヲ更ニ他ノ公證人ニ引渡ストキハ其命ヲ受ケタル日ヨリ三日以内ニ自己ノ引繼キタルトキノ目錄ニ依テ引渡ヲ爲シ其始末書ヲ作り受繼人ト共ニ署名捺印ス可シ
受繼人ハ始末書ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其寫一通ヲ作り管轄

始審裁判所ニ差出ス可シ

第六十二條 停職者復任スルトキハ管轄始審裁判所ヨリ兼任者ニ解任ヲ命ス可シ

第六十三條 前任者ノ作りタル原本ニ依テ後任者正本又ハ謄本ヲ渡ストキハ其受繼人タル旨ヲ附記ス可シ

本任者ノ作りタル原本ニ依テ兼任者正本又ハ謄本ヲ渡ストキハ兼任者タル旨ヲ附記ス可シ

第四章 手数料及旅費日當

第六十四條 公證人ハ此章ニ定メタル程限ニ從ヒ囑託人ヨリ手数料及旅費日當ヲ受クルコトヲ得

第六十五條 手数料ハ原本一枚ニ付キ貳拾五錢正本及謄本ハ一枚ニ付キ拾錢但一行二十字二十行ヲ以テ一枚トシ十行以上ハ一枚十行以下ハ半枚ヲ以テ算ス

第六十六條 囑託人ノ求メニ依リ先ツ證書ノ草案ヲ渡シ後其原本ヲ

作リタルトキハ草案ノ手数料ヲ別ニ請求スルコトヲ得ス但其原本
ヲ作ラサルトキハ原本手数料ノ半額ヲ受クルコトヲ得

第六十七條 公證人其役場ヨリ一里以外ノ地ニ往テ職務ヲ行フトキ
ハ往返トモ旅費トシテ一里毎ニ貳拾錢ヲ受クルコトヲ得其職務ヲ
行フ爲メ或ハ災變ノ爲メニ其場所又ハ途中ニ滞留スルトキハ日當
七拾錢ヲ受クルコトヲ得

第六十八條 兼任者本任者ニ代リテ其職務ヲ行フトキハ其手数料ハ
總テ兼任者之ヲ受ク可シ

第六十九條 手数料ノ外證券印紙並ニ郵紙ノ代價ハ囑託人ヨリ之ヲ
受クルコトヲ得

第七十條 囑託人ノ求メアルトキハ手数料等ノ計算書ヲ與フ可シ

第七十一條 手数料等ニ係リ争ノ生シタルトキハ其金額ニ拘ハラヌ
管轄始審裁判所ニ訴フ可シ

第五章 懲罰

第七十二條 公證人此規則ヲ犯シタル時ハ管轄始審裁判所ニ於テ第

七十三條ヨリ第七十六條マテニ定メタル規定ニ依リ處分ス可シ

第七十三條 左ノ違犯ハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ過料ニ處ス

第八條ニ違ヒタル時

第十一條ニ違ヒタル時

第十三條ニ違ヒタル時

第三十條ノ第一第二第三第四ノ規定ニ違ヒタル時

第三十一條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時

第三十二條ノ第一項ニ違ヒタル時

第三十四條ノ第一項ニ違ヒ讀聞セシコトヲ記入セス又ハ肩書ヲ爲
サ、リシ時

第三十五條ニ違ヒタル時

第四十條ニ違ヒタル時

第四十一條ニ違ヒタル時

- 第四十二條ニ違ヒタル時
- 第四十四條ノ第二項ニ違ヒタル時
- 第四十六條ニ違ヒタル時
- 第五十二條ニ違ヒタル時
- 第五十三條ニ違ヒタル時
- 第五十四條ニ違ヒタル時
- 第五十五條ニ違ヒタル時
- 第五十九條ノ第四項ニ違ヒタル時
- 第六十一條ニ違ヒタル時
- 第六十三條ニ違ヒタル時
- 第七十四條 左ノ違犯ハ二圓以上五圓以下ノ過料ニ處ス
- 第四十三條ニ違ヒタル時
- 第四十四條ノ第一項ニ違ヒタル時
- 第四十五條ノ第二項ニ違ヒタル時

- 第四十八條ノ第二項ニ違ヒタル時
- 第四十九條ノ第一項又ハ第三項ニ違ヒタル時
- 第七十五條 左ノ違犯ハ五圓以上三十圓以下ノ過料ニ處ス
- 第二條ニ違ヒタル時
- 第七條ニ違ヒタル時
- 第十條ノ第二項ニ違ヒタル時
- 第二十八條ニ違ヒタル時
- 第二十條ノ第五ノ規定ニ違ヒタル時
- 第二十三條ニ違ヒタル時
- 第二十四條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時
- 第二十六條ニ違ヒタル時
- 第二十七條ニ違ヒタル時
- 第二十八條ニ違ヒタル時
- 第二十九條ニ違ヒタル時

第七十六條 左ノ違犯ハ一月以上四月以下ノ停職ニ處ス

第四條ノ第一項ニ違ヒタル時

第十五條ニ違ヒタル時

第十六條ニ違ヒタル時

第十七條ニ違ヒタル時

第七十七條 公證人前數條ニ掲ケタル懲罰處分ニ對シ不服アルトキハ管轄控訴院ニ抗告スルコトヲ得但抗告ハ其處分ノ執行ヲ停止スルノ効力ナキモノトス

第七十八條 公證人停職ニ當ル所爲三度ニ及ヒタルトキハ司法大臣其職ヲ免ス

第二十條ノ第一第二第三ニ記載シタル處分ヲ受ケ又ハ身許保證金ヲ差入レサルトキ亦前項ニ同シ

第七十九條 公證人此規則ヲ犯シタルニ依リ他人ニ損害ヲ生セシメタルトキハ之ヲ賠償ス可シ

○公證人規則施行條例十九年八月甲第二號
今般法律第二號ヲ以テ公證人規則制定相成候ニ付施行條例左ノ通之ヲ定ム

公證人規則施行條例

第一條 公證人ハ一受持區ニ五名以下ヲ置クモノトス

若シ公證人ノ員數不足スルキハ受持區ニ依リテハ全ク之ヲ置カサルヲアル可シ

第二條 公證人ハ其受持區内ニ於テ住居セント欲スル町村ヲ定メ其願書ヲ始審裁判所ニ差出シ控訴院ヲ經テ司法大臣ノ認可ヲ請フ可シ

始審裁判所長及控訴院長ハ公證人ヨリ差出タル住居願ニ意見ヲ附シテ之ヲ司法大臣ニ送達ス可シ

司法大臣ニ於テ公證人ヨリ願出タル住居ヲ認可セサルキハ直チニ其住居ス可キ町村ヲ指定ス

第三條 公證人既ニ住居ノ認可ヲ受タル後火災其他ノ事故アリテ他ニ轉居セントスルキモ亦前條ノ手續ニ從フ可シ

第四條 公證人ノ役場ニハ公證人某役場ト記セル表札ヲ掲ク可シ
役場ニハ成可ク倉庫又ハ堅牢ナル建物ヲ以テ書類保存ノ所ト爲スヲ要ス

書類ハ常ニ書籍ニ藏メ非常持退ノ準備ヲ爲シ置ク可シ
 第五條 公證人規則ニ從ヒ試験ヲ受ケント欲スル者ハ試験願書ニ履歷書ヲ添ヘ試験期日ノ告示アリタルヨリ試験期日一箇月前マテニ試験ヲ行フ控訴院若クハ始審裁判所ニ差出ス可シ
 第六條 試験願書及履歷書ニハ本籍區長若クハ戸長ノ奥書ヲ受ク可シ
 第七條 試験ハ各所同時ニ之ヲ行フモノトス
 第七條 試験委員ハ筆記試験ノ答按ヲ調査シ其合格不合格ヲ決定シタル後口述試験ヲ行フ可シ
 第八條 筆記試験ニ合格セサル者ニ付テハ口述試験ヲ行ハス
 第八條 試験問題答案ノ適否ハ試験委員ノ判斷ニ決スルモノトス
 試験ノ結果ハ筆記口述二種ノ總點ニ依リ之ヲ定ム可シ
 第九條 試験委員ハ口述試験ノ大略及試験全體ノ結果ヲ記録ニ記載ス可シ
 第十條 試験ニ及第シタル者ニハ試験委員ノ連署シタル及第證書ヲ授與ス可シ
 試験ヲ行フタル控訴院若クハ始審裁判所ハ試験及第人名簿ヲ製シ之ニ及第者ノ住所族籍氏名年齢及ヒ及第ノ年月日ヲ登錄ス可シ
 第十一條 試験委員ハ試験ニ關スル一切ノ書類ヲ其試験ヲ行フタル始審裁判所若クハ控訴院ノ長ニ差出ス可シ
 始審裁判所ニ於テ試験ヲ行フタルキハ其裁判所長ハ及第者ニ

關スル一切ノ書類ニ意見ヲ附シテ控訴院ニ送致シ控訴院長モ亦意見ヲ附シテ司法大臣ニ差出ス可シ
 控訴院ニ於テ試験ヲ行フタルキハ前項ノ書類ニ控訴院長ノ意見ヲ附シテ司法大臣ニ差出ス可シ
 第十二條 公證人ヲラント欲スル者ハ其願書ニ試験及第證書官記學位記卒業證書又ハ免許狀ノ寫及丁年者二名以上ニテ品行ヲ保證スル證書ヲ添ヘ之ヲ差出ス可シ
 試験及第證書ヲ要セザル出願人ハ別ニ履歷書ヲ添フ可シ
 第十三條 公證人願ヲ受タル始審裁判所ノ裁判所長及上席檢事ハ出願人ノ身上ニ付品行ノ正否理財ノ整否等詳細ノ取調ヲ爲シ控訴院ニ送致シ控訴院長及檢事長モ亦意見ヲ附シテ之ヲ司法大臣ニ差出ス可シ
 第十四條 公證人願書ヲ直チニ控訴院ニ差出タルキハ控訴院長及檢事長ハ前條ノ取調ヲ爲シ且ツ意見ヲ附シ之ヲ司法大臣ニ差出ス可シ
 第十五條 公證人願書ニハ其職務ヲ行ハント欲スル地ヲ明記ス可シ
 第十六條 司法大臣公證人ヲ任スルキハ辭令書ヲ其公證人ノ職務ヲ行フ可キ地ノ管轄控訴院及始審裁判所ヲ經テ本人ニ下付ス
 控訴院及始審裁判所ニ於テハ公證人名簿ヲ備置キ公證人ニ任セラレタル者ノ住所族籍氏名年齢及任地ヲ記録ス可シ

第十七條 公証人ニ任セラレタル者ハ身元保證金トシテ現金又ハ相當ノ價格アル公債證書若クハ日本銀行株券ヲ管轄始審裁判所ニ納ム可シ

第十八條 公証人ノ納ム可キ身元保證金ノ額ハ左ノ如シ
東京及大坂 金五百圓

他ノ地方ニ於テハ 金四百圓
人口貳拾萬以上アル受持區 金三百圓

人口貳拾萬未滿拾萬以上アル受持區 金貳百圓
人口拾萬未滿アル受持區 金貳百圓

前項ノ金額ハ人口ニ増減アリト雖モ既ニ完納シタルモノハ之ヲ増減セス

第十九條 公証人ハ身元保證金ヲ管轄始審裁判所ニ完納セサル間ハ其職務ヲ行フコトヲ得ス

公証人任命ノ辭令書ヲ受取タルヨリ三十日以内ニ身元保證金ヲ完納セサルキハ公証人規則第七十八條第二項ニ依リ司法大臣其職ヲ免ス

第二十條 公証人ノ身元保證金ハ公証人規則第五章ニ定メアル過料其他賠償ノ抵保ニ充ツルモノトス

第二十一條 過料賠償其他ノ事故ニ依リ身元保證金ノ全部又ハ一部ヲ減消シタルキハ管轄始審裁判所長ハ速ニ保證金ヲ補充ス可キ旨ヲ公証人ニ命ズヘシ
公証人保證金ヲ補充スルマテ始審裁判所長ハ假ニ職務執行ノ

停止ヲ命スルヲ得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ司法大臣ニ具申ス可シ

公証人保證金補充ノ命令ヲ受ケ六十日ヲ過キ之ヲ補充セサルキハ始審裁判所長ハ控訴院ヲ經テ司法大臣ニ具申シ免職ノ處分ヲ請フ可シ

第二十二條 公証人他ノ役場ニ轉スル場合ニ於テ其保證金ニ不足ヲ生スレハ之ヲ補充セシメ若シ餘分アレハ之ヲ還付ス可シ

第二十三條 公証人其職務ヲ罷タルキハ身元保證金ヲ還付ス可シ
第二十四條 公証人死去失踪シ又ハ停職ノ處分ヲ受ケタルキハ管轄始審裁判所ハ控訴院ヲ經由シ其旨ヲ司法大臣ニ具申ス可シ

停職者復任シタルキモ亦前項ノ手續ニ從フ可シ

第二十五條 公証人死去失踪停職復任辭職免職又ハ轉職シタル時ハ始審裁判所及控訴院ハ其旨ヲ公証人名簿ニ記入ス可シ

第二十六條 公証人規則ニ定メアル懲罰處分ハ民事裁判所之ヲ管轄シ刑法及治罪法ノ例ヲ用ヒス

第二十七條 公証人試驗願書式履歷書式及公証人願書式ハ左ノ如シ
(書式略之)

六年第三百六號布告不動
產借入金穀貸借規則參看
本類二載ス
十九年法律第一號登記法
參看本類二載ス

○地所質入書入規則明治六年一月
第十八號布告

先般田地永代賣買被差許候ニ付自今質入書入致シ候節ハ左ノ規則ノ
通可相心得事

地所質入書入規則

第一條 金穀ノ借主_地ヨリ返濟スヘキ證據トシテ貸主_金ニ地所ト證

文トテ渡シ貸主其作德米ヲ以テ貸高ノ利息ニ充候テ地所ノ質入ト
云フ

第二條 金穀ノ借主_地ヨリ返濟スヘキ證據トシテ貸主_金ニ地所引當

ノ證文ノミヲ渡シ借主ノ作德米ノ全部又ハ一部ヲ貸主ニ渡シ利息
ニ充候テ書入ト云フ

第三條 金穀ノ借主_地ヨリ返濟スヘキ證據トシテ貸主_金ニ地所引當

ノ證文ノミヲ渡シ借主ヨリ其利息トシテ米又ハ金ヲ拂ヒ候テモ亦

書入ト云フ

二十二年法律第十三號ヲ
以テ地券ヲ廢ス以下放之

第四條 地所ヲ質入ニ致シ候節ハ「地券」ヲモ相渡シ可申其年期ノ儀

ハ三ヶ年ヲ限ルヘシ尤三ヶ年以下期限取極候儀ハ勝手タルヘク且
ツ年限取極候廉ハ判然證文面ニ記載致シ置可申事

但書入ノ儀ハ「地券」ヲ相渡スニ及ハス其年限長短共本文ノ限ニ
アラスト雖モ雙方相對ニテ取極候年限ハ本文同様證文面ニ記載
致置可申事

第五條 質入又ハ書入ノ地所期限ニ至リ貸主借主相談ノ上金穀ヲ返

サスシテ地所ヲ引渡候節ハ舊地主ヨリ金主ヘ可引渡旨別紙ニ相認
メ其地ノ戸長加印ノ上金主ヨリ「地券」相添ヘ確認ノ證ヲ可願出事
(十二年第七號布告ヲ以テ改正)

第六條 質入ノ地所ハ金主ニテ其地所耕作可致筈ニ付テハ地租諸役

トモ總テ金主ニテ可相勤事

但其段管轄廳へ届出證書可差出事

第七條 書入ノ地所ハ地主ニテ耕作致シ候儀ニ付地租諸役トモ無論ニ地主ヨリ可相勤事

但管轄廳へ届出ニ不及候事

第八條 管轄違ノ者或ハ同管轄ト雖モ懸隔ノ地所ヲ質ニ取り候節ハ其現地ノ村町へ金主ノ名代人相定置其地租諸役トモ差支無之様可爲相勤事

第九條 質入又ハ書入證文ニハ必ス其村町戸長ノ奥書證印ヲ取ルヘシ其村町戸長ノ役場ニハ奥書割印帳ヲ備ヘ置キ證文ノ奥書割印ヲ願出ル時ハ帳面ト證文トニ番號ヲ朱書シ割印ヲ押シ奥書ヲ爲スヘシ若シ奥書并ニ割印ナキ證文ハ質入又ハ書入ノ證據ニハ不相成ニ付右證文ヲ以テ訴出ルニ於テハ負債主財産分散ノ時債主他ノ債主ニ對シ先キ取りノ特權ヲ失ヒ獨り質入又ハ書入ナキ金穀貸借ノ處分ヲ可受事(七年第六號布告ヲ以テ但書共改正)但戸長不在ノ節ハ其旨ヲ記シ「副戸長」奥書調印スヘシ

十一年第十七號布告都區戸長ノ稱稱減

第十條 一箇所ノ地ヲ二重三重ニ書入候儀ハ不相成候得共若シ第一番ノ金主へ引當ニ入レ置キ候事ヲ第二番ノ金主承知ノ上ニテ地所代價ノ餘分ヲ見込又其地所ヲ引當ニ借添へ致シ候義ハ不苦尤借主身代限ノ處分ニ相成候節ハ右地所糶賣ノ代金ヲ以テ第一番ノ者へ元利ノ金數ヲ引渡シ其餘金ヲ以テ第二番ノ者へ元利ノ金數ヲ引渡シ第三番以下右ニ準シ引渡申スヘク若シ糶賣ノ金高ヲ以テ先ツ第一番ノ金主へ元利ノ金數ヲ引渡シ其餘金第二番ノ金主へ引渡スヘキ元利ノ金數ニ不足スルトキハ其不足ノ分ヲ償フ事并ニ第三番以下ノ金主ニ償フ事ハ平常引當ナキ債主ニ身代限償却ノ例ニ從ヒ外物品糶賣代價ノ内ニテ相當ノ割賦ヲ以テ引渡可申事(七年第五十二號布告ヲ以テ本條改正)但第二番ノ金主へ受取候證文へハ地所代價ノ餘分ヲ見込借添へ候旨ヲ書載セ可申事

第十一條 地所ハ勿論地券ノミタリモ外國人へ賣買質入書入等致

シ金子受取又ハ借受候義一切不相成候事

第十二條 質入年季中天災ニテ地所流亡等其地ノ全形ヲ失フニ至ル時ハ「地券」ハ消滅スル理ニ付貸主ヨリ借主ニ對シ外地所又ハ物品ヲ代リ質ニ差入レサセ證文書替ヲ求ル事ヲ得ヘシ若シ代リ質ニ差入ルヘキ地所物品等コレナキ時ハ訴訟ノ末身代限リノ處分ニ及フヘク又池成野地成等ニ變換シ或ハ欠崩等ノタメニ其地ノ幾分ヲ失フ時ハ變換ノ模様及殘存ノ大小ニ應シ規則ニ基キテ「地券」書換願出ヘキ儀ニ付若シ其變換殘存ノ地ハ貸金穀高ノ償ヲナスニ足ラサルト見込ム場合ニ於テハ貸主ヨリ借主ニ對シ外地所又ハ物品ヲ增質ニ差入レサセ證文書替ヲ求ムルコトヲ得ヘシ若シ增質ニ差入ルキ地所物品等無之時ハコレ亦訴訟ノ末身代限ノ處分ニ及フヘキ事
(七年第五十二號布告ヲ以テ本條改正)
但貸主借主相對示談ハ格別ノ事

第十三條 質入ノ地所年季中天災ニ因リ荒蕪ト相成ハ貸主ヨリ起

返ノ見込ヲ定メ借主^地承諾ノ證書ヲ取り其管轄ヘ可願出尤入費ハ借主ヨリ償フヘキ事

但借主起返ノ入費ヲ出ス可ハサル時ハ證書ヲ以テ其地所ヲ貸主ニ引渡可申尤モ相對示談ノ處置ハ格別ノ事

第十四條 當今質入又ハ書入ニ致シ置年期中ノ分ハ總テ前文規則ニ照準シ當七月限證文相改可申事

第十五條 是迄質入書入ニ致シ置候分ハ前約ノ年季据置不苦尤證文面等前文規則ニ觸レ候廉ハ總テ相改可申事
(六年第百六十七號布告ヲ以テ追加)

第十六條 從前取結ヒタル質入書入ノ約定ニテ明治六年七月三十一日前ニ期限ヲ過去リタル分ニテ債主ニ於テ貸金返濟方ニ付延期ノ勘辨ヲ加フル者ハ來十月三十一日迄ニ其地所所管ノ戸長役場ヘ届出地所質入書入規則第九條ニ準シ奥書割印ヲ受クヘシ若シ右日限内奥書割印ヲ受ケヌシテ後日其證書ヲ以テ訴訟ニ及フ時ハ質入書入ノ證據ニハ相立サルニ付裁判上糶賣分配ノ時ハ先取ノ權利ヲ失

七質入書入ナキ貸借同様ノ虎分ニ及フヘキ事(七年第七十六號布告ヲ以テ追加)
右ノ通相定候事

十九年法律第一號登記法
參看本類ニ載ス

○建物書入質規則并建物賣買讓渡規則明治八年九月 第四百十八號布告
諸建物書入質規則并ニ賣買讓渡規則別紙ノ通相定候條來ル十二月一日ヨリ施行可致此旨布告候事

(別紙)

建物書入質規則

第一條 金穀ノ借主又ハ預リ主ヨリ返濟スヘキ證據トシテ預ケ主ニ對シ引當ト爲ス所ノ建物ノ圖面ト證文トニ戸長ノ公證ヲ受ケタル者ヲ預ケ主ニ渡シ置キタルヲ建物ノ書入質ト云フ

第二條 書入質ト爲ス建物自身所有ノ地所ニ建テ在ルキハ書入質證

文ニ自身持地ノ建物ナルコトヲ記入スヘシ又借地ニ建テ在ルキハ書入質ヲ爲スモノ其地主ニ請ヒ其地主ヲシテ貸地タルコトヲ證スルノ奥書ヲ爲サシムヘシ若シ借地ノ建物ニシテ地主ノ奥書ナキ證文ハ書入質ノ效ナキニ付書入質ナキ借用證文ト看做スヘシ

但官有ノ借地ニ建テ在ル時ハ其所屬官廳ニ請ヒテ其貸地タルコトヲ證スルノ奥書ヲ受クヘシ(十年第六號布告ヲ以テ但書追加)

第三條 金穀ノ預リ主ヨリ建物引當ノ證文ト建物ノ圖面トヲ建物ノ在ル地ヲ管轄スル戸長役場ニ差出シ戸長ノ奥書割印ヲ受クルコトヲ公證ヲ受クルト云フ

第四條 建物書入質ノ證文ニ添フタル圖面中ニ書入質ト爲ス所ノ建物ノ圖ハ朱引朱字ト得シ書入質ノ外ナル建物ノ圖ハ墨引墨字ト爲ス可シ第一號書式及ヒ第二號書式ヲ見合フヘシ

第五條 戸長役場ニ於テハ建物書入質記載帳ヲ備ヘ置キ證文ノ奥書割印ヲ願出ル時ハ其大旨ヲ帳面ニ記入シ而シテ帳面ト證文トニ番

號ヲ朱書シ割印ヲ押シ奥書ヲ爲シ圖面ニモ同シ番號ヲ朱書シ割印
ヲ押スヘシ若シ戸長不在ノ節ハ其旨ヲ記シ「副戸長」奥書割印ス可
シ

第六條 建物ヲ以テ金穀借用又ハ預リノ引當ト爲シタル證文ニテ前
條ノ規則ニ背キ公證ヲ受ケサル者ハ書入質ノ效ナキニ付書入質ナ
キ借用證文ト看做ス可シ

第七條 此規則施行以後建物書入質ノ借用證文又ハ預リ證文ニハ必
ラス返済ノ期限ヲ定ム可シ若シ其期限ヲ定メサル者ハ書入質ノ效
ナキニ付書入質ナキ借用證文ト看做ス可シ(八年第九十九號
布告ヲ以テ改正)

第八條 此規則施行以前ニ契約シタル建物質入又ハ引當ノ借用金穀
又ハ預リ金穀ニテ返済期限ノ定メナキ證文ヲ所持スル者ハ明治九
年二月廿八日迄ニ金穀預主又ハ其相續人ニ掛合此規則ニ從ヒタル
書入質ノ證文ニ改ム可シ若シ預主又ハ其相續人證文ヲ改メサル者
ハ明治九年四月三十日迄ニ建物ノ在ル地ヲ管轄スル裁判所ニ訴フ

可シ

但シ明治九年四月三十日ヲ以テ訴人發途ノ期ト定メ其訴人ノ住
所又ハ寄留ノ地所ト裁判所トノ距離每八里ニ一日ノ猶豫ヲ與フ

第九條 此規則施行以前ニ契約シタル建物質入又ハ引當ノ金穀借用
證文又ハ預リ證文ヲ所有スル者ハ返済満期ニ至ルト至ラサルトニ
論ナク明治九年二月廿八日迄ニ金穀預主又ハ其相續人ニ掛合此
規則ニ從ヒタル書入質ノ證文ニ改ムヘシ若シ預主又ハ其相續人
證文ヲ改メサル者ハ明治九年四月三十日迄ニ建物ノ在ル地ヲ管轄
スル裁判所ニ訴フヘシ

但書前同斷

第十條 建物ノ在ル地ヲ管轄スル裁判所ニ於テハ原告人ノ訴狀ヲ受
取タルキヨリ三日内ニ裁判所ヨリ被告人ノ建物ノ在ル地ノ戸長ニ
對シタル報知狀ヲ原告人ニ下付シ速ニ戸長ニ送達セシムヘシ右ノ
報知狀ニハ何府管下住居寄留何某ノ訴訟ニ因リ「何大區何小區」何番地

ノ建物ヲ書入質ト爲ス證文ニ公證スルヲ差留ムル旨ヲ記載スヘシ而シテ其訴訟落着ニ至リシ時ハ公證ノ差留ヲ解クヲ速ニ戸長ニ報知スヘシ

第十一條 第八條及ヒ第九條ノ規則ニ背キ明治九年五月一日以後ニ至リ此規則施行以前ニ契約シタル建物質入又ハ引當ノ金穀借用證預リ證文ヲ所有スル者ハ書入質ノ效ナキニ付書入質ナキ借用證預リ證文ト看做スヘシ

第十二條 一棟ノ建物ヲ二重三重ニ書入質ト爲スヲ嚴禁ナレモ若シ第一番ノ金主ヘ書入質ト爲シタルヲ第二番ノ金主承諾ナレハ建物代價ノ餘分ヲ見込ミ又其建物ヲ書入質ニ借添ト爲スヲ得ヘシ尤借主身代限ノ處分ニ至ルモ右建物糶賣ノ代金ヲ以テ第一番ノ者ヘ元利ノ金數ヲ引渡シ其餘金ヲ以テ第二番ノ者ヘ元利ノ金數ヲ引渡シ第三番以下右ニ準シ引渡スヘク若シ糶賣ノ金高ヲ以テ先ツ第一番ノ金主ヘ元利ノ金數ヲ引渡シ其餘金第二番ノ金主ヘ引渡

スヘキ元利ノ金數ニ不足スルモハ其不足ノ分ヲ償フハ平常書入質ナキ貸主ニ身代限ノ償却ノ例ニ從ヒ外物品糶賣代價ノ内ニテ相當ノ割賦ヲ以テ引渡スヘシ

但第二番ノ金主ニ渡シ置ク書入質ノ證文ニハ建物代價ノ餘分ヲ見込ミ借添タル旨ヲ書載スヘシ

第十三條 書入質ト爲シタル建物燒失流亡等ニ至リシ時ハ建物ノ所持主又ハ代理人ヨリ遅クトモ七日内ニ其趣ヲ書面ニ記シ戸長役場ニ届出ツヘシ戸長役場ニ於テハ建物書入質記載帳ノ朱書番號ニ引合セ朱筆ヲ以テ點合ヲ爲シ其傍ニ燒失流亡等ノ趣ヲ略記シ年月日ヲ記シ戸長ノ實印ヲ押スヘシ第三號書式ヲ見合スヘシ

第十四條 書入質ノ建物燒失流亡等ニ至リシモハ貸主ヨリ借主ニ對シ代リ質ヲ受取ルヲ求メテ爲スヲ得ヘシ若シ借主代リ質ヲ出スコトヲ肯ハス又ハ出シ能ハサルトキハ借用金穀返濟期限未滿内ト雖モ貸主ヨリ借主ニ對シ元利返濟ヲ求ルノ訴ヲ爲スコトヲ得ヘ

建物賣買讓渡規則

第一條 自身所有ノ地ニ建テ在ル建物ヲ賣渡シ又ハ讓渡シテ爲サント欲スル者ハ讓渡證文ト圖面トニ戸長ノ與書割印ヲ受ク可シ又借地ニ建テ在ル建物ノ讓渡證文ニハ其地主ニ請ヒ其地主ヨリ貸地タルコトヲ證スルノ與書ヲ受ケタル上ニテ戸長ノ與書割印ヲ受ク可シ

但官有ノ借地ニ建テ在ル時ハ其所屬官廳ニ請ヒテ其貸地タルコトヲ證スルノ與書ヲ受クヘシ(十年第三十八號布告ヲ以テ但書追加)

第二條 建物ノ買受又ハ讓受ヲ爲サント欲スル者ハ自身又ハ其代人建物ノ在ル地ノ戸長役場ニ至リ建物書入質記載帳ヲ見合シタル上其讓渡ノ證文ヲ受取り然シテ後ニ戸長役場ニ至リ戸長又ハ「副戸長」ノ面前ニテ「何大區何小區何番地ノ何番ノ建物ヲ何某ヨリ買受タル旨ヲ書入質記載帳ニ記入シ年月日并ニ苗字名ヲ記シ實印ヲ押

スヘシ 第四號書式ヲ(十年第六十號布告ヲ以テ結見合スヘシ) 文若シ以下六十字ヲ削ル

第三條 戸長役場ニ於テ建物買受證文ノ與書割印ヲ願出ル時ハ是亦建物書入質記載帳ニ記入スルコト及ヒ證文ニ與書シ圖面ニ割印スルコト建物書入質規則第五條ニ準シ公證ヲ與ルノ手續キヲ爲スヘシ

第四條 書入質ト成リタル建物ヲ買受タル者ハ其建物ノ書入質トナリタル金數ノ償却ヲ引受クヘシ但シ買受人ニ於テ其建物所有ノ權ヲ拋棄スル時ハ書入質ノ金數ノ償却ヲ引受クルニ及ハス

第五條 第四條ノ場合ニ於テ戸主ノ後ヲ受ケタル相續人ハ前戸主ヨリ讓受ケタル建物所有ノ權ヲ拋棄スト雖モ書入質ノ金數ノ償却ヲ引受ク可シ

(書式略之)

○諸建物書入質證書ニ造作ノ有無ヲ記ス十年三月內務省甲第六號布達
明治八年九月第百四十八號ヲ以テ諸建物書入質規則布告相成候ニ

付テハ自今其證書面ニ造作造作トハ庇、天井、敷居、鴨居、ノ有無記載可致此旨布達候事

○動産不動産書入金穀貸借規則明治六年八月第三百六號布告

動産不動産書入金穀貸借規則左ノ通相定候條此旨布告候事

動産不動産書入金穀貸借規則

- 一 動産不動産ヲ書入ニ爲シ金穀貸借致シ右期限中書入ノ動産不動産流亡又ハ燒失ヲ爲スト雖モ負債ハ身代限濟方可申付候事
- 一 動産不動産ヲ書入ニ爲シ金穀貸借シ濟方ノ期ニ望ミ右書入ノ動産不動産ノ相場高下アリテ糶賣ノ價負債ノ高ヨリ餘分アル時ハ其餘分ハ借主ヘ與フヘシ若シ其價負債ヨリ不足ナレハ身代限濟方可申付事
- 一 壬申第三百號布告以前家祿ヲ書入ニ爲シ金穀貸借致シタル分ハ

六年第十八號布告地所書入賃入規則參看本類ニ載ス
八年第四百十八號布告地所書入賃入規則參看本類ニ載ス

家祿ヲ除キ外品物ヲ以テ身代限濟方可申付事

○社寺學校病院等へ寄付物處分明治九年四月第五十四號布告

社寺學校病院等へ寄附候土地建物其他物品等別段之契約無之分ハ寄附主ニ於テ其所有ヲ離シタルモノトシ一般ノ讓渡ヲ以テ處分候條此旨布告候事

○外國人へ家屋地所等貸與方明治七年八月第八十五號布告

外國人へ家屋地所等貸渡ノ節約束上輕忽疎漏ヨリ竟ニ内外人民ノ間不都合ヲ生シ候テハ自然交際ニモ差響候條自今學校其他ノタメ備入

レ居留地外へ住居スヘキ外國人及公使館附屬書記官等へ貸家貸地ノ節ハ先ツ約定草案相添其管轄廳へ伺出許可ノ上結約可致此旨布告候事

但建物取毀賣拂ノ分ハ幾日以内取拂ノ約定取結可賣渡尤賣渡ノ上ハ其旨管轄廳へ可届出事

○證書類公私共年月日ヲ記載ス明治六年六月二十二號布告

來ル七月十日以後ノ證書類及ヒ公私ノ文書ニハ總テ年號月日ヲ記載可致若シ疎漏ニシテ年月日ノ内何レニテモ略記シタル時ハ裁判上證據ニ不相立候事

○年月日略記ノ諸證書類受理裁判方明治六年二月第一號布告
明治六年第二百十二號ヲ以テ年月日ノ内何レニテモ略記シタル

諸證書類及公私文書等ハ裁判上證據ニ不相立旨布告相成候ハ其證書全ク證據ニ不相立儀ニハ之レナク唯タ其年月日ノ早晚ヲ定ムヘキ證據ニ相立タル儀ニ候條右等ノ證書ヲ以テ年月日ノ早晚ニ拘ハラス其記入ノ事件ニ付訴訟ニ及フキハ取揚ケ裁判ニ及フヘク候條此旨布達候事

○預金穀證書ノ裁判區別明治七年三月二十七號布告

預金穀ハ其證書中ニ封印ノ儘預リ置候歟或ハ預リ中融通使用ヲ爲サルノ明文ナキ分ハ出訴候トモ本年五月一日ヨリ以後ハ貸金同様ニ裁判可致候條此旨布告候事

○連借證書ノ分擔及償却方明治八年四月第六十三號布告

證書類公私共年月日ヲ記載ス 預金穀證書ノ裁判區別 連借證書ノ分擔及償却方

金銀其他借用證書中借主數名連印ニテ各自分借ノ員數ヲ記載セサル分ハ右連印中失踪又ハ死亡シテ相續人ナキ者等有之トモ其借用シタル金銀其他ノ總額ヲ其連印中現在ノ者へ償却可申付候條此旨布告候事

但右證書中分借ノ員數無之トモ別ニ分借ノ明證アルハ此限ニアラス

○金穀借用證書貸主ヨリ他人へ讓渡手續明治九年七月第十九號布告

金穀等借用證書ヲ其貸主ヨリ他人ニ讓渡ス時ハ其借主ニ證書ヲ書換ヘシムヘシ若シ之ヲ書換ヘシメサルニ於テハ貸主ノ讓渡證書有之モ仍ホ讓渡ノ効ナキモノトス此旨布告候事
但相續人へ讓渡候ハ此限ニアラス

○賣買約定書趣意ヲ明確ニ書セシム明治八年五月第八十七號布告

諸品賣買取引心得方定書去ル明治四年九月布告ニ及ヒ置候處自今相廢シ候尤向後賣買ノ約定ハ勿論其他諸取引ノ約定ヲ爲ス證書ニハ成ルヘキ丈ケ其約定ノ趣意ヲ明確ニ書載セ疎漏曖昧ノ事之レナキ様注意可致此旨布告候事

○諸證書ノ姓名ハ必ス自書實印ヲ用ユ明治十年七月第五十號布告

諸證書ノ姓名ハ必ス本人自ラ書シテ實印ヲ押スヘシ若シ自書スルヲ能ハサル者ハ他人ヲシテ代書セシムルヲ得ルト雖モ必ス其實印ヲ押

金銀借用證書貸主ヨリ他人へ讓渡手續 賣買約定書趣意ヲ明確ニ書セシム 諸證書ノ姓名ハ必ス自書實印ヲ用ユ

スヘシ其代書セシ者ハ本人姓名ノ傍ニ其代書セシ事由ト己レノ姓名
 トナ記シテ實印ヲ押スヘシ
 但シ本文諸證書トハ契約ノ證書金穀地所建物貸借賣買讓與并預
 リ證書等凡テ民事上相互ノ契約ニ係ルモノヲ云フニ限ルモノト
 ス右(十年第六十四號布告ヲ以テ但書追加)
 右布告候事

○金穀貸借請人證人辨償規則明治八年六月
第百二號布告

沿革略記 明治六年六月第百九十五號布告ヲ以テ金穀借主身代
 限請人證人ノ區別ヲ制定ス○八年六月第百二號布告
 ヲ以テ金穀貸借請人證人辨償規則ニ改正ス是レ現行法ナリ
 明治六年六月第百九十五號布告金穀貸借請人證人辨償規則本年十月一
 日ヨリ左ノ通改正候條同日以後借用證書へ加印候者ハ改正ノ通可相

心得此旨布告候事(八年第百二十一號布告ヲ以テ施行ノ二字ヲ
削リ候條ノ下ニ同日以下二十二字ヲ加フ)

金穀貸借請人證人辨償規則

- 第一條 金銀借用返濟相滞リ本人身代限濟方申付候上不足相立候節
 ハ其不足ノ分請人證人へ濟方申渡シ猶不相濟ニ於テハ其請人證人ヲモ身代
 限申付其上不足相立候ハ、借主並ニ請人證人ハ勿論其相續人ニ至ル迄
 身代持直シ次第皆濟可致事
- 第二條 借主逃亡又ハ死去跡相續人無之時ハ其請人證人へ濟方申渡シ候
 上不相濟ニ於テハ身代限申付猶不足相立候ハ、請人證人ハ勿論其相續
 人ニ至ルマテ身代持直シ次第皆濟可致事
- 第三條 身代限申付候上不足相立身代持直シ次第皆濟可致旨左ノ雜
 形之通裁判所ニ於テ其原證文ノ裏へ記シ押印ノ上貸主へ可相渡置
 事

(裏書雜形略ス)

○社寺ノ負債氏子檀家ノ連署ヲ要ス明治十年五月 第四十三號布告
 神社并寺院ニ於テ其社寺ノ爲メ金穀ヲ買入ル、トキ若クハ金穀ヲ借入ル、爲メ社寺附地所除稅地ヲ建物什器實物古文書類等ヲ抵當ト爲ストキハ必ス氏子檀家ト協議シ總代二名以上ノ連署ヲ要スヘシ若シ此連署ナキトキハ總テ該社寺神官僧侶ノ私債ト看做シ縱令右ノ抵當アルモ其効ナキ者ト爲スヘシ此旨布告候事

○華族世襲財產法明治十九年四月 勅令第三十四號
 朕華族世襲財產法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 華族世襲財產法

- 第一條 華族戸主滿二十年以上ノ者ハ此法ニ依リ世襲財產ヲ創設スルコトヲ得但滿二十年以下ノ者ト雖モ前代戸主ノ遺言アルトキハ世襲財產ヲ創設スルコトヲ得
- 第二條 世襲財產ハ總テ家督相續者ナシテ之ヲ相續セシムルモノトス
- 第三條 世襲財產ハ左ニ掲クル所ノ二類ニ限ル但第十五國立銀行株券ハ第二類ニ準シ世襲財產ト爲スコトヲ得
- 第一類 田畑山林宅地鹽田牧場池沼等
- 第二類 政府發行ノ公債證書又ハ政府ノ保證若クハ特別ノ監督ニ屬スル銀行若クハ會社ノ株券
- 第四條 世襲財產ハ前條二類中ノ一種又ハ數種ニシテ其總額毎年金五百圓ニ下ラサル純收益ヲ生スル財產タルヘシ但其財產中收益ナキ地所ヲ加フルモ妨ケナシ
- 第五條 世襲財產ノ所有者ハ特ニ世襲スヘキ建物庭園圖書寶器等ヲ

以テ世襲財産附屬物ト爲スコトヲ得

第六條 負債償却ノ義務アル財産ハ世襲財産及ヒ附屬物ト爲スコトヲ得ズ

第七條 世襲財産ノ所有者ハ宮内大臣ノ認可ヲ得テ其財産ヲ増加スルコトヲ得

第八條 世襲財産ノ所有者ハ宮内大臣ノ認可ヲ得テ第二類ノ財産ヲ更換シテ第一類ノ財産ト爲スコトヲ得但第一類ヲ第二類ト爲スコトヲ得ズ

第九條 第一類ノ財産若シ災害又ハ其他ノ事故ニ依リ第四條ノ制限額ヨリ減シタルトキハ五箇年以内ニ其缺額ヲ補充スヘシ

第十條 第二類ノ財産其元金ノ仕拂ヲ受ケタルトキハ一箇年以内ニ第一類又ハ第二類ノ財産ヲ以テ其缺額ヲ補充スヘシ

第十一條 世襲財産ノ所有者ハ其財産ノ純收益ヲ抵當トシテ負債ヲ爲スコトヲ得但毎年其純收益ノ三分一以上ノ償却ヲ爲スヘキ義務

ヲ負擔スルコトヲ得ス

第十二條 世襲財産ノ純收益ハ如何ナル場合ト雖モ債主ヨリ毎年其三分一以上ヲ差押フルコトヲ得ス

第十三條 世襲財産及ヒ附屬物ハ之ヲ賣却讓與シ又ハ質入書入ト爲スコトヲ得ス

第十四條 世襲財産及ヒ附屬物ハ負債ノ抵償トシテ差押フルコトヲ得ス

第十五條 世襲財産ハ左ノ場合ニ於テハ其効力ヲ失フモノトス

一 戸主死亡ノ後家督相續スヘキ男子ナキトキ

一 爵ヲ奪ハレ又ハ族ヲ除カレ家督相續者ナキトキ

一 第九條第十條ニ掲ケタル缺額ヲ其期限内ニ補充セサルトキ

第十六條 世襲財産及ヒ附屬物ハ其所有者ニ於テ之ヲ廢止スルコトヲ得ス

第十七條 世襲財産ハ宮内大臣之ヲ管理シ「華族局」ヲシテ其事務ヲ

二十一年宮内省達第十四號ヲ以テ華族局ヲ爵位局ト改稱ス以下依之

取扱ハシム

第十八條 「華族局」ハ世襲財産臺帳ヲ備ヘ置キ世襲財産及ヒ之ニ關スル事項ヲ記入スヘシ

第十九條 世襲財産ヲ創設増加更換又ハ補充セントスル者ハ其願書ニ財産目錄ヲ添ヘ宮内大臣ニ差出シ其認可ヲ受クヘシ世襲財産附屬物ヲ設ケントスル者亦同シ

第二十條 宮内大臣ハ前條ノ願書目錄ヲ審査シ第一類ノ財産及ヒ第一類ノ公債證書ハ所轄ノ地方廳ニ命シ株券ハ銀行若クハ會社ニ命シ世襲財産ト爲スヘキ旨ヲ官報及ヒ其地方一定ノ新聞紙ニ掲ケ一週日間之ヲ公告セシムヘシ

世襲財産附屬物ハ華族局ニ於テ之ヲ公告スヘシ

第二十一條 前條公告ヲ了リタル後二十日ヲ經テ該財産ニ關シ故障ヲ申出ル者ナキトキハ宮内大臣ハ世襲財産臺帳ニ記入セシメ認可證ヲ下付シ第一類ノ財産ハ所轄ノ地方廳ニ命シ地券臺帳ニ記入セ

シメ地方廳ハ戶長ニ命シ公證簿ニ記入セシムヘシ第二類ノ公債證書ハ所轄ノ地方廳ニ株券ハ銀行若クハ會社ニ命シ帳簿ニ記入セシムヘシ

「華族局」ニ於テハ該地券又ハ公債證書若クハ株券ノ券面ニ世襲財産ト爲リタル旨ヲ記入スヘシ

第二十二條 世襲財産其効力ヲ失ヒタルトキハ宮内大臣ヨリ地方廳又ハ銀行若クハ會社ニ命シ之ヲ公告セシムヘシ

世襲財産附屬物ハ「華族局」ニ於テ之ヲ公告スヘシ

第二十三條 第二十條及ヒ第二十二條ニ關スル公告費用ハ其財産所有者ヨリ之ヲ「華族局」ニ納ムヘシ

第二十四條 世襲財産ニ關スル事件ヲ協議スルカ爲メ戶主及ヒ滿二十年以上ノ相續者若クハ後見人ト親屬三名以上トヲ以テ親屬會議ヲ組織シ豫メ宮内大臣ニ届出ヘシ但親屬ナキトキハ宮内大臣ノ認可ヲ得一族又ハ他ノ華族ヲ以テ親屬會議員ニ充ルコトヲ得

第二十五條 世襲財產ニ關スル願書届書ハ親屬會議各員ノ連署ヲ要ス

第二十六條 此法施行ノ手續ハ宮内大臣之ヲ定ム

第二十七條 此法ハ明治十九年八月一日ヨリ之ヲ施行ス

○華族世襲財產法施行手續十九年五月
勅令第三十四號第二十六條ニ據リ華族世襲財產法施行手續左ノ通り定ム

華族世襲財產法施行手續

第一條 世襲財產ニ關スル願書及ヒ届書ハ宮内大臣ニ宛テ華族局

ニ差出スヘシ

第二條 世襲財產ノ創設ヲ願出ルトキハ地券、公債證書又ハ株券

ハ華族局ニ差出シテ點檢ヲ受ケヘシ其附屬物ハ華族局ノ指揮

ニ依リ之ヲ差出シテ點檢ヲ受ケ又ハ華族局員ノ臨檢ヲ受ケヘ

シ

世襲財產ノ増加、更換又ハ補充ヲ願出ルトキ亦同シ

第三條 前條差出シタル物件ハ華族局ニ留置キ其願ヲ許否スル

ノ日ニ至リ下戻スヘシ但時宜ニ依リ點檢ノ上直ニ下戻スコト

アルヘシ

二十二年法律第十三號ヲ以テ地券ヲ廢ス以下條之

第四條 前代戸主ノ遺言ニ據リ世襲財產ノ創設ヲ願出ルトキハ

其後見人連署ノ上創設ノ手續ヲ爲スヘシ

第五條 法第五條ニ據リ世襲財產附屬物ト爲スヲ得ヘキモノハ

左ノ各項ニ相當スルモノトス

一 稀世ノモノ

一 其家ニ由緒アルモノ

一 觀古ノ參考トナルヘキ貴重ノモノ

第六條 法第二十一條ニ掲クル日限ヲ經過シタルトキハ地方廳

又ハ銀行若クハ會社ハ直ニ該財產ニ關スル故障中立ノ有無ヲ

宮内大臣ニ上申スヘシ

第七條 宮内大臣ハ地方廳又ハ銀行若クハ會社ノ上申ニ據リ不

都合ナシト認ムルトキハ法第二十一條ノ手續ヲ爲シ尙ホ華族

局ヲシテ其旨ヲ官報ニ掲ケ公告セシムヘシ

第八條 華族局ハ世襲財產トナリタル地券、公債證書又ハ株券ノ

各券面ニ爲華族世襲財產ノ印章ヲ押捺シ番號及ヒ年月日ヲ記

入スヘシ

第九條 世襲財產ヲ創設セントスルモノハ豫メ相當ノ親屬會議

員ヲ選定シテ届出ヘシ若シ親屬ナキトキハ一族又ハ華族中ヨ

リ選定シテ願出ヘシ其補缺又ハ改選ヲ要スルトキ亦同シ

第十條 家督相續者世襲財產ヲ相續シタルトキハ地方廳又ハ銀

行若クハ會社ニ於テ地券、公債證書又ハ株券ノ書換若クハ裏書

ヲ受ケ速ニ其旨ヲ届出ヘシ

第十一條 第一類ノ地目ヲ變換セントシ又ハ免租地ヲ有租地ト爲サントシ或ハ有租地ヲ免租地ト爲サントシ若クハ開墾セシトスルモノハ先ツ宮内大臣ノ認可ヲ經テ一般ノ手續ニ遵フヘシ

第十二條 第一類ノ財產災害又ハ其他ノ事故ニ因リ其收入ヲ減シタルトキハ事由ヲ具シテ届出ヘシ其第二類ノ財產ニ於ケル亦同シ

第十三條 第一類ノ財產公用ニ因リ買上ラレ又ハ第二類ノ財產元金ノ支拂ヲ受ケタルトキハ直ニ其金額ヲ驛遞局貯金預所、本銀行又ハ第十五國立銀行ヘ預ケ入レ其預金證書ヲ「華族局」ヲ經テ内藏寮ヘ預ケ置キ其補充財產購求ノ時ニ至リ下渡ヲ願出ヘシ

第十四條 世襲財產ニ關シ必要ト認ムルコトアルトキハ「華族局」員ヲ派遣シテ臨檢セシムヘシ但時宜ニ依リ地方廳ニ命ジ該廳官吏ヲシテ臨檢セシムルコトアルヘシ

第十五條 「地券」公債證書又ハ株券毀損亡失等ノ故ヲ以テ再渡又ハ書換ヲ受ケタルトキハ之ヲ「華族局」ニ差出シテ第八條ニ掲クル券面ノ記入ヲ受クヘシ

第十六條 世襲財產附屬物ヲ毀損亡失シ又ハ亡失シタルモノヲ發見シタルトキハ其事由ヲ届出ヘシ

第十七條 世襲財產其効力ヲ失ヒタルトキハ法第二十二條ノ公告ヲ爲サシムルト同時ニ其旨ヲ所有者及ヒ親屬會議員ニ達ス

第十八條 前條ノ達ヲ受ケタルモノハ直ニ地券、公債證書又ハ株券ヲ「華族局」ニ差出シ其券面記入ノ取消ヲ受クヘシ

第十九條 法第二十二條第二十二條ニ據リ公告ヲ爲シタルトキ地方廳又ハ銀行若クハ會社ハ其費用計算書ヲ以テ「華族局」ニ請求スヘシ「華族局」ハ計算書ヲ取纏メ其納金方ヲ所有者又ハ親屬會議員等ニ達スヘシ

第二十條 前條納金方ノ達ヲ受取リタルモノハ三日以内ニ納金證書ニ現金又ハ爲換手形ヲ添ヘ「華族局」ニ上納スヘシ「華族局」ハ直ニ之ヲ地方廳又ハ銀行若クハ會社ニ送付スヘシ

第二十一條 遠隔ノ地方ニ在ル地方廳又ハ銀行若クハ會社ニ於テ公告ヲ爲シ所有者其地方ニ在ルトキハ地方廳又ハ銀行若クハ會社ハ其費用計算書ヲ以テ直ニ所有者ニ請求スルコトヲ得此場合ニ於テハ所有者ハ三日以内ニ之ヲ納付シ其受取書納金證書ニ添ヘ速ニ「華族局」ニ届出ヘシ

第二十二條 世襲財產ニ關スル諸願届ハ左ノ書式ニ準據スヘシ
(書式略ス)

○預金規則明治十八年五月
第十三號布告
預金規則左ノ通制定ス

預金規則

- 第一條 大藏省中ニ預金局ヲ置キ左ノ貯金積立金ヲ預リ之ヲ保管利殖セシム
- 第一 「驛遞局貯金」
- 第二 各官廳ノ成規ニ從ヒタル積立金
- 第三 社寺教會會社其他人民ノ共有ニ係ル積立金ニシテ其請願ニ據ルモノ
- 第二條 預リ金取扱手續ハ「大藏卿」之ヲ定ム
- 第三條 預リ金ノ利子割合ハ「大藏卿」之ヲ定ム
- 第四條 預リ金ニ關スル損益ハ國庫ノ負擔トス
- 第五條 預リ金ノ證書ハ賣買讓與又ハ書入質入スルヲ得ス

- 第六條 預リ金ノ運用ハ日本銀行ヲシテ取扱ハシムルモノトス
- 第七條 「大藏卿」ハ便宜ノ地ヲ撰ミ預金局出張所ヲ設置シ又ハ國庫金取扱所ヲシテ預リ金受渡ヲ取扱ハシムルコトアルヘシ
- 第八條 預リ金ノ受渡ニ屬スル證書ハ證券印稅ヲ納ムルニ及ハス

○預金取扱手續明治十八年六月
本年五月第十三號布告預金規則第一條第三項社寺教會々社及人民
共有ニ係ル預金取扱手續左ノ通相定ム
但施行日限及利子割合ハ追テ新聞紙ヲ以テ廣告ス

- 第一條 預リ金受渡ハ東京ハ預金局各地方ハ國庫金取扱所(國庫金取扱所ニ於テ取扱フモノトス)
- 但東京府下郡部ニ設置ノ國庫金出納支所ニ於テモ各地方預金ノ受渡ヲ取扱フモノトス(二十年大藏省告示第八號ヲ以テ但世追加)
- 第二條 預リ金ヲ分チテ通常定期ノ二種トス
- 第三條 通常預リ金ハ金額ヲ限ラス拂戻期限ヲ定メサルモノトシ定期預リ金ハ金額百圓以上期限ヲ滿六ヶ月ヨリ十八ヶ月迄トス
- 但金貨ニ限リ金額拾圓以上ヲ定期預リ金トシ同種類ヲ以テ

拂戻シテ得ルモノトス(二十年大藏省告示第百六)
 第四條 通常預ケ金ヲ始メテ預ケ入ルルハ申込書(書式一)及印鑑二枚ヲ其預リ所東京ハ預金局各地方ハ國庫ニ差出スヘシ
 第五條 預ケ主ハ預リ所ニ於テ預金通帳ヲ受取リ預ケ金ヲナク毎ニ之ヲ其預リ所ニ差出シ金員及年月日ノ記入預リ所ノ印主務者ノ調印ヲ受クヘシ
 第六條 預金局ヘ直ニ預ケ入タル通常預ケ金ノ拂戻ヲナスルハ請求書(書式二)ニ通帳ヲ添ヘ預金局ヘ差出シ其金員ヲ受取ルヘシ
 第七條 各地國庫金取扱所ヘ預ケ入タル預ケ金ノ拂戻ヲナスルハ請求書(書式二)ヲ其取扱書ヲ經テ預金局ヘ差出スヘシ
 第八條 預金局ニ於テ前條拂戻請求書ヲ受ケタルトキハ拂戻證書(書式三)ヲ請求人ヘ送達スヘシ請求人ハ該證書ノ請取欄内ニ記名調印ヲナシ取扱所ヨリ其金員ヲ受取ルヘシ
 第九條 拂戻金ハ其拂戻證書ノ日附ヨリ左ノ期限内ニ受取ルヘシ若シ期日ヲ失スルハ取扱所ヲ經テ更ニ預金局ヘ其證書ノ書替ヲ請求スヘシ但郵便遞送中ニ生シタル事故ニ因ルモノハ此限ニアラス
 東京ヨリ 百里未滿 二十日
 二百里未滿 三十日
 二百里以外 四十日
 第十條 通常預ケ金ノ全額ヲ拂戻スルハ通帳ヲ返付セス又其幾分ヲ拂戻スルハ預リ所ニ於テ其通帳ニ拂戻金員及年月日ヲ記

載シ預リ所ノ印主務者ノ調印ヲナシ之ヲ返付スヘシ
 第十一條 通常預ケ金ハ預ケ入レタル月及拂戻ス月ハ其金額ニ利子ヲ付セス但預リ所ヘ預ケ入タル月ヲ以テ預ケ月トシ預金局ヨリ拂戻證書ヲ發シタル月東京ハ金庫局仕拂切ヲ以テ拂戻シ月トス(十九年大藏省告示第七號ヲ交付シタル月)
 第十二條 通常預ケ金ヨリ生スル利子ハ毎年六月十二月ノ兩期ニ分チ之ヲ其元金ニ組入ルヘシ
 第十三條 預ケ主ハ毎年三月九月ニ於テ通帳ヲ其預リ所ニ差出シ前條利子ノ記入ヲ受クヘシ
 第十四條 元金ニ加ヘサル通常預ケ金ノ利子ハ預ケ金ノ全額ヲ拂戻スルニアラサレハ之ヲ受取ルヲ得ス
 第十五條 一ノ預リ所ヨリ請取タル通帳ヲ以テ他ノ預リ所ニ於テ預ケ入拂戻ヲナスコトヲ得ス
 第十六條 預金通帳ハ預ケ金受授ノ證トス
 第十七條 定期預ケ金ヲナスルハ申込書(書式四)及印鑑二枚ヲ預リ所ニ差出シ其金員ヲ預ケ入レ定期預リ金證書ヲ受取ルヘシ
 第十八條 定期預ケ金ヲ受取ルルキハ其預リ金證書ノ受取欄内ニ元利金額受取ノ記入ヲナシ記名調印ノ上之ト引替ニ其金員ヲ受取ルヘシ
 第十九條 定期預ケ金ヲ引續キ預ケ入ルルキハ更ニ期限等ヲ認メタル申込書ヲ左ノ日割ニ據リ其預リ所ニ差出シ置キ滿期ニ至リ新舊證書ノ引替ヲナスヘシ

東京ヨリ 百里未満ハ滿期ヨリ三十日前
二百里以外ハ滿期ヨリ四十日前

第二十條 定期預ケ金ノ利子ハ預リ所ニ預リタル翌日ヨリ滿期當日迄日歩割ヲ以テ計算スルモノトス

第二十一條 金銀貨ヲ預ケ入同種類ヲ以テ拂戻ヲ要スル分ト雖モ利子ハ有合ノ通貨ヲ以テ支拂モノトス(二十年大省告示第百六十一號ヲ以テ改正)

第二十二條 定期預ケ金ハ其期限内之ヲ引出スヲ得ス

第二十三條 預ケ金ヲ預ケ金局ニ預ケ入ルキハ金庫局へ現金ヲ納付シ全局ノ領收證書ヲ以テ預ケ入ルモノトシ又其拂戻ヲナスキハ預ケ金局ヨリ金庫局仕拂切符ヲ以テ拂渡スモノトス(九年大藏省第七號告示ヲ以テ改メ)

第二十四條 各地國庫金取扱所ニ於テ取扱ヒタル預ケ金ハ其報告ニ依リ預ケ金局ノ帳簿ニ登記シ全局ヨリ帳記濟ノ通知書ヲ其預ケ主ヘ送付スヘシ

第二十五條 國庫金取扱所へ預ケ金ヲナシタル後左ノ期日迄ニ前條ノ通知書到達セサルキハ預ケ主ハ其日限ノ翌日ヨリ一週間以内又到達セシモ金員年月日ニ相違アルキハ到達ノ翌日ヨリ一週間以内ニ其旨ヲ認タル通知書ヲ預ケ金局へ發送スヘシ

東京ヨリ 百里未満 二十日
二百里未満 三十日
二百里以外 五十日

第二十六條 預ケ金拾錢未滿ノ端金ニハ利子ヲ付セス

第二十七條 預ケ入申込書及拂戻請求書其他調印ヲ要スル書類ニハ社寺教會々社ニアリテハ其名稱ヲ記シ且押印ヲナシ其擔當者一名記名調印シ又二人以上ノ共同ニ係ルモノハ其總代人一名記名調印シ且共同者中ノ一名記名加印スヘシ

第二十八條 社寺教會々社ノ預ケ金ハ社寺教會々社ヲ以テ一個ノ預ケ主ト看做シ又共同ニ係ル預ケ金ハ其總代人ヲ以テ一個ノ預ケ主ト看做スヘシ

第二十九條 社寺教會々社并其擔當者及共有預ケ金ノ總代人并加印者氏名變換又ハ轉住セシキハ其屆書ヲ預リ所ニ差出スヘシ

第三十條 預ケ金擔當者總代人若クハ加印者變更アルキハ後任者ノ印鑑二枚ヲ添へ連署ノ屆書ヲ預リ所へ差出スヘシ但前任者連署シ能ハサルキハ證人ヲ立ツヘシ

第三十一條 預金通帳定期預リ金證書又ハ拂戻證書ヲ失亡セシキ或ハ汚染毀傷シテ文字印章判明ナラサルキハ其事由ヲ詳記セシ屆書ヲ預リ所ニ差出シ再渡ヲ請求ヲナスヘシ但通帳又ハ證書失亡ノ場合ニ於テ再渡ヲ受ケシ後ハ舊通帳又ハ證書ハ無效トシ爾後發見セシキハ之ヲ預リ所へ納付スヘシ

第三十二條 預金通帳又ハ定期預リ金證書ハ大藏省官員ヨリ檢査照合等ヲ要スルヲアルヘシ但該官員臨檢ヲナスキハ其證據書ヲ携帶スルモノトス

(書式略之)

○第十六類 教育

○學校令

沿革略記 明治三年二月大學ニ於テ大中小學ノ規則ヲ定ム○四年十一月布告ヲ以テ府縣學校ハ自今總テ文部省ニ管轄セシム○同年十二月文部省布達ヲ以テ東京府下ニ共立小學校洋學校女學校ヲ開キ規則ヲ定メ士民學資ヲ納レ就學スルコトヲ許ス○五年八月第二十四號布告ヲ以テ自今華士族農工商及婦女子ヲシテ必ス就學セシムルモノトシ尋テ文部省布達ヲ以テ學制ヲ定メ全國ヲ區分シテ大中小學區トス○十二年九月第四十號布告ヲ以テ前ノ學制ヲ廢シ更ニ教育令ヲ制定ス○十三年十二月第五十九號布告ヲ以テ前令ヲ改正ス○十八年八月第二十三號布告ヲ以テ復タ前令ヲ改正ス○十九年三月勅令第三號ヲ以テ帝國大學令ヲ定メ同年四月勅令第十三號ヲ以テ師範學校令第十四號ヲ以テ小學校令第十五號ヲ以テ中學校令第十六號ヲ以テ諸學校通則ヲ定ム是レ現行法ナリ

○帝國大學令 明治十九年三月 勅令第三號

朕帝國大學令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

帝國大學令

第一條 帝國大學ハ國家ノ須要ニ應スル學術技藝ヲ教授シ及其蘊奧ヲ攷究スルヲ以テ目的トス

第二條 帝國大學ハ大學院及分科大學ヲ以テ構成ス大學院ハ學術技藝ノ蘊奧ヲ攷究シ分科大學ハ學術技藝ノ理論及應用ヲ教授スル所トス

第三條 分科大學ノ學科ヲ卒へ定規ノ試験ヲ經タル者ニハ卒業證書ヲ授與ス

第四條 分科大學ノ卒業生若クハ之ト同等ノ學力ヲ有スル者ニシテ大學院ニ入り學術技藝ノ蘊奧ヲ攷究シ定規ノ試験ヲ經タル者ニハ學位ヲ授與ス

第五條 帝國大學職員ヲ置ク左ノ如シ

總長

勅任

評議員

書記官

奏任

書記

判任

第六條 帝國大學總長ハ文部大臣ノ命ヲ受ケ帝國大學ヲ總轄ス其職掌ノ要領ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一 帝國大學ノ秩序ヲ保持スル事

第二 帝國大學ノ狀況ヲ監視シ改良ヲ加フルノ必要アリト認ムル事項ハ案ヲ具ヘテ文部大臣ニ提出スル事

第三 評議會ノ議長トナリテ其議事ヲ整理シ及議事ノ顛末ヲ文部大臣ニ報告スル事

第四 法科大學長ノ職務ニ當ル事

第七條 評議會ハ便宜ニ從ヒ帝國大學若クハ文部省ニ於テ開設ス評議會ノ議ニ付スヘキ事項左ノ如シ

第一 學科課程ニ關スル事項

第二 大學院及分科大學ノ利害ノ銷長ニ關スル事項

第八條 評議官ハ文部大臣各分科大學教授ヨリ各二人ヲ特選シテ之ニ充ツ

第九條 評議官ハ五箇年ヲ以テ任期トス任期滿ツルノ後時宜ニ依リ更ニ勤續ヲ命スルコトアルヘシ

第十條 分科大學ハ法科大學醫科大學工科大学文科大學及理科大學トス

法科大學ヲ分テ法律學科及政治學科ノ二部トス

第十一條 各分科大學職員ヲ置ク左ノ如シ

- 長 奏任
- 教頭 奏任
- 教授 奏任
- 助教授 奏任
- 舍監 奏任

書記

判任

第十二條 分科大學長ハ教授ヨリ特選シテ之ニ兼任ス

分科大學長ハ帝國大學總長ノ命令ノ範圍内ニ於テ主管科大學ノ事務ヲ掌理ス

第十三條 各分科大學ノ教頭ハ教授ヨリ特選シテ之ニ兼任ス

教頭ハ教授及助教授ノ職務ヲ監督シ及教室ノ秩序ヲ保持スルコトヲ掌ル

第十四條 各分科大學ノ教授助教授ノ人員ハ其學科ノ輕重及學生ノ員數ニ應シテ別ニ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

○ 師範學校令 明治十九年四月 勅令第十三號

朕師範學校令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

師範學校令

第一條 師範學校ハ教員トナルヘキモノヲ養成スル所トス

但生徒ヲシテ順良信愛威重ノ氣質ヲ備ヘシムルコトニ注目スヘキモノトス

第二條 師範學校ヲ分テテ高等尋常ノ二等トス高等師範學校ハ文部大臣ノ管理ニ屬ス

第三條 高等師範學校ハ東京ニ一箇所尋常師範學校ハ府縣ニ各一箇所ヲ設置スヘシ

第四條 高等師範學校ノ經費ハ國庫ヨリ尋常師範學校ノ經費ハ地方稅ヨリ支辨スヘシ

但尋常師範學校附屬小學校ノ經費簡易科ニ係ルモノヲ除クハ授業料ヲ以テ支辨スヘシ授業料ノミヲ以テ支辨シ能ハサル場合ニ於テハ其不足額ハ訓導俸給ヲ除クノ外尋常師範學校經費ヨリ支辨スヘシ(二十年勅令第三十號ヲ以テ但書追加)

第五條 尋常師範學校ノ經費ニ要スル地方稅ノ額ハ府知事「縣令」其豫算ヲ調整シ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第六條 師範學校長及教員ノ任期ハ五箇年トス滿期ノ後猶ホ繼續スルコトアルヘシ

第七條 尋常師範學校長ハ其府縣ノ學務課長ヲ兼ヌルコトヲ得

第八條 師範學校生徒ノ募集及卒業後ノ服務ニ關スル規則ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

第九條 師範學校生徒ノ學資ハ其學校ヨリ之ヲ支給スヘシ

第十條 高等師範學校ノ卒業生ハ尋常師範學校長及教員ニ任スヘキ

モノトス但時宜ニ依リ各種ノ學校長及教員ニ任スルコトヲ得

第十一條 尋常師範學校ノ卒業生ハ公立小學校長及教員ニ任スヘキモノトス但時宜ニ依リ各種ノ學校長及教員ニ任スルコトヲ得

第十二條 師範學校ノ學科及其程度并教科書ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

○小學校令 明治十九年四月 勅令第十四號

朕小學校令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

小學校令

- 第一條 小學校ヲ分テテ高等尋常ノ二等トス
- 第二條 小學校ノ設置區域及位置ハ府知事〔縣令〕ノ定ムル所ニ依ル
- 第三條 兒童六年ヨリ十四年ニ至ル八箇年ヲ以テ學齡トシ父母後見人等ハ其學齡兒童ヲシテ普通教育ヲ得セシムルノ義務アルモノトス
- 第四條 父母後見人等ハ其學齡兒童ノ尋常小學校ヲ卒ラサル間ハ就學セシムヘシ其就學ニ關スル規則ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ府知事〔縣令〕ノ定ムル所ニ依ル
- 第五條 疾病家計困窮其他止ムヲ得サル事故ニ由リ兒童ヲ就學セシムルコト能ハスト認定スルモノニハ府知事〔縣令〕其期限ヲ定メテ

就學猶豫ヲ許スコトヲ得

- 第六條 父母後見人等ハ小學校ノ經費ニ充ツル爲メ其兒童ノ授業料ヲ支辨スヘキモノトス其金額ハ府知事〔縣令〕ノ定ムル所ニ依ル
- 第七條 寄附金及其他ノ收入金アリテ小學校ノ經費ニ供スルトキハ其收入及支出ノ方法ハ府知事〔縣令〕ノ定ムル所ニ依ル
- 第八條 授業料及寄附金等ヲ以テ小學校ノ經費ヲ辨シ能ハサル場合ニ於テハ區町村會ノ議決ニ依リ區町村費ヨリ其不足ヲ補フコトヲ得
- 第九條 小學校教員ノ俸給旅費ハ府知事〔縣令〕ノ定ムル所ニ依ル
- 第十條 小學校資金ノ收入及支出ハ其管理者ヨリ毎三箇月府知事〔縣令〕ニ報告スヘシ
- 第十一條 小學校ニ屬スル資産ノ管理ニ關スル規程ハ府知事〔縣令〕ノ定ムル所ニ依ル
- 第十二條 小學校ノ學科及其程度ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル
- 第十三條 小學校ノ教科書ハ文部大臣ノ檢定シタルモノニ限ルヘシ

第十四條 私立學校ニ於テ小學校ト均シキ普通教育ヲ兒童ニ施サントスルモノハ豫メ府知事「縣令」ノ認可ヲ經ヘシ

第十五條 土地ノ情況ニ依リテハ小學簡易科ヲ設ケテ尋常小學科ニ代用スルコトヲ得但其經費ハ區町村費ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ

第十六條 小學簡易科教員ノ俸給ハ地方稅ヲ以テ之ヲ補助スルコトヲ得

○中學校令 明治十九年四月 勅令第十五號

朕中學校令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

中學校令

第一條 中學校ハ實業ニ就カント欲シ又ハ高等ノ學校ニ入ラント欲スルモノニ須要ナル教育ヲ爲ス所トス

二十年文部省告示第六號
ヲ以テ高等中學校ノ醫科
ヲ教授スル所ヲ醫學部ト
シ其位置ヲ定ム

第二條 中學校ヲ分テ高等尋常ノ二等トス高等中學校ハ文部大臣ノ管理ニ屬ス

第三條 高等中學校ハ法科醫科工科文科理科農業商業等ノ分科ヲ設クルコトヲ得

第四條 高等中學校ハ全國北海道沖繩 縣ヲ除クヲ五區ニ分畫シ每區ニ一箇所ヲ設置ス其區域ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

第五條 高等中學校ノ經費ハ國庫ヨリ之ヲ支辨シ又ハ國庫ト該學校設置區域内ニ在ル府縣ノ地方稅トニ依リ之ヲ支辨スルコトアルヘシ但此場合ニ於テハ其管理及經費分擔ノ方法等ハ別ニ之ヲ定ムヘシ

第六條 尋常中學校ハ各府縣ニ於テ便宜之ヲ設置スルコトヲ得但其地方稅ノ支辨又ハ補助ニ係ルモノハ各府縣一箇所ニ限ルヘシ

第七條 中學校ノ學科及其程度ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

第八條 中學校ノ教科書ハ文部大臣ノ檢定シタルモノニ限ルヘシ
第九條 尋常中學校ハ區町村費ヲ以テ設置スルコトヲ得ス

○諸學校通則明治十九年四月
勅令第十六號

朕諸學校通則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

諸學校通則

第一條 師範學校ヲ除クノ外各種ノ學校又ハ書籍館ヲ設置維持スルニ足ルヘキ金額ヲ寄附シ其管理ヲ文部大臣又ハ府知事「縣令」ニ願出ルモノアルトキハ之ヲ許可シ官立又ハ府縣立ト同一ニ之ヲ認ムルコトヲ得但寄附人ノ望ニ依リ其名稱ヲ附スルコトヲ得
第二條 寄附金ハ其寄附人ヨリ指定セシ目途ノ外ニ支消スルコトヲ得ス

第三條 學校幼稚園書籍館等ノ設置變更廢止其府縣立ニ係ルモノハ文部大臣ノ認可ヲ經ヘク其區町村立ニ係ルモノハ府知事「縣令」ノ認可ヲ經ヘシ其私立ニ係ルモノハ設置變更ハ府知事「縣令」ノ認可ヲ經ヘク廢止ハ府知事「縣令」ニ上申スヘシ
第四條 凡教員ハ文部大臣若クハ府知事「縣令」ノ免許狀ヲ得タルモノタルヘシ

第五條 公立學校ノ用地ハ免稅タルヘシ

○公立學校敷地無代價下渡坪數制限第十三年一月
第六號達
中小學區學校設立ノ地所無代價下渡ノ儀ニ付明治七年九月第三百三十一號ヲ以テ相違置候處今般教育令布告候ニ付テハ自今公立小學校ハ五百坪以內公立中學校公立專門學校ハ千坪以內ノ地ヲ該學校設置ノ地所トシテ無代價ニテ可下渡候條官有地ニ於テ無差支場所ヲ撰ヒ內務省ヘ可申出此旨相違候事
○公立學校敷地下渡方府縣ヘ委任ス十三年三月
內務省乙第八號達
本年第六號ヲ以テ布達相成候公立學校設置ノ地所下與候義更ニ其府縣ニ委任候條府縣限處分ノ後當省ヘ可届出此旨相違候事
但市街地及森林ハ此限ニアラス

○公立農學校等ノ敷地無代價下渡第十四號三月
 明治十三年一月第六號ヲ以テ公立小學校公立中學校公立專門學校
 等設置ノ地所ハ無代價ニテ可下渡旨相達置候處今般教育令改正
 布告候ニ付テハ自今公立農學校公立商業學校公立職工學校設置
 ノ地所モ公立專門學校同様可取計此旨相達候事
 ○公立農學校實驗用ノ地所無借地料使用定限第十六號十月
 公立農學校ニ於テ實驗用田圃ニ供スル爲メ官有地ヲ要スルトキ
 ハ每一校五町歩以內無借地料使用差許候條官有地ノ內差支ナキ
 場所ヲ撰ミ内務省へ申出ヘシ此旨相達候事
 ○教科用圖書檢定規則文部省令第二號
 明治十九年五月五號文部省令第七號教科用圖書檢定條例ヲ廢シ即範學
 校小學校及中學校教科用圖書ノ檢定ニ關スル規則ヲ定ムルコト
 左ノ如シ

教科用圖書檢定規則

第一條 教科用圖書ノ檢定ハ止テ圖書ノ教科用タルニ弊害ナキ
 コトヲ證明スルヲ旨トシ其教科用上ノ優劣ヲ問ハサルモノト
 ス
 第二條 圖書ノ出版者ハ該圖書ノ檢定ヲ文部省ニ請フコトヲ得
 第三條 第二條ニ依リ檢定ヲ請フ者ハ圖書一種ニ付其目的トス
 ル所ノ學校一種毎ニ該圖書二十部ノ定價ニ等シキ手数料及該
 圖書二部ヲ檢定願書ニ添ヘ地方廳ヲ經テ文部省ニ納ムヘシ但
 定價ヲ記載セサル圖書ニ就テハ手数料金十五圓ヲ納ムヘシ又

檢定ヲ得タル後定價ヲ増加シタルトキハ本文ノ例ニ準シ其差
 額ヲ追納スヘシ
 第四條 第二條ニ依リ檢定ヲ請ヒタル圖書中多少ノ修正ヲ加フ
 レハ檢定ヲ與フルコトヲ得ヘシト認ムルモノアルトキハ其廉
 フ檢定出願者ニ指示スルコトアルヘシ
 第五條 檢定シタル圖書ハ文部省ヨリ官報ヲ以テ其名稱冊數定
 價目的トスル學校并學科ノ種類版權免許又ハ出版屆ノ年月日
 並該圖書ニ記載スル所ノ著譯者及出版者ノ族籍住所姓名等ヲ
 廣告スヘシ
 第六條 檢定ノ効力ハ檢定ヲ得タル後修正ヲ加ヘタル圖書ニ及
 ハサルモノトス
 第七條 第五條ニ依リ廣告シタル定價版權免許又ハ出版屆ノ年
 月日并著譯者及出版者ノ族籍住所姓名等ニ異動ヲ生シ圖書中
 其記載方ヲ變更シタルトキ又ハ同條ニ依リ廣告シタル冊數ヲ
 變更シタルトキハ更ニ官報ヲ以テ其旨ヲ廣告スルニアラサレ
 ハ檢定ノ効力該圖書ニ及ハサルモノトス
 第八條 檢定ヲ得サリシ圖書ノ出版者ノ願ニ依リテハ其圖書ノ
 檢定ヲ得サリシ事由ノ大要ヲ指示スルコトアルヘシ
 第九條 檢定出願中ノ圖書若クハ檢定ヲ得タル圖書ニ修正ヲ加
 ヘ檢定ヲ請フ者ハ更ニ第三條ノ手数料ヲ納ムルコトヲ要セス
 第十條 圖書ノ出版者ハ其檢定ヲ得タル圖書コシテ第七條ノ變
 更アルニ會スルトキハ其事項ノ廣告ヲ文部省ニ請フヘシ

第十一條 檢定ヲ請ヒタル後其願下ヲナストキト雖モ其既ニ納
メタル手數料ハ之ヲ還付セサルモノトス

第十二條 本規則ニ於テ修正ト稱スルハ圖書ノ名稱ヲ變更シ文
章字句圖書ヲ増減若クハ校訂シ又ハ字體畫形ヲ變更シ又ハ註
解附録序跋ヲ加除若クハ變更スル等ノ場合ヲ包含スルモノト
ス

○舊檢定濟教科用圖書文部省令第三號

明治十九年五月文部省令第七號教科用檢定圖書條例ニ依リ檢定ヲ
得タル教科用圖書ハ本年五月文部省令第二號教科用圖書檢定規則

ニ依リ檢定シタルモノト同一ノ効ヲ有スルモノトス

○高等中學校經費支辨方明治二十年八月
勅令第四十號

朕高等中學校經費支辨ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

中學校令第五條ニ依リ高等中學校ノ經費ヲ國庫金ト地方稅トヲ以テ
支辨スル場合ニ於テハ該學校設置區域内ニ在ル府縣地方稅ノ負擔總
額ハ當分ノ内文部大臣之ヲ定メ各府縣分擔額ハ府縣知事協議ノ上之

ヲ查定シ府縣常置委員ノ互選ヲ以テ各委員三名ヲ出シテ之ヲ議定シ
其徵收方法ハ各府縣會ニ於テ議定ス可シ但地方稅ノ負擔額ハ該學校
經費總額ノ二分一ヲ超過スルコトヲ得ス

○高等中學校設置區域内府縣委員會規則明治二十年九月
勅令第四十六號

朕高等中學校設置區域内府縣委員會規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシ
ム

高等中學校設置區域内府縣委員會規則

第一條 委員會ハ九月若クハ十月ニ於テ高等中學校所在ノ府縣廳下
ニ之ヲ開ク其開閉ハ該學校設置區域内各府縣知事協議ノ上開會地
ノ府縣知事ヨリ之ヲ命ス會期ハ七日以内トス但各府縣知事協議ノ
上内務大臣ノ認可ヲ得テ開會ノ場所ヲ變更スルコトヲ得

- 第一條 委員ハ通常府縣會議ノ初メ委員會ニ於テ議定シタル事件ノ要領ヲ報告スヘシ
- 第二條 委員ノ任期ハ一會期限リノモノトス
但前任ノ者ヲ再選スルコトヲ得
- 第三條 委員會ノ書記ハ開會地ノ府縣知事其廳ノ屬官若クハ雇員中ヨリ之ヲ選任スヘシ
- 第四條 委員會ノ諸費ハ之ヲ各府縣ニ平分シ其府縣會議諸費ヨリ支辨スヘシ
- 第五條 府縣會議規則第三條第四條第五條第九條第十一條第二十五條第二十六條第二十七條第二十八條第二十九條第三十條第三十二條第三十三條ハ此委員會ニ適用シ其條項中府縣知事ノ職權ニ屬スルモノハ各府縣知事協議ノ上開會地ノ府縣知事之ヲ施行スヘシ

○學位令明治二十年五月勅令第十三號

朕學位令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

學位令

- 第一條 學位ハ博士及大博士ノ二等トス
- 第二條 博士ノ學位ハ法學博士醫學博士工學博士文學博士理學博士ノ五種トス
- 第三條 博士ノ學位ハ文部大臣ニ於テ大學院ニ入り定規ノ試験ヲ經タル者ニ之ヲ授ケ又ハ之ト同等以上ノ學力アル者ニ帝國大學評議會ノ議ヲ經テ之ヲ授ク
- 第四條 大博士ノ學位ハ文部大臣ニ於テ博士ノ會議ニ付シ學問上特ニ功績アリト認メタル者ニ閣議ヲ經テ之ヲ授ク
- 第五條 本令ニ關スル細則ハ文部大臣之ヲ定ム

○學位令細則二十年六月四號
本年五月勅令第十三號學位例第五條ニ基キ學位令細則ヲ定ムルコト左ノ如ク

學位令細則

第一條 博士ノ學位ハ左ノ區別ニ從ヒ之ヲ授ク

法科大學所設ノ學科ヲ專攻セシ者ニハ

法學博士

醫科大學所設ノ學科ヲ專攻セシ者ニハ

醫學博士

工科大學所設ノ學科ヲ專攻セシ者ニハ

工學博士

文科大學所設ノ學科ヲ專攻セシ者ニハ

文學博士

理科大學所設ノ學科ヲ專攻セシ者ニハ

理學博士

第二條 大学院ニ入り定規ノ試験ヲ經タル者アルトキハ帝國大學總長ノ具中ニ依リ文部大臣之ニ博士ノ學位ヲ授ク

第三條 文部大臣ニ於テ大学院ニ入り定規ノ試験ヲ經タル者ト同等以上ノ學力アリト思慮スル者アルトキハ帝國大學評議會ノ議ニ付シ評議官總數三分ノ二以上之ヲ是認スルニ於テハ文部大臣之ニ博士ノ學位ヲ授ク

第四條 博士ノ學位ヲ得ント欲スル者ハ文部大臣ニ申請スルコトヲ得但申請スル者ハ其履歷書及其專攻セル學科ノ範圍内ニ屬スル自著ノ論文一編ヲ差出スヘシ

第五條 帝國大學評議會ハ第三條ノ場合ニ於テ必要ト認ムルトキハ試験ヲ行フコトヲ得但試験ヲ受クルト否トハ本人ノ隨意トス

第六條 文部大臣ニ於テ學問上特ニ功績アリト思慮スル者アルトキハ博士ノ會議ニ付シ出席博士三分ノ二以上之ヲ是認スルニ於テハ文部大臣之ヲ開議ニ提出シ其可認ヲ得テ大博士ノ學位ヲ授ク

第七條 博士ノ會議ハ文部大臣指命スル所ノ委員之ヲ整理ス又博士二十名以上出席スルコアラサレハ之ヲ開カラサルモノトス

第八條 博士ノ會議ヲ開クトキハ五週日前ニ官報ヲ以テ開會ノ場所及時日ヲ廣告ス

第九條 第五條ノ試験ニ關スル規則ハ帝國大學總長之ヲ定ム

第十條 學位記ノ様式左ノ如シ

(學位記様式略之)

○第十七類 軍事

○徵兵令 明治二十二年一月
法律第一號

沿革略記

明治元年閏四月諸藩ニ令シテ石高ニ應シ兵ヲ徵ス○
三年十一月府藩縣士民ニ拘ハラヌ身體強壯ノ者ヲ選
ミ壹萬石ニ五人宛兵部省ニ差出スベキヲ令シ徵兵規則ヲ
定ム○五年十一月詔シテ全國募兵ノ法ヲ設クルコトヲ告諭
ス○六年一月陸軍省ヨリ徵兵令ヲ頒布ス○八年十一月第百
六十二號布告ヲ以テ前キニ陸軍省布ク所ノ徵兵令ヲ改正ス
○十二年十月第四十六號布告ヲ以テ前令ヲ改正ス○十六年
十二月第四十六號布告ヲ以テ前令ヲ改正ス○二十二年一月
法律第一號ヲ以テ前令ヲ改正ス是レ現行法ナリ

朕徵兵令改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

徵兵令

第一章 總則

第一條 日本帝國臣民ニシテ滿十七歳ヨリ滿四十歳迄ノ男子ハ總テ

兵役ニ服スルノ義務アルモノトス

第二條 兵役ハ分テ常備兵役後備兵役及國民兵役トス

第三條 常備兵役ハ分テ現役及豫備役トス

現役ハ陸軍ハ三箇年海軍ハ四箇年ニシテ滿二十歳ニ至リタル者之ニ服シ豫備役ハ陸軍ハ四箇年海軍ハ三箇年ニシテ現役ヲ終リタル者之ニ服ス

第四條 後備兵役ハ五箇年ニシテ常備兵役ヲ終リタル者之ニ服ス

第五條 國民兵役ハ滿十七歳ヨリ滿四十歳迄ノ者ニシテ常備兵役及後備兵役ニ在ラサル者之ニ服ス

第六條 各兵役ノ期限既ニ滿ルト雖モ戰時或ハ事變ニ際スルトキ若クハ臨時ニ演習或ハ觀兵ノ舉アルトキ若クハ航海中或ハ外國駐劄中ハ其期ヲ延スコトアル可シ

第七條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ兵役ニ服スルコトヲ許サス

第二章 服役

第八條 陸軍現役兵ハ毎年所要ノ人員ニ應シ壯丁ノ身材藝能職業ニ從ヒ步兵騎兵砲兵工兵輜重兵職工及雜卒ニ區別シ抽籤ノ法ニ依リ當籤ノ者ヲ以テ之ニ充ツ

海軍現役兵ハ毎年所要ノ人員ニ應シ沿海地方及島嶼ノ壯丁ヲ調査シ海軍ニ適スル職業ニ從ヒ水兵火夫職工及雜卒ニ區別シ抽籤ノ法ニ依リ當籤ノ者ヲ以テ之ニ充ツ但海軍志願兵徵募規則ニ依リ服役スル者ハ本令ノ限ニ在ラス

警備隊ヲ置キタル島嶼ノ壯丁ハ總テ之ヲ警備隊ニ充テ其地ニ於テ服役セシム但在營期限ハ一箇年以内トス

第九條 雜卒ノ現役期限ハ其職務ニ因リ之ヲ短縮スルコトアル可シ但常備兵役ノ全期ハ之ヲ減スルコトナシ

第十條 二十歳ニ至ラスト雖モ滿十七歳以上ノ者ハ志願ニ由リ現役ニ服スルコトヲ得

第十一條 滿十七歳以上二十六歳以下ニシテ官立學校帝國大學 撰科 及小學科ヲ除

ク府縣立師範學校中學校若クハ文部大臣ニ於テ中學校ノ學科程度ト同等以上ト認メタル學校若クハ文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學政治學理財學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ所持シ若クハ陸軍試驗委員ノ試験ニ及第シ服役中食料被服裝具等ノ費用ヲ自辨スル者ハ志願ニ由リ一箇年間陸軍現役ニ服スルコトヲ得但費用ノ全額ヲ自辨シ能ハサルノ證アル者ニハ其幾部ヲ官給スルコトアル可シ前項ノ一年志願兵ハ特別ノ教育ヲ授ケ現役滿期ノ後二箇年間豫備役ニ五箇年間後備役ニ服セシム

滿十七歲以上二十六歲以下ニシテ官立府縣立師範學校ノ卒業者ハ六箇月間陸軍現役ニ服スルコトヲ得其服役中ノ費用ハ當該學校ヨリ之ヲ辨償スルモノトス

前項志願兵ニシテ現役ヲ終リタル者ハ七箇年間豫備役ニ服シ三箇年間後備役ニ服ス

第十二條 禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ賭博犯ニ由リ懲罰ニ處セラレ

タル者ハ一年志願兵タルコトヲ許サス

第十三條 現役中殊ニ勤務ニ熟シ品行方正ナル者ハ歸休ヲ命スルコトアル可シ

第十四條 豫備兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ之ヲ召集ス平常ニ在テハ毎年一度六十日以内勤務演習ノ爲メ之ヲ召集シ又毎年一度簡閱點呼ヲ爲ス

第十五條 後備兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ豫備兵ニ次テ之ヲ召集ス平常ニ在テ勤務演習及簡閱點呼ヲ爲スコト豫備兵ニ同シ

第十六條 國民兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ後備兵ヲ召集シ仍ホ兵員ヲ要スルトキニ限り之ヲ召集ス

第三章 免役延期及猶豫

第十七條 兵役ヲ免スルハ癘疾又ハ不具等ニシテ徵兵檢査規則ニ照シ兵役ニ堪ヘサル者ニ限ル

第十八條 左ニ掲クル者ハ徵集ヲ延期ス次年ニ於テ仍ホ徵集ニ適セ